

NO.36
WINTER
1972

英語展望

ELEC BULLETIN

国際展望

横田喜三郎・前田陽一・西山千・外山滋比古・宮本昭三郎
「私の英語歴」市川房枝
鼎談“世界の中の日本とアメリカ”
Gerald L.Curtis・國弘正雄・金山宣夫

「Mother Goose の世界（その9）」
“Teaching the Telephone Book”
「日本のなかの身振り言語と翻訳」
“The Problem of Two-Word Verbs”
「世界における外国語教育」
「アジア地域英語教育専門家会議」

英語展望

NO. 36
WINTER
1972

ELEC BULLETIN

Edited by Fumio Nakajima

The English Language Education Council, Inc., Tokyo



【国際展望】

英語の帝国主義.....	横田喜三郎	2
東南アジアを巡って.....	前田陽一	4
Grandma がなぜ怒った?	西山千	6
アイルンド・フォーム.....	外山滋比古	8
東と西のあいだ.....	宮本昭三郎	11
私の英語歴.....	市川房枝	13

【鼎談】 世界の中の日本とアメリカ

Gerald L. Curtis, 國弘正雄, 金山宣夫.....	15	
Mother Goose の世界 (その 9)	平野敬一	32
Teaching the Telephone Book	Clifford V. Harrington	39
日本のなかの身振り言語と翻訳.....	小林祐子	43
The Problem of Two-Word Verbs.....	Ernest Richter	47
世界における外国语教育.....	星山三郎	51
アジア地域英語教育専門家会議.....	高橋源次	54
第 7 回国際音声科学会議のこと.....	安倍勇	60
【新刊紹介】『音韻論 I』.....	小栗敬三	61
展望通信.....		63

英語の帝国主義

YOKOTA, KISABURO
横田 喜三郎

グラナダの国際法会議

1957年4月に、スペインのグラナダで開かれた国際法学会 (Institut de Droit international) へ出席した。この学会は、1873年に設けられた古いもので、世界の国際法学者を会員とする世界的な国際法の学会である。会員の数を制限し、そのころには、正会員 (membres) が60人、準会員 (associés) も60人であった。現在では、準会員を72人に増加している。正会員に欠員ができると、準会員のうちから選挙によって補充し、準会員に欠員ができると、世界中の国際法学者のうちから選挙する。それだけに、世界中の優れた国際法学者で組織されており、高い権威をもっている。国際法学者としては、この学会の会員に選挙されることは、大きな名誉であり、本懐でもある。

日本からは、第二世界大戦の前に、安達峰一郎さん (ベルギー大使、常設国際司法裁判所長) が正会員に、立作太郎先生 (東京大学国際法教授)、山田三良先生 (同国際私法教授) が準会員になっておられた。安達さんは戦争前に、立先生は戦争中に亡くなられ、山田先生は戦争後に老齢のために辞職された。1952年に、わたくしが準会員に選挙され、1956年に、江川教授 (東京大学国際私法教授) がやはり準会員に選挙された。

この学会は、2年ごとに会議を開く。会員が少数であることもあるって、出席がなれば義務的になっている。第二世界大戦の前には、正当な理由がなくて3回連続して欠席すると、除名されるということであった。日本人の場合は、あまり遠方であるから、いくらかしんしゃくされたが、それでも、なるべく出席する必要があった。わたくしは、1952年に選挙されたが、それからまだ出席していなかった。1956年にやっと出席することができた。

会議は2週間にわたって開かれた。この学会では、用語がフランス語である。数年前から、英語を使ってよいということになった。もっとも、英語で発言するときは、はじめに、そのことを申し出て、議長の許可をえなければならぬ。そうして、英語で発言するときには、

フランス語の通訳がつけられる。フランス語で発言されるときには、英語の通訳はない。このことは、ヨーロッパ諸国の学者のうちには、とくに年をとった学者のうちには、英語のわからない人があることにもよる。しかし、そればかりではないようである。フランス語は正式の用語であるから、だれでも知っているはずであるが、英語はそうでないからという差別待遇の臭いがある。

実際にも、英語を使う人は非常にすくない。2週間の会議の間に、英語で発言したのは、アメリカのジェサップ (コロンビア大学教授、後に国際司法裁判所裁判官)、イギリスのウォルドック (オックスフォード大学教授)、わたくしの3人だけであった。

はじめに英語で話したのは、ジェサップであった。「わたくしは、英語で話してもよいという特権を利用することをお許し願いたいと思います」といって、ていねいに許可を求めた。それから、英語で話しあじめたが、会議の議題がフランス語で書いてあるために、それをフランス語で読みあげると、そのつぎはフランス語で話し続けた。すこしすると、フランス語で話していることに気がついたのか、英語の方が話しかかったのか、ふたたび英語に変わった。会員のなかには、顔を見合わせて、くすぐす笑う人もあった。

そのつぎに、ウォルドックが英語で発言を求めた。「わたくしも、英語で話したいと思います。しかし、わたくしは、フランス語とまぜ合わせた英語ではなく、純粹の英語で話すことになります」といった。会員は、おもわずどっと笑った。ジェサップも、頭へ手をやって苦笑していた。

それから数年たって、1963年9月に、プラッセルで国際法学会の会議が開かれた。そのころに、わたくしは、最高裁判所長官として、ヨーロッパ諸国の裁判所を視察していたので、くりあわせて、数日の間、会議に出席した。このときには、英語で発言するのに、いちいち議長の許可を求めるることはもう必要でなかった。フランス語と同じように自由に英語で話すことができた。まだフランス語で話す人が多かったが、英語で話す人もすこしふ

えていた。

アルハンブラ宮殿とジプシー・ダンス

グラナダでは、学会の会議の間に、いくらかの観光もあった。ついでに、その一つ二つを記しておきたい。

一つは、有名なアルハンブラ宮殿の見物である。小高い丘の上に、深い緑に囲まれた赤い屋根の宮殿は、数多くの塔に飾られている。遠くから眺めた全景は、堂々として美しい。中に入ってみると、繊細で巧致な彫刻の建築、噴水と彫像に緑の草木を配した内庭が実にすばらしい。サラセン芸術の最高傑作で、その異色な繊細さには、まったく魅了された。サラセン文化がこれほど高いものとは、思ってもみなかつた。

もう一つは、ジプシー・ダンスである。これはたびたび見た。はじめに見たのは、ジプシー村へ行ってである。国際法学会の会議へ出席するために、わたくしと同じホテルに泊っていた人々といっしょであった。ドイツのウェングラー教授(自由ベルリン大学国際私法教授)夫妻、ノルウェーのハンブロー教授(ベルゲン大学国際法教授)夫妻を加えて、10人ばかりである。ジプシーは、グラナダの町外れのサクロ・モンテという岡の麓から中腹にかけて住んでいる。その入口のところに、観光客にジプシー・ダンスを見せる家がある。20人ばかりのジプシー女がダンスをして見せてくれた。そのうちの3分の1くらいは、若く美しい娘であった。ダンスは、非常に情熱的であり、狂騒的でさえあった。ダンスそのものとしては、単調で変化が乏しく、あまり面白くない。そのうえに、踊るのは数人で、他のジプシーがまわりで拍手し、歌を歌うのがすこぶるやかましい。ウェングラー教授は、音楽ではなく、騒音だといった。たしかに、そうである。ひと通りダンスが終わると、ダンサーが客の間に入って来て、酒を勧め、自分も飲んだ。まったく偶然であるが、もっとも美しい2人の娘がわたくしの両側へ来て座った。帰りのタクシーの中で、ハンブロー教授が「君は運がいい」といって笑った。かれはわたくしよりもずっと若く、ハンサムであったが、運がなかつた。

その後にも、2度ジプシー・ダンスを見た。1度は、グラナダ市の主催で、歓迎のお祭りが催されたときである。余興として、市庁舎の中庭に高台を設け、スペイン・ダンスとジプシー・ダンスが踊られた。スペイン・ダンスは、アマチュアのダンスのコンクールで優勝したグループが踊った。なかなか優美であった。ジプシー・ダンスは、ジプシー村で見たと同じ人々の同じダンスであった。ただ、衣裳が美しい晴着で、それだけ引き立つて見えた。2度めは、市の有力者から招待されたときで、

その家でジプシー・ダンスがあった。このときは、ジプシー村の若い美しい娘が6人で踊った。たびたび見ていると、はじめは単調で騒々しいと思ったジプシー・ダンスにも、なにか親しみが感じられるようになった。

英語の帝国主義

グラナダの学会が終わってから、ヨーロッパの諸国を観光旅行した。ヨーロッパ旅行は、これで4度めであったが、東京大学を停年で退官する前年であったから、もうヨーロッパの見納めだらうとおもって、西ヨーロッパのほとんどすべての国を回った。その年の終わりに、おもいがけなく国際連合の国際法委員会の委員に選挙され、それから毎年ヨーロッパに行くことになるとは、夢にもおもっていなかつたのであった。

あちこちの国を回って、パリに行ったのは、5月の末であった。西村熊男大使がフランスの国際法関係の人々を昼食に招いて、わたくしを紹介して下さった。招かれた人々のうちには、パリ法科大学の国際法教授ルソー氏、アカデミー会員のバストイド氏(この人の夫人は、国際司法裁判所裁判官バードバンの娘で、パリ法科大学の国際法教授であるが、旅行中で出席できなかつた)、フランス外務省のバードバン氏などがおられた。

食事もすんで、サロンに移り、コーヒーを飲みながら、雑談しているときであった。なにかのきっかけで、国際会議の用語のことが問題になった。むかしは、国際会議の用語といえば、フランス語にきまっていた。ところが、第一世界大戦後から、だんだんに英語も用いられるようになった。第二世界大戦後には、むしろ英語が多く用いられるくらいになつた。最近では、英語の方がはるかに多い。そんな話をしていると、バストイド氏は、「これは英語の帝国主義だ」といって、残念がり、憤慨された。

バストイド氏をなぐさめるためでもないが、わたくしは、グラナダの国際法学会の会議のことを話し、ここでは、フランス語が君臨し、英語は小さくなっているといった。ジェサップのフランス語はじりの英語のこと、ウォルドックの「純粹の英語」のことも話した。バストイド氏も、「純粹の英語とはおもしろい」といって笑われた。しかし、その国際法学会でも、数年後のプラッセル会議では、フランス語の君臨も、いささかあやしくなつてゐた。英語がもう小さくなつてゐないで、フランス語とならんで、自由に用いられていた。バストイド氏が知られたら、いよいよ憤慨されたかもしれない。

(前最高裁判所長官)

東南アジアを巡って

MAEDA, YOICHI
前田 陽一

去る7月末から8月にかけての17日間、外務省の派遣した Cultural Exchange Mission of the Japanese Government to Southeast Asia の一員として、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの5か国を歴訪した。欧米にはいやというほど長くまた度々行っている私も、これらの国々には、寄港の際とか、空港内の立ち寄り以外には全く訪れたことがなかったので、見るもの聞くものみな珍しく、海外旅行ずれしている者にとっては望外に新鮮味のある旅であった。これらの国々で、大臣や学長から中学生、小学生に至る様な階層の人々と次々に会っては話を交えて行ったので、それから3か月経った今日では、当時の記録でも持ち出さないと、記憶がこんがらかってしまう程、多種多様な経験をした。その中から、本誌の読者にとって関心のありそうな、英語を中心とした言語問題について思い出を辿ってみたい。

最初に訪れたフィリピンは、英語(というよりは米語)が、これらの国の中で最も普及している国であった。小学校3年位から既に英語が主な教育用語である由であり、私たちが参観したマバ高校でも、フィリピン語(タガログ語)の授業だけがフィリピン語で、他は、数学や理科までみな英語で教えられていた。面白かったのは英語の授業で、その際女の先生(同国では女の先生が大多数の由)が、生徒の発音を直すのに、たとえば intonation と言うのに最後の音節の調子を一番高くしているのに気が付いた。それを聞いてみると、それまでにユネスコ其他で付き合ったフィリピンの人たちの何人かの発音の訛りを思い出された。それで分ったのは、これは最早訛りではなく、「フィリピン英語」の正規な発音と言るべきものであるということである。

そのユネスコの総会で、何回か一緒だった人に、文化問題を担当していた女性の代表があり、互の席が近かったこともあり色々と協力してきた。たまたま、フィリピン文化界代表者たちとの会談の際、そのリム博士がマルコス大統領夫人の代理というリーダー格で現われ、現在は厚生福祉大臣をつとめていると言われたのには驚いた。

文化に関心が深いというので特にわれわれを引見された大統領夫人を始め、家庭にまで招いて下さった、国連で有名なロムロ外相の一家、またこの女性大臣等の英語が流暢なのに不思議はないとしても、夫婦共高校教師出身という文部大臣、文部省の役人や新聞記者たちまで、われわれが接した各界の代表者たちはすべて自由に英語を話しているのには、今更ながら驚かされた。特別な職業以外では、夫々の分野で代表的立場にある人が英語を自由に話すというのは、全く偶然による例外というわが国の現状とは正反対であった。

次に訪れたタイの言語事情は、5か国の中ではフィリピンと最も遠く、わが国にそれに最も近かった。植民地にされたことがない、東洋でも珍しい国として、タイ語の地位は極めて高く、教育用語は高等教育まですべて自國語である。外国語としては、英語が第一で、上流階級には、フランスやスイスに留学してフランス語が流暢な人もいる。一般の人は苦労して英語を学んでいるのである。バンコクで2つの重要な大学を見学したが、タマサット大学の教養学部長の話では、学生に英語を自由に話す訓練をどこすることは困難なので、希望する学生だけに限って集中的訓練を行なう計画を進行中だとのことであった。同国第一の大学であるチュラルンコルン大学では、学長以下の幹部との話で、話す訓練は、L.L.施設を少し試みている程度で、思いにまかせないとの事であった。その際、日本では今日、世界中のありとあらゆる傾向の文学や思想書が自由に日本語に訳されており、学生たちが自分の教養のために読む本は一時代前と異なってほとんど全部日本語であると述べると、「それで思想的混乱が起らないか」と一同驚いていた。これでも分る通り、同国では、かつてのわが国でそうであったように、外国からの新思想に接するためには、自國語では足りず、少なくとも読む能力は必要なようである。話すこととも、各界の代表的地位にある人で充分できる人は、日本より遙かに多く、われわれが接した人々は、ほとんどみな英語の通訳は必要としなかった。長年フランスで学んだことのある、タナット・コーマン外相も流暢な英

語で、話が留学生問題になると、「日本の大学に優秀な学生をもっと送りたいが、日本語のむづかしいのが大きな壁となっている。英語を使える学生はずっと多いので、日本の大学でも、課程の一部分でもよいから英語で教えるところを設けて頂ければ幸いである」と述べられた。翌日のパーティーで再会した際も、「昨日お願ひしたことを忘れないで下さい」と重ねて言われた。

第3に訪れたマレーシヤは、独立後まだ14年で、言語問題が最も重要な問題の一つになっている。それまでイギリスの植民地であったので、教育は英語中心で、上に進めば進む程、英語だけで教育が行なわれていた。しかし独立後は、マレイ語を国語として、それを全国に普及することを国家統一の重要な柱としているため、強引とも見える程の普及策をとっている。以前は、小学校初年では、教育用語としてマレイ語、英語、中国語、タミール語、小学の後年からはマレイ語か英語、高等教育は英語となっていたのを、昨年より、小学校1年から全部マレイ語だけで、それを年ごとに上に及ぼし、1982年には中等教育全部をマレイ語で行ない、次で高等教育も、昨年より小数の者だけがマレイ語で学ぶようになったのを、全学生に及ぼす計画である。あまりの性急さで、これで果してよいのか他人事ながら心配であるが、同国では国語政策に反対意見を表明すると罪になるので、打ち明けた意見を聞くことはできなかった。このマレイ語普及策の成否はともかくとして、現在の時点では、成人はみな從来の教育制度で育った人たちであるから、各界の代表的人物が自由に英語（ここではイギリス語）を話すのは言うまでもない。

4番目に訪れたシンガポールは、過半数の住民は中国系で、政府の要人も多くそうであるが、長い間イギリスの植民地であったため英語は極めて普及している。正式の国語はマレイ語で、マレイ語、英語、中国語及びタミール語の4つの言葉が公用語となっている。学校では、英語を主とする生徒が過半で、中国語がそれに次いでいる。大学は、英語と中国語のものが一つずつある。驚いたことには、原則として小学校1年から2つの国語を並行して教えている。「そんなことをして子供の頭が混乱しませんか」と文部次官にたずねたところ、「そうかも知れないが、ここでは、必要上そうせざるを得ないです」とのことであった。各界の代表者たちは、中国系の人でもみな流暢な英語を話したが、一つ面白かったのは、文化界の代表の人たちと会った時は、彼らがみな英語を知っていることは、通訳を介しての会談でも明らかであったにも拘らず、向こうは中国語、こちらは日本語で話したことであった。これは同国における中国語の位置を

われわれに印象付けたいためだと思う。この会談の際印象深かったのは、タイのチュラーンコルン大学の学長たちに話したように、あらゆる傾向の思想が日本語に訳されていることを話し、「中国語もおそらくそうでしょう」と尋ねたところ、「いやそういう訳には行きません。中共、台湾いずれも自國に都合のよい思想しか訳させませんから、世界の進展に遅れをとらないためにはどうしても英語が必要です」と素直に答えてくれたことである。

最後に訪れたインドネシアは、インドネシア語による統一がかなり進んでおり、大学までインドネシア語で教育が行なわれると聞いていたし、更に独立前まではオランダ語が勿論第一であったから、英語の普及度はタイ語と同じ位であろうと予測して行った。ところが、少なくとも中央の指導層に関する限りは、思いの外英語（ここは主として米語）を自由に話す人が多かった。今日の政権では、米国留学の人が、米国のそれぞれの重要大学毎の学閥さえ作っていることが珍しくないようである。

出発前からの依頼で、英語での講演とテレビのインタビューを行なったが、おそらく通訳付きだろうと思っていた。ところが、講演の方は、400人以上を前に通訳なしで1時間も行なったのに、熱心に聞いてくれたのには驚いた。英語での普通の講演に、東京でこれだけの人数が集まるのは珍しいのではないかと思う。テレビの方も英語だけなのには尚更驚かされた。このテレビ局の視聴者は10万位の小数で、テレビを持つ位の階層の人には英語の分る人が多いから、英語だけの番組も少なくないのだそうである。また一同で見学したジャカルタ第11高校でも、校長や先生たちばかりでなく、生徒代表まで英語を楽に話しているのには、感心させられた。

この稿を書く頃テレビでよく見かけた、国連総会議長のマリク外相とも会見し、国連大学の話などをしたが、新聞などで報道されているように英語が不自由というのは気の毒で、わが国の大蔵でこの程度自由に英語が話せる人が果たして何人いるかと考えさせられる。

この旅行を通して今更ながら感じさせられたのは、わが国の各界の代表者たちの間に、英語その他の国際語が自由に話せる人が、これらの国に比べて際立って少ないということである。これは他面日本語で何から何まで読み、用が足りるという国内的には実に恵まれ、近年の経済成長の一大要因となっている事実の結果なのであるから、そのこと自体は大いに喜び、誇りにしてよいことである。そうかといって、日本語の通用範囲が極めて限られている以上、国際語を自由にあやつる人を各界に配置するための施策をもっと真剣に考えなければならない時が来ていると思う。

（東京大学教授）

Grandma がなぜ怒った？

NISHIYAMA, SEN

西山千

日本に長年滞在していたカナダ人の友人が笑いながら次のようなエピソードを話してくれた。私たちが親しかったアメリカ人の老婦人が、ある会合のとき、非常に不愉快な表情をしているので、友人が“What's wrong, Grandma?”（注：彼女は極く少数の知り合いの間での“Grandma”という愛称で知られていた）ときいてみた。

するとこの老婦人が日本人の学生を指していった。

“See that student over there?”

“Yes”と友人が合槌を打つと、

“Well. He called me a ‘foreigner’!”と彼女がかんかんになっていた。

友人はこの学生は決して foreigner ということばを軽蔑の意味で使ったわけではなく、「外人」という日本語にはむしろ多少の尊称の気持すらあるのだ、ということを説明した。しかし彼女は，“Well, anyway, it sounded like an insult to me!”といつて、なかなか虫が治まらなかったそうだ。

これは数年前の話であったが、また最近の英字新聞に外人の投書があって、その投書者も ‘foreigner’ といわれて不愉快だと訴えていた。さらに彼は日本語の「外人」ということばは ‘outsider’ という意味だから、「“Jap”といわれていやがる日本人と同じように、われらは『外人』という軽蔑的な俗称を不快に感ずる」という意味合いの抗議をしているのである。

この外人はどの程度日本語を勉強しているのかわからないが、‘foreigner’ という英語だけに論を限っておけばよかったです。「外人」という日本語にまで言及すると、こちらもひとくさり抗議（講義も）してやりたくなる。おまけに、「彼は私たちを『外人』といわないで、『外国の方』といってほしい」とまで注文をつけ加えているから、恐らく生半可な日本語の知識しかもっていないのだろう。日本語が少し話せるようになって、この不思議な難解なことばを使える少数の言語学権威者になったようなつもりで、日本語について得意げに他の外人に説教する外人に私は時折り会うことがある。この投書者がそんな軽率な外人であるかどうかは知らないが、日本語に注

文をつけるとは恐れ入った。彼は日本語の対訳を英語で見て、それに頼って日本語を勉強し、英語のセマンティクをそのまま日本語に当てはめているのだろう。

‘Foreigner’ という単語を普通の英語の辞書で引いても別に悪い意味にとれそうな定義は見当らない。しかし実際は ‘foreigner’, ‘alien’, ‘outsider’ などには不快感を伴う意味が含まれる場合がある。

アメリカなどのように、移民によって國の大半が築き上げられた社会は、「外人」の寄り合いの社会ともいえる。しかしその社会がある程度定着すると、それ以後に現われる外来者に対しては一応の警戒をした。しかも多くの外来者は、新たに到着した移民であって、身なりがみすぼらしくて英語はほとんど話せない人たちであった。ジョン・スタインベックが “America and Americans” (The Viking Press, 1966) でいっているように、安い賃金で働く移民に対して、それ以前から定着している民族が敵対意識まで抱いていた。「アイルランド人が憎まれる立場におかれまるまでドイツ人が自衛のために結集していたし、それからアイルランド人が“アメリカ人”となってポーランド人、スラブ民族、イタリア人などに対抗したことかえりみれば」、このことがよくわかるとこを指摘している。

このような社会の中で、子供が大人の話を聞いたり、子供の間で交わされる意見や偏見によって「外来者」に対する異和感と軽蔑の気持が培われる。それが ‘foreigner’ という単語と結びついている。

それでも ‘foreigner’ はまだ比較的中性の単語と受けとられる場合がある。同じ意味の ‘alien’ はアメリカでは一層の軽蔑と偏見の意味に受けとられる場合が多い。アメリカの政府はアメリカ国籍でない者を ‘alien’ と称しているが、それは全く普通の辞書の定義の通り何ら軽蔑した意図はなかった。ところが前述の移民に対する偏見と結びついた用語のように考えられて、‘alien’ に不快な感じをもつようになってしまい、それで今日は ‘foreign nationals’ とか、‘other nationals’ などの呼び方がだんだん多くなっている。

私は外人と話し合っているとき，“foreigners”というと気にさわりそうな場合、どういっていいのか戸惑うことがある。仕方がないから“non-Japanese”といった造語でごまかすときもある。特定の国籍の外人しかいない場合は、その国民の名称を使う。また“those from other countries”などと、ややこしい表現になるときもある。相手の国語（英語）を使うときは、相手の受けとり方、つまり相手の考えるセマンティクにしたがわなければならぬ。どんなに定義だけは無色のものであっても、セマンティクが長年の伝統と経験で色づけられていれば、どうしてもそのセマンティクを尊重する必要がある。日本に在住する外人に“alien registration”を要求する日本政府も、この点を考慮して別の表現を使うようにならうか。

しかし日本語はわれら日本人の国語であって、「外人」という名称は相手を軽蔑しているものではない。英字新聞への投書者のようにどんなに外人が訴えていても、日本語に関しては通用しない。彼の英語に対する抗議には耳を傾けるべきである。

これほどの悪感情は、同じアメリカ人の間でも最近は薄らいでいる向きもある。またアメリカの地方によって異なるだろう。自分がアメリカへ行って、“I'm a foreigner”といつても、自分を悪くいっているようには受けとられない。

ついでだが、‘stranger’という単語はアメリカではそれほど悪い意味にとられない。昔の西部で“Howdy, stranger,”と町に新たに到着した来訪者にあいさつすることばは、あたたかみのこもった歓迎の意味も含まれていた。一種の素朴なことばであった。しかしこの単語も，“strangers welcome”的場合と“strangers keep out”的場合とでは、その土地の事情によって感じ方が異なる。

よくいわれることであるが、日本語をそのまま英語の対訳にすると、意味がわからなかったり誤解を招いたりする。また英語から日本語化した新語を、逆に英語にしても意味が通じない。「ウエット」とか「ドライ」をそのまま‘wet’と‘dry’といったら、とんでもない意味を受けとられるかも知れない。赤ちゃんのおしめを取替えなければならないときは赤ちゃんが“wet”である。“The Japanese people are inclined to be wet”などという、赤ちゃんを連想するか，“wet behind the ears”という未熟さの比喩を連想するかも知れない。また“You're all wet”という表現は「全く間違っていますよ」という意味の俗語であるが、日本人はそういう状態であると思われる可能性がある。いづれにしても、日本

的な「ウエット」の意味はどこにもない。私はアメリカ人にこの表現について相談してみたら、彼は一晩考えて翌日“How about ‘wet-eyed’ and ‘dry-eyed’?”と提案してくれた。なるほど日本語のウエットもドライも目の状態を比喩しているのだろうから、適訳かも知れない。

「低姿勢」を“low posture”と訳した英語の記事をよく読んだ。最初は外人がこの新しいことばの意味をいろいろ論じていた。外人記者が本国に送る記事にこの表現を使うようになった。それが最近になって，“low profile”という表現に変わってアメリカの新しい外交政策の性格を形容するようになったらしい。つまり、ニクソン政策の一部としてアメリカの軍事的な存在を従来ほど強く打ち出さないで、世界秩序の責任をもっと各国と分担し合おうとする姿勢は、アメリカが世界で大きな突起物のようにそびえ立つのではなく、もっと低くなることを連想させる。それは日本のいう「高姿勢」から低姿勢に変わることであるが、それが“low profile”といわれている。

「サービス」をそのまま英語で‘service’というと、意味が相当変わってしまうときがある。日本では、無料でなにか物か労力を与える意味に使うが、それなら英語では“free service”といわないと、‘service’は料金つきのものであっても不思議でないから誤解される。表現の簡単な問題でも案外むつかしい。

「前向きに検討する」という日本語を“study with a forward-looking attitude”といつても、何の意味かさっぱりわからない。もちろん日本語の表現そのものがきわめて曖昧だから英語で意味がわからなくても仕方ないというのなら、そのままであるが、やはり英語で自然に表現できたら、それだけよいことになる。“Positive approach”とか“favorably”というと「前向き」よりは積極的すぎる。むしろ“study the matter”とだけいって「前向き」の訳を無理に入れないので自然であり、そのことばのなかに英語では前向きの態度が含まれているといえないこともないだろう。むつかしい。

このような日英の対訳は、通訳、翻訳などの作業に常につきまとう問題である。文化を異にする言語はセマンティクに支配されるから注意しなければならないが、翻訳の場合は訳を十分吟味する時間の余裕がある。しかし通訳の場合、特に同時通訳の場合は時間的余裕が全然ない。それだけ誤差も入りやすい。

学生が無邪気に“foreigner”といったが、もし彼が日本語で話していて私が通訳していても、やはり‘Grandma’を怒らせたかも知れない。

(国際コミュニケーション)

アイランド・フォーム

TOYAMA, SHIGEHIKO
外山滋比古

ナショナリズム

日本人はどうしてこんなに外国が好きなのであろうか。そういう感慨をいだいている人はすくなくない。本屋へ行けば翻訳書がはんらんしており、金とひまのありそうな人はみんな外国旅行をしたがっており、まだ、日本語の方が心もとないような子供まで英語学校へ通っている。なるほど外国好きといわれても、これでは、しかたがあるまい。

ところが、これとは別に、気になることがないでもない。あこがれの外国旅行から帰ってくる人たちが申し合わせたように、愛國者になってしまっていることである。自分の国を大切に思うことは悪いことではないが、いささか豹変がひどすぎる。ついこの間まで、日本なんかろくなことはない、青い鳥はすべて海外にいる、というようなことをいっていた人間が、手のひらを返すように、日本ほどいい国はない、とおっしゃる。

中学校へ入ってきた生徒に、どの学科がいちばん好きか、ときくと、英語が圧倒的である。ところが、中学3年間、英語を勉強して、卒業時に、嫌いな学科は何か、ときくと、やはり英語が圧倒的であるという。また、英語の本を買い、読後感を書くカードに、「どうして英語なんかやるんか」と書く若ものがたくさんある。

外国をあこがれる気持はきわめてつよい。何としても外国へ行ってみたい、外国語を勉強してみたい、と思っているが、すこし実際にふれると、こんどは急転直下、外国的なものにそっぽを向く。はげしいのになると、ナショナリズムをふりまわすようになってしまう。いまの日本には、そういう、にわかナショナリストが、自覚症状もなく、うろうろしている。あまり安全な社会とは申しかねる。最近の緊迫した国際情勢の中におけるわが国の孤立感がそれに拍車をかけていることも事実である。

外国がよいとなると、外国でなくては夜も日も明けない。盲目的な傾倒で、まことにひたむきである。外国にもよいところがあるが、わが国にも秀れたところがある。外国を理解するには自国を理解していなくてはなら

ない、などとは考えないで、外国一辺倒になる。

輸入がよいとなると、輸出ゼロで、もっぱら輸入のみを行なう。たちまち入超になるから、そうそう輸入をつけられない。これはものの貿易も文化の摂取も同じことである。腹いっぱい輸入すると、飽和状態になり、もうおことわりということになる。きのうまで憧れの的であったものが、きょうは見るもうとましいものに変わってしまう。外国気違いがナショナリストに早変わりということになる。その転向はいかにも唐突である。

これはわれわれの社会が島国的形式をもっているためである。島国という語には先入主があるので、ここでは、アイランド・フォームという呼び方にしたい。アイランド・フォームの社会は、外国に対して異常な関心をもっているが、その関心が正常なはけ口をもたないまま、内攻して、ときに思いがけないあらわれ方をする。

大体において、外国の影響がすぐ飽和点に達して、反撲、反動をまねきやすい。一時は外国のものなら何でも歓迎していたかと思うと、すぐ外国がうとましくなってくるという変化がおこる。盲目的外国崇拜と愛國的鎖国がコンティネンタル・フォーム（大陸形式）の文化では考えられないほどの短かい周期で循環する。

こういうことは、日本歴史を見れば、いくらでもころがっている。もっとも大規模なのは、唐文化摂取の経緯であろう。いのちがけの遣唐使を送って中国文化をとり入れて、ほぼ百年たつと、もう遣唐使を廃止してしまう。「日出する国の天子、日没する国の天子に書を致す」というようなプライドをもつようになる。明らかに、ナショナリズムの抬頭である。そして、漢字から仮名をつくり、平安朝の女流文学の花をさかせた。やはり文化的鎖国であるといってよい面がある。

アイランド・フォームの先輩はイギリスである。われわれは、明治以来、西欧文化のお手本としてイギリスに学んできたけれども、イギリスがアイランド・フォームという特殊性をもった社会であることにはあまり注意してなかった。これは片手落ちである。イギリスがヨーロッパを代表し得ないことは、E C加盟にあたってイギリ

スがなめた苦汁ひとつとっても、明らかである。イギリスはヨーロッパ的ではないと、かって、ドゴール大統領がいい放った。アイランド・フォームの故である。

しかし、イギリスがたんにアイランド・フォームに安住していたならば、7つの海にユニオン・ジャックをなびかせることなどできるはずがない。鎖国的な文化を脱出する努力が営々としてつづけられていたのである。

その中でも目ざましいのはマシュー・アーノルドの島国性矯正の文化運動であろう。19世紀中葉、ヴィクトリア朝の英国は経済的繁栄を謳歌していた。植民地は世界にひろがっていたが、本国イギリス人は自國文化に過信して、一種の鎖国性さえ認められた。これに警鐘を鳴らしたのがアーノルドで、彼は、大陸文化の撰取を緊要なこととして朝野に説いたのであった。

それは、アイランド・フォームのイギリスがグローバルな存在になるのに必要な段階であったといつてよい。

われわれの国は、アイランド・フォームということに気づかないほど、アイランド・フォームがつよい。経済において、日本はいまやグローバルな大国であるらしいが、心情的には、アイランド・フォームのままである。これでは、破綻は必然的である。かって、軍事的にグローバルな大国であった日本が、アイランド・フォームから生じたナショナリズムを処理しそこねて、みじめな破滅に向わなくてはならなかつたことを、やはり憶いおこさなくてはならないのであろうか。

国際感覚

このところ、国際問題がにぎやかである。日米織維問題、ドル・ショックに円の切り上げ問題、国連中国承認、沖縄返還とまさにたてつづけの感がふかい。両陛下ご訪欧もこの中に加えて考えてよいかも知れない。

われわれ、しろうとの一般国民は、これらの国際問題が、どうもうまく処理されていないという不満をもっている。その不満のはけ口をもつて専門家はよいが、そうでない庶民は、内攻して外国へ対する反感をもちかねない。ナショナリズムへの圧力がかかる。アイランド・フォームの国では、そうならざるを得ないのである。このことを識者はとくと心に留めておいてほしい。気がついたときにはもう手のつけられない力になって、国の運命を誤らせる方向に突っ走っている、というようなことはくりかえしたくないものである。

わが国の指導者層に、いつもナショナリズムに迎合する風潮があるのは、これまた、アイランド・フォームのあらわれだが、反省しなくてはならないことである。下手に火をつけて爆発させたら、とんでもないことになる

ものだという認識が不足している。

アイランド・フォームの社会では、親しい人間の間の交際ははなはだこまやかである。縁故、派閥、学閥、門閥といった閉鎖的小グループがよく発達している。腹芸が通る。野暮はきらわれ、以心伝心が尊重される。気心の知っている人間だけとつき会えばよい。同質的なものの中における洗練がすすむのである。

したがって、内弁慶が多い。座談はおもしろいが、スピーチをやらせると、退屈きわまりなしといった名士が多くなる。人見知りするのである。初対面の人にも腹芸が通用するように思っていて、それが、うまくいかぬと見ると、ふたを閉じた貝みたいになってしまふ。至近距離のコミュニケーションは得意だが、遠距離のやりとりは苦手だという。外国人相手だとどうしてよいかわからないのが普通——これがアイランド・フォームの交際感覚である。

ここでは、専門家である外交官のことは考えないことにする。われわれのひとりひとりが外交感覚がないのに、外交官だけ責めても、それは酷というものだ。

遠いもの、未知のものに触れて、おもしろいと思う気持ちが発達していない。珍らしいと感心はしても、ただ、それだけのこと終わってしまう。すんで、それから新しいものを学びとろうとしない。ブルーノー・タウトは日本へ来て新しい建築美を発見した。ラフカディオ・ハーンは日本の民話のすばらしさを見つめた。ところがわれわれが外国や外国人に接したときには、そういう出遭いがすぐないのである。

したがって、お互いの個性を認め合った交友がすくない。外国人の友だちというのも上べだけのきれいごとであるのが普通だ。島の内ではいやでもみんなつき合っているが、一歩国外へ出ると、語るべきものをもっていない。外国語ができないということではなくて、何を話したらよいかという国際感覚が欠けているのである。

最近まで、日本は政治のない経済だけの繁栄だというようなことがいわれて、われわれのような人間は、そうなのかなと思っていた。ところが、このごろの国際的経済問題を見ていると、経済もやはりだめなのではないかという感じをもつ。国内では偉そうな顔をしているのは両者ともかわりがない。政治の方は国際外交ではまるで問題にならないが、相手を納得させることばをもっていないのだから当然である。

そこへ行くと、物を売るのは、値段が安ければ、黙っていても買ってくれることがある。これまでの日本の輸出伸長はそれであったといってよい。それがすこし度がすぎると、相手側から待ったがかかる。さあ、そこで話

し合いと説得が必要になってくるのだが、ここに至ると、経済も政治と同じように語るべきことばを知らない。したがって、国際的孤児になってしまう。経済よ、お前もか、というわけである。

ものを作り、それを売るというだけでは「大国」にはなれないのだ。苦情が出たら、それをなだめ、けんかを売ってくる奴がいたら、うまくかわし、自分の立場を冷静に、論理的に主張して、結局は相手側からも一目置かれるようにしてしまう。そうでなくては、国際競争などに勝てるわけがない。国際感覚ゼロで商売万能主義をふりまわすものだから、またたく間に、あちらでもこちらでも、反日感情をつくってしまう。そこから出てくる排日的現象だけを目のたきにしてもしかたがない。

商売のためばかりではなく、いまのわれわれにとって、アイランド・フォームの欠点である没国際感覚を改めることが焦眉の急である。さもなければ、ナショナリズムがいつなんどき爆発するかもしれない。

外国旅行をすれば、ナショナリストになって帰ってくる。外国語を勉強すれば、外国語嫌いになってしまう。よくよく、われわれには国際感覚ができにくくなっているのであろう。自然の生活をしていれば、一生に何度もくらいいしか、外国人を「見」ることもない。ほとんどの人が外国人と口をきくことなどなくて生涯を終わる。外交感覚がないのはむしろ、伝統的純血の中を流れている国民的特性だといるべきかもしれない。

新 語 学

アイランド・フォームの欠点を改めるのにはどうしたらよいか。

やはり、考えられるのは、学校教育であろう。それでは、どの学科で、ということになるが、常識的にいっても、まず、外国語教育ということにおちつくのではあるまいか。ここ15年間、わが国の学校における外国語教育は、経済先導型であったといってよい。それが「役に立つ英語」というスローガンになった。学校の語学はその線に沿って「改善」された。学校側も及ばずながら努力はした。その結果はどうであったであろうか。

「役に立つ英語」は結局、学校の教室では無理であるということが、ようやくはっきりしてきた。語学は学校から出て街頭へ中心が移りつつある。それはそれでよいのだが、「役に立つ英語」をやった人たちの語学が本当に役に立ったであろうか。国際人としての修練も積まないで、ただ、外国語をしゃべるというような島国人は、実用的視点からしても、プラスであるといい切ることはできないであろう。

むしろ、なまじっか、実用的語学を身につけたばかりに、諸外国から嫌われものにされるような行動が目立つようになったのかもしれない。実利実益からしてもこれは決して得策ではない。

このままでは、学校の外国語教育なんかやめてしまえという世論になりかねない。すでに、高校の選択制、中学校の標準時間の一時間減など、その前ぶれと見られる動きがはっきりした形をとっているだけに、たんなる取り越し苦労と片付けるわけにはいかぬだろう。

学校の外国語教育は新しい語学の理念に立って再編されるべきであると思う。

国民の心に根づいているアイランド・フォームの弊を語学によってなんとか改めるのである。外国といえばやみくもに飛びついたり、逆に、外国のものはすべてけしからんと排斥したりするような外国アレルギーをとることを目指すのである。

それには、外国語によって、「異質なもの」(foreignness)に対する、免疫と抗性をどうしたらつくることができるかを考えなくてはならない。

これまでの英語教育は、学習者が「あたかも、イギリス（アメリカ）人であるかのように」英語を勉強することを理想としていた。いいかえると、なるべく違和感のすぐないものとして、「自然に」学習するのがよいとされた。

こういう、ナチュラル・メソッド的学習では、フォリンネスに対する免疫をつくる役には立たない。口さき手さきの英語は上達するかもしれないが、メンタリティの方はひどいアイランド・フォームのままということがあり得る。どうしても、英語に対する、心理的抵抗を緩和して、やがて、一般に異質なものへの情緒過多の反応を矯正するようにしなくてはいけない。

アイランド・フォームという温室に育ったわれわれは、外の冷たい風にふれると風邪をひきやすい。これから日本人はそれではこまるから、すこしづつ冷たい水をかぶって、体を鍛錬しなくてはならないのである。そして、これは、外交官や外国貿易に関係する人たちだけでなく、無自覚的ナショナリストになりがちな、すべての日本人にとって必須の教養である。

英語はかつてアイランド・フォームの国であったイギリスの国語である。そのイギリスがグローバルな活動をしてきたこと、また、アメリカが英語をコンティネンタル・フォームとして用いていることを考え合わせると、ここでも、わが国の外国語教育における英語の重要性が改めて納得されるのである。（お茶の水女子大学教授）

東と西のあいだ

MIYAMOTO, SHOZABURO
宮本昭三郎

11月の声を聞くと、つい私はロンドンの町かどでいくとも眼のあたりにした Guy Fawkes' Day の夜の光景を思い出す。ざわめく Pub の入口から流れ出る黄色い光りと、特有の甘ずっぱいにおい。ぼろぼろのオーバーか何かを着せた Guy をひきずり、出入りの客に歩みよっては、花火を買う金にするのか、'Penny for the Guy please.' と手をさしのばしている子供たち。そのきまったくうすよごれた顔と、貧しげな身なり。そこには「Hard Times」時代の名残りがまだ漂っているようでもあった。この頃になると、濃霧がやって来るともおおく、そんな夜チームズのほとりに立つと、音もなく川面におりる鉛色のとぼりのかなたに、Big Ben の文字盤だけがぼんやりと黄色く浮んだ。

【東と西】

日本に帰ってから 2 年あまり、こうしてふりかえる英國、そしてヨーロッパは、はるかかなたにある。ということはもちろん物理的な距離を意味しているのではない。戦後、日本と欧米との距離は、ある意味でたしかにせばまた。わずか十数時間の飛行のちヨーロッパの空港におりたつ人たちの胸には、一ヶ月半の船旅をすごしてマルセユについていた人たちの感慨はない。また情報伝達が急速に発達し、人間や物資の交流がさかんになるにつれて、日本人の生活のなかに欧米の生活様式や物資が、おどろくほどの早さと量をもって入って来た。生活的あらゆる分野で眼にし、耳にする片仮名のヨーロッパ語は、第二の「鹿鳴館時代」といった印象さえ与える。

だが、欧米との時間的な距離が短縮し、欧米の文物にいかに親近感をおぼえても、それは日本と欧米とが精神的に近接したことと意味するのであるまい。生活様式の欧米化という現象の底には、東と西という根本的なちがいが横たわっている。それはコトバのちがいであり、思考の論理のちがいである。私たちが英語でものを書くとき苦痛になることは、個々の単語をさがすことではなく、その文章に英語の論理を一貫して与えることであろう。個々の文は正確であっても、全体から見て不明瞭な

のは、表現の適切さはもとよりのことだが、根本的にはその論理がかけていることであり、それはふつう私たちが持ちあわせていないものである。

コトバ、そしてその背後にある思考の論理のちがいは、当然生活態度のちがいともなって現われる。おおくの欧米人にとって、日本語はまったくあいまいなコトバであるし、日本人の態度そのものが、何事についても間接的で、どっちつかずのように見える。欧米人の自己表現は徹底的であり、それは愛憎の表現においてもっとも鮮明に現われるといえよう。私はロンドンでおおくのユダヤ系の人たちと交友をむすんだが、ユダヤ人排斥について彼等の言うところを聞いてみると、人間性の深淵といったものを感じて、思わず嘆息したことを覚えている。エリザベス女王は天皇を迎えて、日英関係の「不幸な過去」に言及したが、天皇は一言もそれにふれられなかつたことは、対人関係において、問題との直接的な対決をさける日本人の性格を現わしたものではないだろうか。

こういった欧米人の思考・行動型態の底にあるものは、長い歴史を経て確立された「個」である。西欧における「個」の起源は、先史時代からの農耕型態に求められるであろうが、それとともに、西欧社会がつねに異質社会であったことも大きな要因ではなかったろうか。そのような社会において人間は個をもっとも意識することができるからである。ふりかえると、英國はいたって異質的な社会であった。そこに個人主義が生まれ、民主主義が根をおろしたことは偶然ではない。英國はまた欧米でも nonconformist が意外に多い国であろう。それは日本流に言えば、個性の強い人間がおおいことであるが、日本とのちがいは、それがむしろ当然だということであった。そこではひとりひとりが自分のペースで、自分の好きな道を歩んでいるといってよい。

私が 18 年ぶりに日本に帰って、何よりも強く感じたのは、日本が類まれな同質社会であり、conformist な社会であるということだった。日本人が集団行動を好む事実は、何よりもその社会の基本的性格を物語っているように思える。そこでは、往々にして自らの identity は、

所属するグループの identity のかげにかくされている。「我が強い」ということはいまだに歓迎される性質ではない。だが欧米において自我を正面におし出さないことは、自分を理解されないことでもある。欧米人の徹底的な自己表現は非常に論理的であり、どちらかといえば直観的な日本人の思考と対照的である。しかし西欧的思考にひそむ危険は、下手をすると独断的な結論をまねくことであろう。すべてのものを黒か白かにわけられることはまことに明快であるが、灰色のものをともすれば見ようとした傾向はとくにドイツ語圏の人たちにつよいようである。英国人はその点中庸の道がときには必要であることを知っているが、それは英国人の思考が単に合理主義だけに根ざしているのではなく、歴史的に体得した経験主義を身につけているからであろう。保守と進歩という一見矛盾した2つの要素がその国民生活のなかに見られるということの理由もそこにあるといえる。

【国際人】

最近「国際人」という言葉をよく耳にする。それと同時に、そのための英語力の必要性が指摘されているようだ。たしかに英語はいまや国際語となり、あらゆる分野で必要なコトバである。国際人とは語学にすぐれ外国の事情に通じている人をいうのである。だが英語力がそのまま国際性につながるわけではあるまい。一般の人にとって英語は表現の手段であって、表現するものがなければ、英語を習得することの意味もあまりない。ほんとうの意味での国際人とは、まず自国の背景をよく知った上で、外国の事情にも通じた人のことであると私は考える。ほんとうに外国を理解するためには、自国をまず知ることが必要であろう。日本で外国語を学ぶ人々は、往々にして日本に関する勉強を軽視する傾向があるが、これは間違った行き方ではあるまい。この意味で、流行の幼児の英語教育にも問題がある。正しい発音に親しむためだけならわかるが、英語はいずれ中学校で誰もが習うものである。それからでも決しておそくなはない。それよりも、幼時は正しい日本語を通じて能力の開発につとめるべきであろう。

あるコトバを習う以上、そのコトバが実際に使えるようになることが望ましいことはいうまでもあるまい。といって日本人が英米人と同じように英語が使えるようになることは至難なことであるし、またその必要もない。日本人としては、ふつうの場合、自分の見解・意志をできるだけ正確に表現できればよいわけである。もちろんその表現の範囲が広ければ広いほどよいわけで、またその水準が日本語での水準に近づけば近づくほどよいわけ

である。

戦後、日本の英語教育は驚くほど普及した。子供から大人まで、学校その他の施設で英語を習っている人口の数は龐大なものであろう。だがそのわりに役に立つ英語を身につけている人がすくないのは、基礎英語を身につけていないためではあるまい。『身につける』という言葉の意味が一般にはどちらかといえば軽く考えられているようだが、コトバの場合にはもちろん「読み、書き、話す」の三面のことである。日本ではしばしば「実用英語」という言葉を「非学問的」という意味で用いる場合があるようだが、考えてみればコトバは元来「話す」ことが基本であるはずで、「実用英語」などという表現を使うこと自体が本末顛倒ではあるまい。しかも日本で英語を専攻する学生は10年の歳月を費しているわけで、英文学の知識はあっても、英語で自分を表現することにおいてはしばしば初步の段階を出ていない事実は、基礎英語をほんとうに身につけていないためであろう。自分の関心は英文学にあるから会話はあまり出来なくともよいといった考え方は、日本で通用しても外では理解されがたい。

大学における英語教育もこの意味で改善すべき余地がおおいと思われる。従来の弱点である表現力の不足を補うためには、英語による授業がもっと増やされてよい。とくに最初の2年間は、英語の科目に関する限り英語だけで授業を行ない、翻訳を必要とする科目は専門課程にまわすほうが望ましい。講読も英語だけによる授業と翻訳を主眼としたものとの2種にわけてもよいのではないか。英語教育はあくまでも英語を主として行なわれるべきものであって、日本語による英語の習得であってはならないはずであるが、この一見自明の原則が、往々にして逆になっているように私は思う。

それにしても巷に氾濫する横文字はどういう現象なのであろうか。日常生活の中にカタカナの言葉が、日本語本来の言葉よりもおおいほど使われ、英語教室の数は増える一方のようである。表面的にみれば日本はたしかに国際化の波に洗われているし、東京は国際都市になったかのようである。だが、外国人にとっては東京も一步都心を離れれば依然として窮屈な町であるし、私自身がヨーロッパ人の血をもつ子供とともに経験したいいろいろなことを考えてみると、雑居の経験をもたない日本にほんとうの意味での国際化が起こるかどうか疑問に思う。また東を西に近づける必要も、もちろんないのである。むしろ、日本人が国際社会において日本を正しく主張するとき、国際人への第一歩をふみだしているともいえそうである。

(独協大学助教授)



私 の 英 語 歴

ICHIKAWA, FUSAE
市 川 房 枝

私が一番最初に英語を習ったのはどこだったでしょうね。私が小学校へ入ったのは愛知県の農村で、当時の小学校は4年制でした。小学校の上に4年制の高等小学校があったのですが、おそらくここでは英語を習わなかつたと思いますね。高等小学校を卒業して、東京の女子学院に入ったのです。当時は、高等小学校を出ると女学校の3年に編入されることが出来たわけです。私は3年の補欠に入れてもらったのですが、英語は1年生のクラスでしたから、おそらくそこでABCを習ったのが初めてだったろうと思います。リーディングと聖書の講義を受けました。校長は矢島揖子先生だったのです。

しかし、この女学院もじきにやめてしまって、小学校の教員になるために、田舎へ帰って師範学校へ入りました。その当時の師範学校は予備科が1年で本科が4年だったんですが、私は本科1年の補欠に入って予備科はやらなかつた。そこで4年間英語を女の先生に教えてもらつたことを覚えているんですが、せいぜいNational Readerの3までくらいでした。この女の先生は、お茶の水を出た人で、そのころお茶の水には英語の専門はなかったわけですから、先生も英語の専門ではなかつた。そんなわけで、英語は勉強したいとは思つてはいましたが、本格的に勉強できなかつたと思いますね。ただ、4年のときに女子部が分離して女子師範になつて名古屋へ移つたものですから、名古屋で宣教師がやつていた日曜英語学校へ少しかよいました。

女子師範を卒業して、小学校の教員を数年やつたわけですが、病氣でやめて、24、5才のときに新聞記者になりました。東京へ出ました。東京では、山田わかさんという人がおりまして、その人のご主人が英語とフランス語とドイツ語とスペイン語の4カ国語の塾を開いていましたね。その方が私の兄の友だちだったのですから、私は朝仕事に出掛ける前にそこへ英語を習つに行つたんです。そしたらいきなり原書を出されて、これがEllen

KeyのLove and Marriageだった。日本にも『恋愛と結婚』という訳本はありますが、この原書を読んで訳をつけたりして教えてくれました。

それから1、2年して、婦人運動を始めてからですが、1921年にアメリカへ行つたんです。ある新聞社の特派員ということで行きまして、原稿を書いて原稿料はもらつたのですが、向こうでいわゆる苦学しながらアメリカの労働運動とか、あるいは婦人運動を見ようということが目的であったものですから、シアトルに着いて1週間くらいたつてからすぐ新聞広告を出しました。いわゆる“Situation Wanted”というのですね。するとすぐ口がかかってきました、school girlということで働きました。仕事の内容は朝ごはんの手伝いとその後かたづけぐらいでしたね。最初に行った家は2週間ぐらいでやめたのですが、2番目に行った家では、学校へかよわせてもらつたわけです。ミセスに学校へ行きたいと言いましたら、そこの娘が小学校へ1人行つていたんですよ、まだ1年か2年くらいかな。それでは連れて行ってやるというわけで、女の校長先生のところへ行って、なんかいろいろ話していましたがよくわからんんですよ。よくわからなかつたけれども、教室へ連れていかれて、「お前はここだ」というのです。何年生のクラスかと思ったら、2年か3年のクラスでした、小学校のね。そこで小学校へかようわけですが、朝ご飯の仕度をして、自分も食べて、そしてお皿を洗つていると、子供たちが迎えに来ますよ。うちの前に来て“Fusae”と呼ぶわけです。それで一緒に学校へ行って、皆がやることを一生懸命見てまねをするわけです。少しわかるようになって、呼び出されて黒板のところへ出て算術をやつたりしました。

そこでいちばん格好の悪かったことは、体操の時間です。私はいちばん大きいのでいつももうしろにくつついでいるわけですが、どうもきまりが悪くってね。

しかし、そこも4週間ぐらいで、こんどはシカゴへ行きました。そこでもやはり新聞広告を出して school girl というのをやりました。広告を出すとすぐ、電話がきたり、あるいはミセスが自分で車をドライブして迎えに来てくれましたね。それで、シカゴでは移民の人達の学校へ2, 3か月かよいました。移民の学校ですから、オランダとかデンマーク、ハンガリーの子供たちが来ておりましたが、いろいろなおどりを見せてくれたことをよく覚えています。

学校から帰って夕食の手伝いをして、後かたづけをするわけですが、ちゃんと1部屋をくれて、1週間に5ドルくらいくれたかな。そのころは1ドルが2円だった。私は東京で雑誌社の編集者みたいなことをやって月給が16円だった。16円ではちょっと食べられなかつけれども、あちらでは20ドルで、日本円にすると40円ですから、わりあいゆとりがある、婦人会に属したり、労働学校みたいなところへも入って勉強もできました。

それからニューヨークに行って、大学の Extension に行ったこともあり、社会党の学校——夜学だったけれども——へ行ったりして、アメリカでは2年ほどいました。

そんなわけで、私は正式にきちんと英語は習わないのですけれども、家庭との接触で、いくらか耳がなれましたし、自分の関係していることは新聞も読めるし、本も読めるようになりました。しかしあからん単語はあるし、だれか通訳をしてくれる人がいたり、あるいは日本人で英語のよくできる人がいると、こっちは英語を使うのがいやでね、恥ずかしいというのか。それで通訳してもらってこっちは聞いている。だれもいなきやしょうがないからプローケンでやるのですが、それである程度意味が通じる、理解しあえると思っています。

私の英語の力はその程度のものですが、今の若い人達は英語がよくできるようになりましたね。でもその人達に考えてほしいことは何のために英語を使っているかという問題です。英語の達者な人は昔でもいました。ところが、そういう人達は英語はなるほど達者なんだけれども、女の問題、婦人の地位を上げようというようなことはまるで考えていないかった。それに対して私は非常に不満だったんですよ。何のために英語を勉強するのかと。だから、そういう人に対しては私は強い反感をもっていましたね。

もちろん、ことばができるということは、ひとつの新しい世界が開けるようなものですし、現代でしたらいくつかのことばを覚えて、通訳を通じてではなく、直接世界のいろんな国の人達と話しあって、理解しあうことが

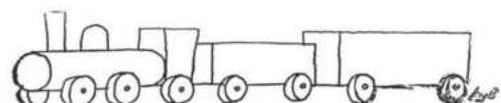
国際理解の基本になることだと思いますね。

しかし、その場合でも、その国のことばができるからといって、その国の味方をする必要はない。正しくものを見て、自分の意見を率直に言うという毅然たる態度を持ってほしいですね。それから、ただ会話ができるというだけじゃなくて、外国語で書かれた本を読んで知識が得られるようにしてもらいたい。ただ話ができるというのでは語学ができるとはいえない。本が読めて、いいものが理解できなければいけないと思うんです。

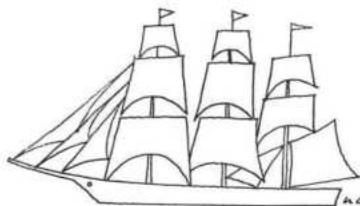
それから、「一生涯にいちども外国人に接する機会のない者に英語を教える必要はないだろう」ということを言つう人がありますが、私は、これには反対ですね。子どものときだとことばを覚えるのが早いし、それは新しい世界が開けるということである。だから、外人に会わんかも知れないけれども、テレビだってラジオだって英語はいっぱい入ってきているし、もし勉強しなかつたらそれが理解できないですよね。英語を学ぶことは外人に会うということだけが目的じゃない。その国の文化に接するということであり、そのためにはことばが媒介になっているから、そういう意味で私は子どものときにもっと英語を教えたらいいと思う。そうすればかなり国際的な気持になってくる。心持が広くなってくるし、社会が広くなってくる。

最近、中国語をやっている人が多いということを聞くのですが、それは将来中国と国交が回復するからということでそれもけっこうですが、ほんとうはエスペラントのような共通語だと、いくつも覚えなくてすむわけで楽ですね。しかし、ことばはその国の歴史というか文化を背負っているわけで、やはりその国のことばを知らなければならんでしょうね、外国語の中でどれを選ぶかは人々の考えによるわけですが、日本でも、英語はいまのところ世界でいちばん広く使われているから、英語と、それからそのほかに外国語を1つか2つ子供のころから教えるということがいいと思いますね。

(前参議院議員)



世界の中の日本とアメリカ



Gerald L. Curtis コロンビア大学助教授

國 弘 正 雄 NHK中級英語会話講師

(司会) 金 山 宣 夫 日本総合研究所国際部長

日本とアメリカの役割の変化

金山 最近、日米関係が再評価されているということを一般にいわれています。たとえば『日本とアメリカ』『憎悪の日米関係』という題の本が出たりしておりますし、それからまた2度のニクソンショックで日本が考えたことは、あるいはアメリカも同じだと思うんですが、私は「親ガメと子ガメの関係」と言うのですが、そういう関係が終わった、終わりつつあるんだというようなこともあるやと思います。アメリカにとってみれば日本はタダ乗り(free ride)だということであるし、日本からアメリカに対しては、いわゆる甘えというものがあるということが世上よくいわれるわけです。ちょうど手もとにあります U.S. News and World Report (1971年8月30日号) を電車の中で読んでおりましたら、「日本とのハネムーンは終わった」というふうなことを書いてある。それからまたもう少し大きく見て世界が2極から3極に動いているのだというようなことをいうわけですが、果たしてそのようなとらえ方でいいのであろうか。すなわち、2極であろうと3極であろうと日本の主体的な位置づけは一体どうなっているのか、というようなことが問題の背景にあるように思います。

こんなようなことを一応私から申し上げて、お二方の先生から日本とアメリカの役割りがいまどのように変化しているとごらんになっているかということをお話しいただければと思います。

カーチス U.S. News and World Report に書いてあるように、日米のハネムーンは終ったと私も思うんです。ハネムーンが終ったというのは、今までアメリカからみたら日本は問題じゃない、つまり日本を take for granted してもかまわない、という状態が終ったとい

うことだと思う。最近はアメリカにとって、日本が問題になったという認識が戦後初めて出てきたわけなんです。日本からみても、今までアメリカについていけば問題は比較的少なかった。しかしいまついていこうとしても、どこについていいかわからないし、ついていっても文句をいわれる。そういう意味でハネムーンが終わったといえる。それで、ある意味でハネムーンが終わったからこれで離婚するということはある人は言うのだけれども、ぼくはハネムーンが終わってふと気がついたらすでに26年間も長く結婚していた。26年間も結婚しているとお互にもう別かれるわけにいかない。しかし、それほどロマンチックな付き合いじゃないという気持ちがアメリカにはあるんです。アメリカは浮気でもして中国とちょっと話してみるし、日本にも浮気をしようというような考え方があるのでしょうけれども、やはりそれくらいで終わるんじゃないかと思うんです。

金山 なるほど。どうですか國弘先生、日本は浮気をするわけですか。

國弘 私は、日本が浮気をするかどうかは別として、アメリカがかりに中国と浮気をするとした場合に、アメリカ人にとって中国人の方がはるかに理解しやすい、あるいは話が通じやすい相手であるということはいえると思うのです。平均的なアメリカ人が平均的な中国人と平均的日本人に接触した場合に、どちらがより理解しやすい相手かといえば、私はむしろ平均的中国人の方が理解しやすいのではないかと思う。ことばを換えていようと、日本人と中国人を比べた場合に、日本人の方がより particularistic というか、個別的であって、中国人の方がより universalistic というか、普遍的なものを持っているのではないか。そこにアメリカ人が話しやすい、浮気の相手として付き合いやすいという側面があるのではないか。たとえば中国人の方が日本人よりも、より簡明



國 弘 正 雄

直截にものをいう術を知っているとか。中国人の方が伝統的にみて日本人よりもはるかに個の主張に長じているというようなことがいえると思うのです。

中国が国際社会に再登場してくるのはもはや時間の問題です、それはあまり

にも当然なことで大歓迎なんですが、その際日本人と中国人は、外交官であれ、政治家であれ、ジャーナリストであれ、学者であれ、ビジネスマンであれ、絶えず両者が比較される立場に立つの必至です。そのときにどちらに国際性という意味で軍配が上がるかというと、日本人ではなくて中国人であろうという感じが強くするんです。国際性という尺度を使った場合にですね。

カーチス 私もそのとおりだと思うんです。平均的な中国人とアメリカ人は非常に理解しやすい——日本人とアメリカ人が理解するよりも——ということはいえると思う。それとまた別に、いわゆる中国のリーダー、周恩来にしても、カナダにいる大使にしても非常にアメリカ人に通じるような、アメリカ人だけじゃなくて西欧に通ずる personality を持ってるんです。そういう意味で *Newsweek* とか、*Time* とか、*U. S. News and World Report* とかで中国のリーダーについて何か書きたいと思ったら書けるんですよ。非常におもしろい人物だという意識がアメリカ人にある。しかし、日本のリーダーのことを *Newsweek* なり、ほかの雑誌なりが書こうと思っても書くことがないとよくいわれるでしょう。アメリカの雑誌記者なんかに。というのは、何か官僚上がりのせいかどうかわからないけれども、どうも自分の personality じゃなくて、consensus の上に立って、「まあまあ」というあいまいな言い方でうまく運営はするけれども、あまり政治をやっているという感じを与えない。そういう意味で中国が非常に人気が出てくる可能性はあると思うんです。

金山 その点、名著『代議士の誕生』によって日本の政治家の側面を選挙という面から指摘されたカーチス先生に伺いたいのですが、日本の政治家というのは、いわゆるおとぼけだと、いま先生「まあまあ」とおっしゃったけれども、ものを言わない方がえらいんだというよ

うなところがあるように思うのです。言う場合でもなるべく具体的なことは言わないとか、あるいは何か方言を使って茫洋とした人格をそこに出すというふうなことが日本の政治家の自己表現になっているわけですが、それはいまのお話で世界のほかの文化とはやはり合いませんか。

カーチス そうです。それでいろんな問題が出てくるわけでしょう。日本人が日本人に対するいろいろなことを言おうとするときに、あまり言わなくても何となく通じるようなことが多い。しかし、国際政治の舞台に立ってそのやり方で通じさせようと思えばそれは大間違いです。

この間、ある政治家と話したんですけども、日本人同士が何か問題があつていろんな相談をして、それでおしまいに一方が、「じゃあ、それちょっと考えておきましょう」と言う。「考えておきましょう」というのは、日本人同士ではどっちかというと No に近いんです。しかし、もし織維の交渉で佐藤がニクソンに、「じゃあ、ちょっとそれは考えておきます」と言ったら、ニクソンはそれを Yes と理解するわけです。國弘さんが前に書いていたように、腹芸っていうのは国際通貨じゃないんです。

金山 “Consider” ということばは確かに英語では日本語よりは積極的な肯定の意味があるでしょうね。中国語でも同じだそうですね。

カーチス しかしそれは日本の政治家のやり方だ、ものの言い方だとある程度いえるのですが、日本の政治家の中でも 2 つの種類があって、官僚出身者には確かにそういう言い方が強いと思うんです。ところが官僚じゃない方ははずいぶん違うと思うんです。しかし官僚じゃない方は人間としての魅力や実力はあってもなかなか総理大臣になれないし、国際政治の面でもやはり官僚出身の人が出てきているから、なかなかむずかしいですね。

金山 そういう一種の精神的風土みたいなものが、先ほど申し上げた日米関係にやはり影響を及ぼしていますか。

カーチス その影響は非常に大きいんじゃないですか。いま日米関係には具体的な問題はとり立てないと思うんです。ほとんど全部が精神的な問題であって、いわゆる communication そのものの問題だと思うんです。

ニクソンショックといつても、何で日本がそんな大きいショックを受けたか、客観的に考えればそれほどのショックじゃなかった。多分アメリカは中国と何かするだろうとか、あるいはアメリカが経済的に非常に困っている

るから何かするだろうと、もう1年くらい前から知っているはずなんです。しかし何かアメリカの取った政策というものよりも、その政策の取り方とか発表の仕方が問題になったんですね。中国と接触するから日本はショックを受けたのではなくて、前もって日本と話し合わないでやったからショックで、そういうスタイルがショックの原因になってるんです。

金山 コミュニケーションないしはスタイルの問題ですか。そうするとひとつ伺いたいんですが、ニクソンのああいうやり方というのは、いわゆるアメリカ的なスタイルなんですか。

カーチス それはニクソン的スタイル。アメリカ的なスタイルの一つですね。ある意味で非常に日本と似ていると思うのですけれども、ニクソンとかルーズベルトとかがどっちかというと同じようなスタイルなんです。他方、アイゼンハワーとかクーリッジ、フーパーというのはどっちかというといまの佐藤栄作みたいな人なんです。だからぼくはいまの日本の政治はクーリッジかフーパースタイルだと思うんです。そういう2つのスタイルがアメリカにもあるんですけれども、ニクソンの珍しいのはいままでの大統領に例のないほど秘密主義者だという点です。これがいろいろな問題の原因になっていると思う。

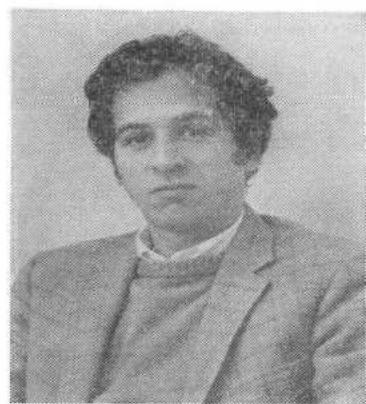
しかし日本がいろいろアメリカに甘えているとか、精神的な問題があるといわれているのは、アメリカの取る政策が非常に日本をマークしているという感じが日本にはあるようにぼくは感ずるのです。いまそういう意味でのショックを受けてるのは日本だけじゃなく、ドイツも受けたし、フランスも受けたし、アフリカの諸国も受けているんです。ところが、日本では外交政策というとアメリカとの関係だけがそのすべてだと考えてしまうのですね。アメリカの場合はとんでもない話で、外交政策の中のある一部の日本という感じですね。そこにそれがあります。

金山 1941年8月15日という日は終戦記念日ということになっているわけですけれども、これは考えようによつては、日本軍国主義崩壊の日であったと思うんです。それからまた一方では、タダ乗り開始の日であったというふうにも考えられる。また、1971年の8月15日というのは、日本軍国主義復活記念日であり、かつタダ乗り終了の日である。

早い話が8月15日、時を前後にして *New York Times* のレストン副社長は周恩来と会見して、「一体アメリカはなぜ日本に軍隊を置いておくんだ」という質問に対し、「いや、日本の軍国主義復活を押えるためだ」みたいなことを言ってるわけなんですね。

そういうことで國弘先生にお伺いしたいのですが、いまカーチス先生が、日本はショックをたいへん大きく受けているということをおっしゃったわけですが、何かそういう国内の政治の風土というか、ショックを非常に大きく受けているというメカニズムみたいなものがあるんですか。

Gerald L. Curtis



國弘 これは日本がアメリカに対して不当なまで高い依存度を持ってきたということだと思うんです。一例として経済をとると輸出にしても輸入にしても3割以上もアメリカとの関係に仰いでおるという状況のもとでは、心理的にも日米関係が日本にとっての対外関係の全てであるというような幻想は生れやすいし、また日米関係というものを2国間、つまり bilateral な関係としてしかとらえられなかった。多国間つまり multilateral な関係の中における日米関係、あるいは米中関係というようなとらえ方ができなかった。そういうところにニクソンの一連の措置が非常に大きなショックとして受け取られる風土があったと思うんです。

それから、これはさっきの浮気の話に戻りますけれども、私は今度アメリカを歩いてみて、アメリカ自体、非常にたくさんの国内的な矛盾を抱えていると思うのです。経済という次元だけでとらえても、たとえば労働者の勤労意欲(the work ethic)の衰弱がいちじるしく absenteeism が目立って増大しているとか、製品の質、サービスの質が目に見えて落ちているとか、そういう国内矛盾を抱えている。それから繊維にしても、鉄鋼にしても、設備の近代化が非常に遅れている。これが両々相俟って労働生産性はいきおい低くならざるを得ないし、国際競争力も低下する。そこでニクソンはこの間も演説をして、もっとアメリカ人は働くにやいかんみたいなことを言うわけですけれども、私はトップ笛吹けどもアメリカ民衆は踊らない、というところがあると思うんです。

そこで国内の矛盾を国内的に解決できる目当てが果たしてアメリカにあるのかどうか。私はその点非常に悲観的なんです。ベトナム戦争を何としても終結させなければという大きな命題はあるわけですけれども、かりに国内矛盾を国内において解決できないことがあると



金山宣夫

あるいは目につく相手というのは、やはり日本ではないか。なぜそうかといえば、日本のアメリカに対する経済その他の面における依存度があまりにも高いし、日本人自身がアメリカにしがみついてきたというような実情があるですから、pick on するんだったらやはり日本が一番やりやすい相手だということになるのではないか。

そうなってくると日本としてはじゃあ一体どうしたらいいんだ。それでもといって悪女の深情けのようにアメリカにしがみつくのか、それとも、お前さんがお前さんならこっちも考えがあるといつて、それこそ浮気を始めなくちゃならないのか。そこに非常に大きな決定をいま日本は迫られているのではないかという気がします。

金山 いまのお話で、カーチス先生のお話とも一致しているんですけども、とにかくアメリカは日本をヤリ玉にあげたわけですが、いまの状態ではそれしかありませんかね。たとえばほかの国でどこかそういうヤリ玉にあげるところはないかとか、あるいはほかの問題で何かできないかとか。どうですか、アメリカの国内情勢からいって。

カーチス いま國弘さんがおっしゃったとおりだと思うんですが、pick on Japan が一番やりやすい。ドイツとか、あるいは EC の方が日本よりもアメリカの経済の問題になっているわけです。というのは、いわゆるアメリカの International Corporation、つまり世界企業は日本よりもヨーロッパの方に資本をたくさん持って行っているんです。それでアメリカの balance of payments (国際収支) の問題とか、いろんな問題が出てくるのですけれども、自分の ancestor (先祖) が出てきた西ヨーロッパの批判をあまりしたら選挙には有利にならない。それが問題なんです。いまのニクソンのやり方は、何よりも来年の大統領選挙に勝つことなんですよ。そういう意

すると、これは政治家の常套手段でニクソンならずともそういうことをやる場合が大いにあると思うのです。いきおい外に向かって解決を模索する。こういう形になっていきやすいのではないか。その場合に一番いまアメリカにとってつつきやすい相手と、

味で、現に彼の選挙体制というものが南部を非常に重要視しているし、繊維問題はその1つですけれども、Midwest, Southwest の人々にとって重要な問題を一生懸命解決しようとしているわけです。そういう意味でも日本を批判したら、ほかの国を批判するよりも選挙のプラスになり得るんだということですよ。

ただ、國弘さんとちょっと意見が違うかもしれないと思うのは、いわゆるアメリカ人、アメリカの一般国民がいま Japan を pick on しようとはしてないと思うし、それだけではなくて、いまニクソン政権が Japan を pick on しているということをあまり認識してもいないのです。この点世論と政府の間に大きなギャップがある。普通のアメリカ人は日本をそれほど批判しないんです。かえって非常に admire してるし、どっちかというとうらやましいという気持ちがあると思うんです。日本はけしからんとか、日本はタダ乗りだとかという意見はびっくりするほど少ないと思います。

しかしながらニクソン政権の戦略作戦としてはこれがあって、もしアメリカの国内でこういう反日ムードが盛り上がりると自分の政治的なプラスになるという判断から、それらの政策をとっていると思うんですけども、まだまだそれほどアメリカの国民には浸透はしていないと思うんです。

國弘 その点は私も賛成なんです。いまカーチスさんは、一般的のアメリカの民衆レベルまで反日ムードは浸透していないとおっしゃった。私もいまの段階では浸透していないと思うし、また最初におっしゃった、むしろアメリカ人は日本を admire (尊敬) している状態だという点についても賛成なんです。ただ私が一番恐れているのは、もしも一般的の民衆レベルにまで日本に対する悪感情のようなものが拡大し、浸透していったとすれば、私はもうこれはちょっと手遅れじゃないかという気がするんです。その可能性は私は決してなくはないというふうに見ているんです。なぜ手遅れかというと、ひとつにはアメリカは何といつても grass-roots の民本主義の国だし、民衆の意識とか民衆の考え方というものが、政治なり経済の指導者に大きな影響力を与えるような国柄だと思います。何といったって世論の国なんですね。日本と違って、その意味においては民衆のレベルにまで日本に対する悪感情が出てきたとすれば、これはちょっと押さえがたいのではないか。

金山 そうですね。そういう点で私はこういうふうに思うんです。いまいわば政府と人民は別というようなテーマが出てきたわけですが、ちょうど周恩来が言ってるのと同じなんだけれども、日本政府はアメリカがいろいろ

ろと出してくる政策に対する反応において、非常に單細胞な反応をしたということがあるように思うんです。それは政府だけじゃなくて、たとえば政界の指導者あるいは経済人という、いずれにしても指導的な立場にある人がそんな反応をとってきたような気がする。なぜか。

たとえばアメリカが課徴金をかけてくるぞといった場合に、日本の経営者は何を言ったか。たとえば最近のことですが、ニクソンが、アメリカ人よ働きという話をしたというけれども、日経連の早川専務理事は、「この際休日返上をして、それによってコストの切り下げをはからにやいかんのだ。それが日本の生きる道だ」みたいなことを言ったわけです。必ずしも厳密な引用ではありませんが、たとえばその話の中で「勤勉は繁栄のための不变の真理である」ということを言っているわけです。私が問題にしげたのは、そういう不变の真理なるものは、これは国民が自律的な判断をすればいいことであって、上から押しつけられるものではないわけです。上から押しつけられると結局働き、働きで、その結果は何になるかというと、また第2、第3の円切り上げ、あるいは課徴金賦課といったような、そういう圧力になってくるのではないか。

それはなぜおこるかというと、やはりアメリカ政府を相手にしているからであって、たとえば私がかりそめにも経営者であれば、アメリカの消費者に向かってこういうふうに言うと思うんです。「この際アメリカ政府の政策によって、皆さん方は日本の非常にいい製品を高く買っていただくようなことに相なったけれども、これはまことにわれわれにとっては不意の限りである。ひとつ手を取り合って消費者として、あるいは市民としても少し住みよい世界にするようにしましょう」てなことを私なら言いたいわけなんですが、ところがそういう発想というのはどうもないような気がするんです。その点いかがですか。

カーチス それは非常に複雑でむずかしい問題だと思うのですけれども、國弘さんが、アメリカは世論の国だとおっしゃったけれども、世論の国だというのは、いわゆる一般国民のことを言おうとしているんなら、私それはちょっと間違いだと思うんです。普通のアメリカ国民は日本を好きでもきらいでも、どっちにしてもあまり関係ない。いまのアメリカの政府の政策としてはね。それと政府に影響のあるいろんな市民のグループがあるわけですね。大体日本の発想からみたら、日本の財界人だったらアメリカの財界人と話せばいいと思う。いわゆる counterparts strategy で、これはまた間違いだと思う。日本の財界人は普通のアメリカ人と話した方がいいと思

うんです。アメリカに財界というものがちょっとあるかどうか疑問ですけれども、いわゆるアメリカの経営者と話しても話にならないんですよ。しかし日本の財界人がアメリカのジャーナリズムの連中とか、経済の中のあるグループ、銀行関係とか……

金山 それは政府についてもいえますね。日本政府の counterparts は必ずしもアメリカの政府じゃないような気がする。

カース それ、どういうこと？

国弘 あなたがいつもおっしゃることよ。たとえば日本の通産省とアメリカの商務省は一応形式的には counterparts だけれども、実際の機能や権限を見たら明らかに違うというような。

カーチス そうです。だからたとえばアメリカの議会の役割りとか、委員会の委員長の役割りとか、今までそれはあまり日本に評価されなかったんですね。たまたま織維問題が出てきたんでミルズという実力者がいるということがよく知られるようになったんですがやはりそういうことをもっと知り、アメリカの国内政治の構造を分析しないと、いくら交流しても交流にならないんですね。かえって対立の種をまくようなことになってしまふんですよね。

金山 その点については、あとでカーチス先生からぜひサゼスジョンを賜わりたいと思いますね。具体的に何をなすべきか、ねらいをどこにつけたらいいかということですね。

カーチス この点についてもう一つ國弘さんとちょっと意見が違うかもしれないけれども、ある意味では日本の方がいわゆる世論の国だと思うんです。なぜ日本がこんなにニクソンの中国訪問と新経済政策の発表で大きなショックを受けたかというのは、非常に日本の世論がまとまりやすいという原因があったからだと思うんです。これは別に日本の風土と関係なく、やはりメカニズムとしてはアメリカにない全国紙『朝日』『読売』『毎日』がものすごい影響を与えてると思うのです。だからニクソンが何か言うと、とにかく北海道から九州までみんな同じ情報を聞くわけです。

しかし日本が何をやっても、New York Times には出るかもしれないけれども、New York Times は New York とかワシントン周辺で読まれている新聞であって、New York 市内でも、Daily News ほど読まれていないでしょう。カリフォルニアとか南部、Midwest へ行ったらもうその情報が全くないことが多いんです。だからその意味でアメリカの世論をまとめようとしてもまとめることができない場合が多いんです。そういう意味

でも交流だなんていって、シカゴの市民とか、どこかの小さな町の市民に日本人が行って演説をしてもそれほど影響力はないと思うんです。もしかしたらあの小さな町で日本の人気はよくなるかもしれないけれども、州まで及ぼさないし、もちろん全国的なムードになりっこないんです。こういう問題はどうしようもないといえるかもしれないけれども、この点全く日本とアメリカのいわゆる世論のメカニズムの違いが非常にものをいっていると思うんですよ。

國弘 それは全くこれまた賛成で、金山さんがさっきおしゃったように、とくにブルーラリズムの国アメリカにおいてはどこを押えたら、世論の形成という過程においてどういう反応なり効果なりがあるかということについて非常に入念な、綿密な分析がまず必要だ。その分析なしにいたずらに交流というふうなことを言っても、さっきカーチスさんの言われたような困難にぶつかると思います。それは全く同感です。

*New York Times*について触れられたけれども、これだって1日の発行部数わずか90万くらいでしょう。人口2億の国の90万ということは人口1億とすれば45万の発行部数しかないということですから、朝、毎、読のような全国紙とは全く重みが違うということであるし、しかも東部のインテリしか読まないということになると、インテリがとかく反主知主義のアメリカの世論形成過程の中で果たしてどれほどの影響力を持っているかということ、これは日本よりも低いと思いますし、それから面積が何といったって日本の25倍ですね。物理的に日本のように小さくまとまった国でないということがあるし、これは非常に問題があると思う。

金山 先ほどいわゆる世界情勢の中での日米関係ということを考えたわけですが、そしてまた甘えだとか、あるいは counterparts philosophy というような命題が提起されたわけですけれども、ひとつここで具体的に諸先生方のご意見をお聞きしたいことがあるんですが、それは、先ほど私が一番最初に申し上げたとき、これは国際問題であるけれども、アメリカにいろいろ国内問題があるんだと、その国内問題をあるいは突き出したような格好になっているのだということを申し上げたわけですが、日本にもやはり国内問題というのがあるであろう。

それは何かというと、たとえば例の繊維協定の問題です。これはひとつの考え方としては、繊維というのは沖縄の trade-off であるという考え方があると思う。アメリカ側からいえば、戦略的にたとえば1975年に安保改定のときに安保を廃棄しないがために沖縄を返してやる、そのかわり繊維をよこせという give and take の原則

をたてにとって日本に対応しているのだというような考え方をすることができると思います。実際アメリカがそういうふうな考え方をしたのかどうかということについてあとでカーチス先生に伺いますが、日本の側の事情をいさか政治的な風土ということと関係して私なりに申し上げますと、そういうふうに日本は確かに沖縄を返してもらったわけです。つまり take したわけなんです。日本は take しだすととどめがない、give をしないで take するというような習性があるようだと思っています。確かに出てる杭は打たれるということばがありますが、考えてみれば出る杭が打たれるのはあたりまえなんですね。今までどこかの勢力範囲であったところに出ていくですから、打たれるのはあたりまえなんですが、ところが打たれること自体が何かたいへんなことである。膨張過程においてはそういう杭は打たれる。実は打たれ方をあるいは考えるべきであるのに、打たれたことそのこと自体に非常に敏感に反応することがあるように思うのです。

実際過去を振り返ってみると、日本がじり貧状態だ、あるいは ABCD 包囲網にかこまれてたいへんな思いをしているといったようなときに小学生や中学生は何を歌ったかというと、「太郎よお前はよい子ども、お前が大きくなるころは日本も大きくなっている」そんなような歌を歌ったわけなんです。ところが一方では日本はたいへんな圧迫を受けて打たれっ放しで一種のそれが孤立感に走り、かつ自閉症というか、みずからを閉ざすという考え方になった。

実は最近も赤城農相だと思うんですが、ABCD 包囲網を感じるというようなことをすでに発言しているわけです。そんなような感じ方というのはあるようだ。これが行き着くところはどうかというと、歴史的な analogy が必ずしも正しいかどうかは問題ですが、いわゆる国際連盟の脱退だと、あるいは三国同盟の結成だと、つまり世界情勢を全く無視したようなやり方を日本がみずから求めてするということにも立ち至ることが十分考えられるのですが、その点、ひとつ三木元外務大臣の秘書官をつとめられた國弘先生にぜひ伺いたいのですが、どうですか。

國弘 そういう歴史的な類推が果たして正しいのかどうか、もっと一般的にいうなら、歴史が再び同じような形で繰り返すことがあるのかどうかということは大いに疑問だと思うのです。津田左右吉さんじゃありませんが、歴史の偶然と必然ということですね。

ただ、歴史的な類推が世界を動かすひとつの原動力になり得るということはあると思うのです。たとえば、こ

これはカーチスさんに伺いたいんですけども、アメリカがベトナムに入っていた。ああいう私にいわせれば immoral で、目的意識のはっきりしない戦さに長い間足をとられてきたという動機の一つはやはり歴史的な類推があったからではないかと思うのです。つまり非常に単純に申しますと、ミュンヘンでヒットラーが台頭してきた。あのときにもしアメリカが自分の持っている力を行使して、ヒットラーの台頭を押えていたとするならば第2次大戦は起きなかつたであろうし、第2次大戦がもし起きなかつたとすれば、比喩的な言い方でされども、アウシュビッツのあの悲劇は避けられたかも知れない。当時アメリカがまだまだ孤立主義を捨て切れずに、使うべきときに力行使しなかつたからこそ第2次大戦を招いてしまつたんだという、そういう歴史的類推が働いて再びそういう過ちを犯してはならないということはいえるのではないかと思うのです。意識の中でね。

そういう意味で、客観的にその事実が正しいかどうかは別として、主観的にそういう精神構造において、歴史的な類推が実際に国際政治を動かす役割りを果たすことには、これは大いにあり得ると思うのです。

金山 そうですね。そういう点からいうと、いま ABCD 包囲網のお話をしたわけですけれども、たとえば国際連盟脱退のときにもそうだったんだけれども、これは日本の外交のひとつの姿勢だと思うのですが、き然たる態度だとか、絶対不退転というようなことが非常にいいことだというような価値観がある。その果実名誉の孤立であるとか(笑い)、名誉の孤立なんておかしいと思うんだけれども、ところがそれが実はあるんですね、最近。何かというと、この間の日米経済閣僚合同委員会で日本側出席者はみんな率直に言いたい放題のことを言ってきた。これがいまのき然たる態度みたいな精神構造につながっていると思うのです。相手のことは全くかまわず言いたい放題言つことが、何か男一匹たいへんすばらしいことだというようなことがあると思う。これがさっきの実は give and take に関係してくると思いますので、カーチス先生からご意見を伺いたい。そういう日本式のやり方をどういうふうにござらんになるか。

カーチス 閣僚会議で日本側が言いたい放題言ったというのは、ぼくはちょうどそのころアメリカへ帰っていて、テレビを見たのですが、日本の福田外務大臣とか田中通産大臣が言いたい放題言って、戦後初めて日本人はほんとうに自分で思つてることを言ってくれたから非常によかったと好評ばかりなんです。アメリカ人の側はね。

どうしてかというと、日本は言いたい放題という精神

じゃなくてぐずぐずする精神だ。どうも何考えているかはっきり言ってくれないというのが日本人なんだ。だから日本人は非常にずるいとか、人をだまそうとするとかという印象があるでしょう。そういう意味で言いたい放題言つことは必ずしも悪いことじゃないと思うんです。しかし、何を言ってたかが問題なんで、(笑い)だからスタイルとしてはかえって言いたい放題を言うスタイルの方がいいと思うんです。アメリカ人の見方からいえば。

それで give and take の話になりますけれども、ぼくは沖縄を give したから纏維を take したいという agreement は全くないと思うんです。しかし、心理的にはやはり何か give をするときに何かをもらうというスタイルは確かにあると思うのです。しかし、反論するつもりじゃないけれども、どっちかというとぼくは佐藤総理にはそういう give and take 精神が強過ぎたと思うんです。沖縄を返還してもらうために纏維で譲歩しなくちゃならないとか、いろんな問題を沖縄の返還のためにやらなくちゃならないと思ったのは彼の give and take 精神でされども、ぼくは間違いだと思う。というのは、纏維問題は沖縄返還と全く関係ない。これは沖縄を返還してしなくとも、纏維を take しなければ尼克ソンの気持ちは絶対に収まらない。だから纏維で譲歩したから沖縄の返還には問題はないだろうという考え方だったら間違いますよ。だからぼくはこの場合はあまり関係ないと思うのです。give and take でいま問題になっていると思うのは、いわゆる自由主義を象徴してきたアメリカが日本へ来ると資本も入れてくれないし、investment(投資)も trade(貿易)も自由化していないし、そういう意味での give and take はあると思う。そういう意味でタダ乗り論になるわけですけれども、どうもぼくは沖縄返還は give and take の問題じゃないと思う。

金山 ただ、ぼくが考えることは、沖縄が返ってきた。今度は何を言うかというと、沖縄のあとだと称して北方領土返還ということを言うわけですね。その場合にそれじゃその北方領土返還という take に対して日本は give の用意があるというと、ないように思うんです。そういう一種の政治風土というか、精神構造みたいなものに触れたつもりなんですが、その点どうですか。

カーチス まあ、give があるとしたら、日本はあまり中国と仲よくしないでソ連の方に近づいていくということをソ連に何かの形で見せる。そのことがあり得るとソ連が思つたら北方領土を返すだろう。しかしほくは北方領土には沖縄と違ってそれほど人口が多くないでしょう。北方領土イコール沖縄ということは沖縄人に対する

侮辱だと思います。だからそれほど問題になると思わない。

金山 なるほど。それからもうひとつ國弘先生がベトナムの問題を出されましたので、その点についてコメントを。

カーチス それは國弘さんのおっしゃるとおり、ケネディ、ジョンソン時代の国務長官のラスクの演説を読んでみると、全部 Munich (ミュンヘン) との analogy ばかりなんですね。それで私非常に惜しいと思うのは、ベトナム戦争で負けたことではないんです。むしろぼくは負ける方がよかったです。惜しいと思うのは、そのベトナム戦争の政策をつくったアメリカ人、つまりジョンソンのホワイトハウスとかケネディのホワイトハウスにいたアメリカ人は全く反省してない。正しいことをやったと思っているんですよ。いまでも、その正しいことをやったというのは、やはり Munich と同じような事情であったから、もし、やらなかつたらもっとたいへんなことになっていた。だからやって負けても、やつたこと自体は正しかったという意見をまだ持ってるんですよ。もしそういう意見を持ってるなら、また同じような戦争をやる可能性があると思うんです。これがベトナムに関してもっとも惜しい点だと思うんです。現に Walt Rostow でしょう。最近彼は *New York Times* とか *Life* とかに論文を書きましたけれども、どうも自分のやってきたことは正しかったということばかりで、全く反省していないんです。これがある意味でアメリカのたいへんな悲劇だと思います。

金山 それはジョンソンの回顧録なんかにも同じようなことを書いてあるらしいですけれども、たまたま私タベツれづれなるままに Clyde Kluckhohn の『人間のための鏡』を読んでたらこういう一節があるんです。「われわれアメリカ文化では、同じアメリカ人同士で激しく競い合う一方、外向きにはいかにも仲良し同士であるかのようなそぶりを示さなければならない。一国民内部での集団間の拮抗が国家解体の危機を生ぜしめるほど深刻化した際には、戦争によって攻撃目標を外部の集団に置きかえることが国論統一という見地からすればりっぱな適用反応のひとつとなるのである」ということを書いてある。このことは別にアメリカだけのことじゃないのですが、ただここではアメリカだけを、しかもベトナムとの関係だけで考えるとすると、これはどういうふうにお考えになりますか。

カーチス おっしゃるとおりだと思うんですが、やはりアメリカの問題だけじゃない。ずっと何千年の歴史を見て、戦争がなぜおこったかということは、ひとつはそ

ういう原因でおこったと思う。日本も同じことがいえると思うんです。

金山 日本も同じです。日本だって1931年の満州事変から1941年の太平洋戦争に至るまでの歴史というのは、いわゆる海外侵略によって国内を統一することだった。これはナチスドイツなんかとたいへんな違いだと思うんです。つまり举国一致だとか一億火の玉なんてことを言ったのは、あれは海外侵略をして初めて可能になったんであって、あれが最初にあって外へ打って出たのではないわけです。これはたとえば日本の思想ですね、たとえば玄洋社などの思想に明らかなことであって、つまりアジアを不安定状態にしておくことによって日本に革新というんですか、革命というんですか、あるいはクーデターをおこすというような、そういうような常套手段があったように思うのですが、アメリカの場合も同じことでしょう。

日本の取るべき態度

金山 さあ、それでいいよ日本の態度はこれでよいのか、よくするためには何をなすべきであるかというようなことについていろいろなお話をさせていただきたいと思うのです。世論対策というところからいきますか、いかがですか。

カーチス 非常に単純に申しますと、今まで20何年間の、アメリカとピッタリついていくのが日本の国益であるという考え方とは、70年代に入ったらもう通じない。これじゃだめだということになっていると思うんです。それで私外から外交政策の決定過程を見てみると、どうもいまの日本は国際面において initiative をとる可能性のない国だと思うんです。これはある意味ではよかったです。アメリカにはっきりした筋の通った政策があったころには、initiative をとれなくても何とかうまくいけたとはいえると思うんです。しかしいまは日本が initiative をとらないでアメリカについていこうと思ったらかえっていろんな変な問題がおこり得ると思うのです。そういう意味で中国問題とか経済問題でも非常に増幅されたんですね。それでも日本が initiative をとらずに、いつも reaction だけしておれば、そこで初めて日本の軍国主義の問題が出てくると思うのです。

というのは、理念のない、vision のない政策ですと、他から強くいわれると、「まあまあそれじゃある程度やってあげましょう」という考え方になっちゃうんです。だからアメリカ人が、「タダ乗り、タダ乗り」と言うと、「まあまあそれじゃあ自衛力をふやしましょう」と、何

となく、いつの間にか、増やす気になる。あと4、5年くらいで世界第5位か第6位くらいの軍事力になるんですね。これはいわゆる reactive foreign policy (反応的な対外政策) の中で、いつの間にかそうなってしまうんです。かりにもし日本に世界第5位の軍事力を持つべきだという理念があって、それでやるのなら、ある意味でわかるんですけども。

金山 4次防が完成すると6位になるんでしょう。

カーチス ところが、実のところは6位になりたいという気持ちもなしに、ただ何とはなしに6位になってしまふ。そういう意味でぼくは、いまの日本が vision をもつべきだと言うのがある意味で恐しいんですね。というのはアメリカの100年の歴史を見てみると、アメリカ人には vision があったんです。vision があったからこそいろんな戦争があったと思うんです。いろんな問題をおこしたこと也有ったと思うんです。ベトナム戦争にはやはりアメリカ人の vision があったんですよ。いわゆる crusade (反共十字軍)をやらなきゃならないとか、反共の vision とか、いわゆる世界の自由の vision があったために戦争をやれということだったんですね。だから必ずしも vision がある方がいいとは思わないすけれども、現時点の日本、世界の中の日本を見てみると、何らかの vision がないとかえっていろんな混乱がおこり得ると思うんです。

私がまだ学生のころには日本では何となく vision があると思ったんです。それはいわゆる平和主義の vision (拍手)，しかし、もしかするとそれは日本の事情をよく知らなかつたせいかもしないですよ。(笑い)しかしどうもそういう一般的な対日イメージがあったんです、50年代には。しかしいまはそういう vision がないんじゃないかと私は思うんです。

金山 それじゃあ私から國弘先生に伺いたいんですが、平和主義に拍手をされるのはけっこうなんだけれども、ただ、もしほんとうに拍手をするのであれば、先ほどの話とここで関係するのだけれども、その持ち出し方、スタイルね。どのようなスタイルをとれば果たして国際的に通用可能なのかということを伺いたい。

國弘 いまカーチスさんの言われた、vision 過多というはある意味では危険であり得るけれども、しかし日本の置かれている立場からいって、もっと initiative をとるべきときが到来したのではないかというご意見に賛成です。特にそのことを日本の自衛の問題ないしは軍事力の問題に引っかけて提言なさったことにも大賛成で、ましてや若いときに、1940年のお生まれですからいまも32才でお若いのだけれども、もっと若いときに、日本に

は平和主義という vision があったと思った。それに非常に関心を示されたということ、そのことにも私深い感銘を受けるとともに、古きよき時代、つまり日本が平和国家、文化国家という目標を高くかかげていた時代を痛みの念とともに思い出すんです。

そこで金山先生のお尋ねなんですが、どういうスタイルで、具体的に何を日本のこれから vision として提出すべきであるかという点についていえば、私はやはり平和主義の方向で日本が率先して initiative をとっていくことだと思うのです。緊張緩和、特にアジアにおける緊張緩和の方向に向かって日本が initiative をとるべきだし、としていくことができる筈だし、とることが日本をとりまく東南アジアであれ、中国であれ、ソ連であれ、アメリカであれ、日本に対して明らかに持っている警戒心とか不信感、時と場合によっては猜疑心ないしはジェラシーを少しでも消していくことのできる具体的な方向だと思うのです。日本は孤立しては生きていけないというのが、第二次大戦の教訓だった筈です。

じゃあ一体具体的に何をするのかということなのですが、やはり日本は中国とソ連と、それからアメリカとに話しかけて、このアジアの地域における、英語でいえば Nuclear Free Zone というか、不可侵条約という形をとるかは別として、そういう提言を日本がやって、しかも笑われないだけの対外姿勢を日本が示すべきだと思います。いまかりに日本の総理大臣なりだれなりが東南アジア地域において Nuclear Free Zone をつくろうじゃないか。あるいは不可侵条約を結ぼうではないかてなことを提案したとしたら、これはもう笑いとばされるくらいが落ちだと思うんです。一笑に付されるだけですね。だからそういう前向きの提言をしても一笑に付されないだけの日本の外交姿勢が私は必要だと思うのですが、じゃあそれは具体的にどういうことか。つまりそういうことを言って一笑に付されないために何をしたらいいかということになると、ひとつは何といっても中国問題、少なくとも日中国交回復ということは、これはもう大前提になると思うのです。残念ながら手おくれのきらいはあるんですがね。もちろん台湾問題というものが当然出て参りますけれども、日中の国交回復、これが第1の前提だと思う。

もうひとつは北方領土の問題について触れられましたけれども、やはり私は北方領土要求をソ連の外務省に内に言うのではなくして、国民運動という形で持ち出したり、国連の場で総理大臣が北方領土の返還を要求する。そういう形には若干疑問があるのです。つまりソ連に対してはわれわれ北方領土のことは忘れていませんよ

ということをリマインドし続けることは大いに必要だけれども、それを国民運動的な世論的なものとして大的に出すということは、これはソ連を窮地に陥れるだけだし、ソ連が東ヨーロッパにおいていろいろな他の国々と国境問題を抱えていることを考えると、これは決して得策じゃない。そういうことをし続けると、北方領土を戻すというわれわれの非願の実現が遅れるでしょうし、いま一つは日本がこの地域における米、中、ソ、日あるいはインドを含めてもいいんですけども、そういうこの地域の安定に重要な役割りを果たす国々の会合を招集する。あるいは呼びかけるというのも、とても相手にしてもらえないくなると思うんです。

それからいま一つは、やはり、日本は、一方においてそういう呼びかけをするかたわら、国内においては4次防の5兆8,000億という膨大な、それが完成すれば世界第5位の軍事大国になるような軍事支出を押えていく、あるいは積極的に減らしていくという方向をとるべきだ。それをしないで4次防が5次防になり、5次防が6次防になるかもしれないという状況のもとに、アジアの平和のための4大国、5大国会議を招集するということは全くナンセンスでしかない。そういうようなことを具体的には考えています。

カーチス しかし、大体國弘さんに賛成ですかけれども、日本が initiative をとる場合はアメリカとの関係の問題があると思うんです。非常に initiative をとりにいく国だと思うんです。特に共産主義国に対する initiative をとろうとしたら、日本に対するたいへんな反発がアメリカ国内でおこると思いますけれども。日米間のコミュニケーションの問題ですが、去年、おととしから西ドイツのプラントがオイストボリティーク（東方政策）というソ連に対する initiative をとったでしょう。それは私の聞いた話によると、キッシンジャーさんが非常に反対したんです。反対はしたんだけれども、アメリカではどうも反対する勢力が弱かったんでしょう。それで反対をあきらめて、うまくいったんですね。ドイツがソ連に対する initiative をとったということは、これでドイツ、アメリカの関係が悪くなるとか、ひびが入るとかいうことはだれも言わなかつたんですけど、ほとんど。しかし、もし日本が中国かソ連か北朝鮮に対してプラントと同じような initiative をとろうとしたらたいへんなアメリカの国内の問題になると思いますね。そういう意味で佐藤総理のことばを借りて言うと、前向きに慎重ですね。（笑い） initiative とろう、考えましょうということぐらいで終わっちゃうんじゃないかと思うんです。そういう意味で、initiative をとるべきとは私も思いながら、どうも

いまの日米関係の中の日本が initiative をとるということは非常にむずかしいと思うのです。

國弘さんは、中国との国交回復が一番重要だとおっしゃるんですけども、ぼくはどうもそう思わない。もし7月15日の前に日本の総理大臣が中国との国交回復が必要だと考えて、日本がアメリカと中国の橋渡しになるべきだということをおっしゃったならば、ぼくは大歓迎する。だけれども、いま北京に走っていって、「もう台湾はどうでもいいから、早く中国と国交回復しなくちゃならない」と言うのは initiative というものが全然ないんで、アメリカがやったから日本もやらなくちゃならないということ終わっちゃうと思うんです。だからそういう意味で、もし日本が initiative をとるなら、それこそ慎重に、まあ今年は何もしなくて、来年はどうにかなうだろう。ニクソンが北京へ行ってどういう話をするかを見て、そのあとでやればいいと思うのです。

ぼくも中国との国交回復は必要だと思うんですけども、現時点ではそれほどあせることじゃないんじゃないかなと思う。いまの米中接近はアメリカの initiative というよりも中国の initiative だったと思うんです。中国がニクソンを招待したり、中国が何かアメリカと仲良くした方がいいという判断の上でいろいろなことをやっているでしょう。その判断の中の一つはやはり日米間が悪くなることは中国のためになる。そういう可能性がある限り、日本が何を言おうとしても、何をやろうとしても中国は交渉に応じないと思うんです。だからある意味で日中問題は今度のニクソン訪中のひとつの話題になると思うんです。話になるというか、彼が中国で何を言うかということは今後の日中関係にものすごく影響を与えると思うのです。だからニクソンが行く前に日本が何かしようとしてもあまり意味がない。というよりも、変な結果を生む可能性があるんじゃないかなと思うんです。

金山 一番最初に日米のハネムーンという話が出ましたけれども、いまドイツのお話が出ましたね。ドイツについては私はこういうふうに思うのです。確かにアデナウワー時代はあるいはハネムーンだったと思うんです。ところがその後というのはアメリカは大体の政策をドイツの頭越しにやってますし、ドイツもドイツでいまご指摘のとおり、たとえば東方政策もそうなんですねけれども、つまりアメリカを向こうにしてというか、あるいはアメリカに対決したようなやり方でやってきたと思うんです。日本もこれからはそういうふうになっていく可能性はなきにしもあらずという感じはするわけです。

いまはお二方からいわゆる外交政策としてのお話があったわけですが、私はせっかくお二方が非常に文化的感

受性の高い方なんで、こういう面を提起したい。それは何かというと、平和問題というか、平和主義を国際的に通用せしめるための文化的条件みたいなものをちょっとここで考えてみたいわけです。

そのままで第1は、日本軍国主義復活というイメージがあるということですね。これはもちろん歴史的な analogy ということを考えなければならぬ。

2番目には、いま申し上げたことと関係があるのであるが、日本に対する平和問題であれ、あるいは軍事問題であれ、一般的なイメージが分裂しているのではないか。たとえば、一方では平和主義があり、一方では4次防というものがあって、どっちがほんとうの日本の姿なのかということがうまく伝わってないのでないか。したがって日本は神秘の國みたいな、不可解なイメージがあるのであろう。

3番目には、ここでいよいよ文化的問題になってくるわけですが、平和憲法というものを日本はすぐ持ち出すのですが、果たしてそれは国際的に通用性を持ったものであるかどうか。みずから軍備を放棄して、「おれは丸裸になってるのでよろしく頼む」ということは言えるのかどうか。そういうことはいわゆる死生観の違いみたいなものまであるいは考えなきゃならないのではないか。

第4点としては、いわゆる最終兵器というか、あるいは核兵器に対する考え方の違い、たとえば日本人は核体験を持っており、核アレルギーというようなことをいわれることからもわかるように非常に核兵器に対しては敏感な反応をいたします。これはつまり今度核戦争がおこったらこれで世界は終わりだという考え方がありますが、アメリカ人とか中国人は一生懸命防空壕を掘ったりなんかして、とにかく生き残れるという考え方を持っている。つまり100% 終わりになるんじゃない、生き残れるんだという考え方を持っている。そういうふうな違いに果たして日本の平和主義というものは対応できるものなのかどうなのか。

第5点としては、今まで平和運動というものがいろいろな形で展開されてきたわけですが、一体あんなような平和運動でた果たしてスタイルとしては効果的なものなのかどうか、こんなようなことを思うのですが、その点何かコメントございませんか。

國弘 5つの点をあげられました。そのすべてについて申し上げることはできないと思いますけれども、日本軍国主義ということが中国のみならずアメリカにおいてもいわれるし、あるいは東南アジアの人々が日本に対して当然のことですけれども今日なお強い警戒心、不信感

を持っているというようなことがいわれるわけです。私は、アメリカや中国や東南アジアの人々がそういうふうに思っているというのはある意味では当然のことだと考えています。私が東南アジアの人だったら、あるいは中国人だったら、あるいはアメリカ人だったら、いまの日本の現状をつぶさに見ていて、やはり軍国主義なるものが復活しつつあるのではないかという危惧を抱くのは当然ではないか。なぜ当然か。

たとえば平和憲法があるから日本は軍国主義にならないんだと、こういうふうな説明を日本人はするわけですけれども、じゃあ一体憲法なるものが、骨抜きにされかかっているという実情はあるわけですし、5兆8,000億の4次防というのが3次防と比べて2.2倍もの巨額にのぼるということもあるわけですし、あるいはマラッカ海峡防衛論とか、アラスカから日本までの航路を海軍で守る必要があるんだというようなことを責任ある立場の有力な指導者が公言していることとか、そういう事実をあげれば切りがないわけです。日本の産業構造からいって資源確保をどうするかという点からもかなりのキナ臭さが出てきうる。私はその意味では過去の歴史的な類推に加えて、そういう恐れを外国人に抱かせてあたりまえな条件がそろいつつあるのではないかと思うわけです。

それから憲法9条について、日本人の死生観と欧米人のそれとの間に相違があるのではないかというご指摘ですが、私は憲法9条というものはきわめて先駆的な、そしておそらくは日本が今まで世界に問うたものの中でも最も、普遍的な価値を持ったりっぱなものだと思っているし、私が日本人であることを誇りに思うひとつの理由は、憲法9条を生み出した国だからだということなんです。

にもかかわらず、確かに死生観の違いという視点に立ちますと、私はやはり憲法9条というものはすぐれて、ユニークに日本的なものだと思います。客観的な見方ですね。私はかつて憲法9条というものは禊払いであるということを言って、いまは亡き三島由紀夫氏にたいへんほめられたことがあるのですが、それはどういうことかというと、禊払い、というのは日本の伝統的な神道、それも国家神道あるいは教派神道以前のかむながら(隨神)の道みたいなものにおけるひとつの様式であるわけですけれども、要するに死はけがれである。そののがれがある死を禊払いを経ることによって少なくとも主観的には存在をやめるんだ。客観的には当然残り続けるわけですけれども、主観的には死は禊払いによってなくなってしまうんだという考え方の象徴だと思うのです。ですから日本人は伝統的には死を美的な意識においてし

かとらえなかつたし、西欧的な形而上学的な意味において死をとらえるという姿勢は乏しかつたと思うんです。死といふものはもう主觀的には存在しなくなるわけですから、考慮、検討の対象であることをやめてしまう。Metaphysics が仏教伝来以前に日本であまり発達しなかつたのもそこらにあるのではないか。それに対して西欧の伝統の中では死とは何ぞやという問い合わせを徹底的に問い合わせ、哲學的に思考することによって死の意味を明らかにし、それと同時に死と対比されるものとしての生の意味を明らかにするという意味で哲學が誕生したといえるでしょう。

日本の憲法9条がなぜ禊払いかというと、憲法9条を持ったわれわれはとにかく戦争を放棄したんだ。金山先生のことばを借りていえば、これで丸裸になつたんだということによって戦争ないしは、現実の国家間の相克とか葛藤というものが客觀的には存在し続けるわけだけれども、主觀的にはそこでストップしてしまう。だから戦争の意味とか、国際紛争の意義とか、いわゆる世界政治というようなものについてはすっかり目をつぶり、その実相に迫つて戦争の形而上学、国際紛争の Metaphysics をついに発展させることなく終わつてしまつた。その意味において憲法9条禊払い論を唱えたわけなんです。

しかし、禊払いであれ何であれやはり今日のように世界がどんどん小さくなつて、あと20年もして space shuttle なんつものができれば東京とニューヨークの「距離」が58分になつてしまつ。そういうような時代にわれわれが生きているというのも、これまた非常に大きな現実だと思うのです。世界に、140近くも民族国家すなわち主權国家があつて、戦争をしたり国家対立があるということも確かに現実だけれども、それは小さな現実でしかない。実はもっと大きな現実っていうのがあるんですね。より大きな現実といふのは地球がこんなにも小さくなり、どんどん距離が圧縮され、空間が縮小していく、まさに地球人類36億が運命共同体としてしか生きられないんだということです。しかも環境破壊が、地球的なレベルでどんどん進行している。果たして人間といふ、人間を含む生態系が、これに耐えられるかどうかわからないという、これだってまさに現実なんです。その大きな現実の中に小さな現実をどういうふうに吸収させていくかというところに、これから世界の全ての人間が具体的に考えていかなければならぬ最も大きな課題があるし、その命題の行き着くべき先をシンボリカルに象徴しているのが憲法9条である。

だから憲法9条といふのは小さな現実の中においてはこれを実行することはむづかしいし、容易に行なわれる

とも思つていませんし、それが一種のアイデアリストックに過ぎるという批判も私は十分わかるのですけれども、しかし小さな現実に目を奪われるあまり、より大きな現実を忘れてはならない。そこにわれわれ日本人が果たし得る世界史的な、人類史的な……初めてだと思うんですよ。日本の歴史始まって以来こういう世界史的な、全人類的な役割りを日本が果たし得るかもしれないのは、そこに私は日本に期待をかけるわけで、そっちの方向にやはりわれわれ教育の場にある者が努力していかなくちゃならない。その点については私はパッションを持って語りたいし、また信じてもいるわけですけれども。

金山 高邁なお話をされたわけですけれども、こういう話はどうですか、外国人にちゃんと通じますか。

カーチス 通じることはもちろん通じます。

國弘 具眼の外国人には通じる筈ですよ。カーチスさんのようなね。(笑)たとえば、イギリスのトインビー博士がさいきん「トインビー市民の会」にあてたメッセージでこういっておられます。

「…私の日本に対する提言は、第2次大戦終了以来とてこられた平和的かつ建設的な政策を、今後ともしっかりと踏襲していかれるように、ということです。そして、たとえ純粹に防衛を目的としたものであれ、これ以上の軍備の増強はなんとしても避けられるように、ということです。これこそが中華人民共和国と日本との間に、相互信頼の上に立つた親密な関係を打ち樹てるための必要不可欠な前提ですし、しかもこの偉大な2国間の友情こそは、単に両国にとってのみならず、全世界にとって最も重要な目標であると信じます。」

カーチス ぼくは政治学者のせいかどうかわからないけれども、國弘さんのおっしゃるようなもっと大きい現実を、少なくともいまの世界の政治家は認めてないし、認める可能性はほとんどないと思う。

だからある意味で第9条が外人に通じるかどうかという問題は、通じることは通じるんですけども、非常に cynical な目で見るんです。大体ヨーロッパ人とかアメリカ人にしてみたら、第9条は何に似ているかというと、いわゆる 1928 年の Kellogg-Briand Pact (不戦条約)、もう戦争をしないという全世界の国が声明したものですが、ある説によると、Kellogg-Briand Pact の文句が第9条に入ってるんですってね。だから日本が経済大国になると、第9条は Kellogg-Briand Pact と同じように意味のないものになつてしまうというような cynicism がいまの外国人にあるのではないかと思うのです。そうならないよう日本は努力しなければ非常に惜しいと思う。

金山 それを克服する道はありますか。

カーチス だから日本としては第9条をどうしても守るんだというはっきりした理想を持っていけば守れるんですから。しかし、これはどうもあまり理想的で、非現実的な第9条はもうダメじゃないかと外国人によくいわれて、まあ世界はこういう世界だから、現実はこういう現実だから、第9条はある意味でいいんだけども、現実に通じないからもうやめようということになり得ると思うんですよ、いまの日本は、そうならないように日本人が努力すればそうならないんだから。しかしそれはたいへんなギャンブルでしょう。

國弘 そうです。全くそうです。ギャンブルです。そういう日本人の私を含めた少なくとも一部の日本人の悲願みたいなものに対して、日本の世論に対して影響力を増しておられるカーチスさんのような方に声援してもらいたいですね。ぜひエンカレッジはしてほしいと思います。

カーチス しかし、ぼくは第9条はけっこうだと思うのですけれども、これから平和の理念をもって対外政策をつくろうと思って第9条云々と言っても、具体的な政策の方が重要だと思うのです。もちろん第9条があるということを忘れちゃいけないと思うし、特にいまの若い人に、どうして第9条がつくられたか、それはどういう意味を持っているかという歴史の中の意味をよく教えないことはならないと思うんです。そしてこれはどっちかというと日本の指導者たちの義務だと思うのですけれども、具体的に第9条がどんなもので日本はこういう大きな現実の中でこういう理念でもって政策をつくろうということを日本国民に見せなくちゃ第9条がどうにもならなくなると思うのです。だから佐藤総理が、第9条があるからこのことはやれないというのは、ぼくは信用しないというよりも意味がないと思うんですよ。

國弘 さっき Kellogg-Briand Pactについて触れられたのですけれども、不戦条約の時代と今日との間には決定的な質的な相違があると思うんです。それは核兵器という最終兵器に近いものを人類が不幸にして手に入れたということですね。1発で広島型原爆の2,500倍くらいの破壊力を持っている核兵器が現実に存在しているということが1つ。それから何といっても環境破壊が全世界的な、地球的なレベルで進行しているということ、これは当時はなくて今日ある条件のいま1つだと思うのです。

もうひとつ申し上げたいのは、これは一種のおとぎ話みたいなものなんですが、古い仏教の説話を私の非常に好きな説話があるんです。それはめぐらのサルとして知られこういう趣旨なんです。

「昔々あるところに片目しかあいていないサルばかりの国がありました。そこへ1匹ある日たまたま両目のあいたサルがまぎれ込んで参りました。ところが両目のあいているサルは片目だけのサルから差別待遇を受けました。お前だけ両目があいているのはおかしいじゃないかと言われ身体障害者の扱いを受けました。そこで両目のサルも自分だけが両目があいているのが何かさみしくなって、孤立感、孤独感を覚え、せっかく2つ目があいているのに1つ目をつぶし、ほかの片目のサルの仲間入りをしました。」こういう話なんです。

日本は両目があいていると思うのです。憲法9条がまさに両目をあけさせたんだと思うのですが、ほかの国はみんな片目しかあいていない。あるいは両目がつぶれているやつも多い。アメリカなども両目がつぶれているんじゃないかと思うけれども、みんなが両目がつぶれている、しかし、片目しかあいていないからといって、せっかく2つりっぽにあいている目をなぜつぶすのか。むしろわれわれは、ほかの片目しかあいていないサルの両目を何とかあけるように努力することにこそ意義を見出すべきであり、そこに日本はまさに国際的なあるいは全人類的な役割りを果たす場があると思うんです。ぼく自身はその作業に日本人としてのプライドとある種のナショナリスティックな喜びを覚えるんですがね。しかしそれはいまカーチスさんおしゃったように、具体的な政策や、具体的な方針で裏打ちをされ、肉づけをされなくてはならない。

日本は具体的にどうすべきか

金山 いよいよ両目のあいた日本国民と両目のふさがったアメリカ国民のコミュニケーションをどのようにして円滑ならしめるかという問題についてお話を頼みたいのですが。(笑い)

先ほど、たとえば counterparts philosophy を、日本が持つておってそれがうまくいってないというようなお話をありました。それじゃ具体的に何をするか。たとえばいわゆる院外活動と申しますか lobbying にもう少し力を入れるんだとか、そういうことについてカーチス先生からご示唆いただきたいと思います。

カーチス 目ぐすりを輸出することだな。(笑い)

やはり一般的な話だとある意味で非常に話しやすいんだけれども、具体的な話になるとどうも見当がつかないことが多いですね。

金山 そうですね。それでは具体的に私の方から申し上げましょう。たとえば、いま「逆フルプライム構想」

というのがありますね。あれについてどういうふうにお考えになりますか。

カーチス これはもちろんさるべきことだと思うんです。今度外務省なんかがある程度やるらしいんだけども、このくらいの力を持っている国で日本ほど交流していない国はないですよ、一番やってない。しかしある意味でこの急速な経済成長でいろいろなギャップが出てきて、その交流計画はひとつめのギャップだと思うんです。50年代とか60年代にはそれほど交流する可能性もなかったと思うし、これから、遅いことは遅いけれども、一生懸命やればいいと思うのですけれども、それじゃあ交流しようとすると、だれと交流しようかという問題が出てくるんです。もちろんこれは複雑な問題ですけれども、アメリカとの関係になると余計に複雑だと思うんです。いわゆるアメリカの pluralism(多元性)を考えなくてはならないし、pluralism を考えてもどうも見当がつかないところが多いと思うんです。そういう意味で中国とかソ連との交流は非常にやりやすいと思う。ある意味でフランスでもイギリスでもアメリカとやるよりもやりやすいんです。

しかしひとつ考えなくちゃならないことは、アメリカと日本の制度の違い、いろんな面において、政治制度の違い、経済制度の違い、文化の違い、それらのことを考えなければいわゆる counterparts strategy に終わっちゃうんです。それで具体的に纏維問題でも出てきたような問題が余計出てくると思うんです。宮沢通産大臣が向こうに行って Stans という商務長官に会って道理を話しても、話にならないような counterparts の話でしょう。それでいよいよミルズ下院議員の問題が出てくる。そういうことはあるし、学者交流も同じようなことがいえると思う。ぼくはどっちかというと日本専門家という肩書きがついてしまったんですけども、もちろんアメリカの中で日本のこと勉強してよく理解しようとしている学者を育てなくてはならないとは思うのですが、残念ながらアメリカの日本の専門家のアメリカ社会における影響力は非常に小さいんです。だから日本専門家をいくら招待しても、総理大臣とか財界人とかをこういう日本学者に会わしてもそれほどアメリカにおける影響力が大きくない。だからたとえ日本のこととは知らなくてもいい、アメリカで影響力を持っている学者を招待した方が効果があると思う。国際政治の専門家とか、経済の専門家とかね。いまアメリカ全国で日本の経済をまじめに研究している人は大体15名か20名しかいないんです。だからアメリカの経済学者を日本に半年、1年でも招待していろんな人に会わして、いろんな資料をあげて、ある程

度日本語が読めるように訓練する方がいいと思うのです。

これはアメリカの問題だけではなくて、この間日経センターの大来佐武郎さんと話したら、それじゃあ日本でアメリカの実際の経済を研究している日本人は全国で何人いますかと聞いたら、彼にいわせると20名ですって。日本全国でですよ。このエコノミックアニマルの日本が、アメリカの実際の経済を研究している人が20名しかないということは考えられないことだけれども、経済だけでなくアメリカの議会政治の日本の専門家にだれがいるかというといい。現代のアメリカの政治を研究している人も非常に少ない。現代のアメリカの社会でも、國弘さん以外にだれがいるか、ぼくにはわからない。

金山 ぼくもわからないですね。

國弘 光栄ですな。でもどうかな。

カーチス ほんと、だからお互いにそういうような知識の不足とか、それが非常に大きいですよ。ある意味ではドイツとアメリカの関係は歴史的には非常に悪かったんですよ、日本とアメリカよりも悪かった。とにかく第1次世界大戦のときに日本とアメリカは同盟国だったんです、ドイツに対して。しかしいろんな意味で何となくいまのドイツを理解しているという自信もあるし、その事実もあるんです、アメリカには、そういう意味で日本を理解していない……まあ日本は理解できないような国だというイメージをつぶさなくてはどうにもならないと思うんです。

そこでぼくもうひとつ言いたいのは、具体的なことですけれども、日本の財界人のやり方にいろいろな問題があると思うんです。彼らは日本政府と同じように counterparts strategy を持ってるんです。だから中西部会とか南部会とかカリフォルニア会、そういうところでアメリカの財界人と話したら話になりっこないと思うんです。対立のままで終わるに決まってるんです。その小さな町、あるいはシカゴならシカゴでどういう人が出てくるかというと、エレクトロニクスの関係の連中、纏維関係の連中、日本に輸出したい品物を持っている連中、それで日本人と会うときにはそういう話ばかりするんです。日本のアメリカに対する輸出を縮小しろとか、ぼくの会社が日本でものが売れるよう自由化しろとか、そういう話ばかりで、いわゆる高いレベルの話になりっこないんです。

ある意味では日本の財界人は明治以来の伝統で、日本の国を代表しているという気持ちがあるでしょう。アメリカの財界人にはないです。だから日米経済何とか委員会で岩佐さんと植村さんが日本の責任者、向こうはハラ

ディーとマギーでしょう。しかしハラディーとかマギーが岩佐とか植村と同じような権力とか影響力、地位を持っていることは絶対ないんですね。そういう問題があると思う。だから日本の財界人がアメリカの財界人に会うことはいいことだけれども、日本の財界人がアメリカの新聞関係の解説者とかインテリ層、影響力のある大学の先生とか、議会人とか、ほかのグループの人に会ったら非常に効果的だと思うのですけれども、財界人交流ばかりだとどうにもならないような気がしてならないんです。

國弘 ただいまのカーチスさんのお話で日本の財界人は日本を代表しているという意識を明治以来持ってきたし、また現実に大きな力も持っている。アメリカのいわゆる counterparts とは違うんだということをおっしゃった。それはその限りにおいては賛成なんですが、ただひとつ日本の財界人も総論を論じている限りにおいては全体のことを考え、日米関係を巨視的に見ることもできるんだけれども、さて今度は自分が代表している業界とか業種という各論に入ると、必ずしも日本全体あるいは日米関係全体というような大局的な立場になかなか立ちにくくいう限界はあると思うのです。

それからいま最後におっしゃた、たとえばアメリカの大学人の中で、アメリカの世論形成に大きな影響力を持ち得るような人、あるいは議会人というような、そういう交流がもっと必要なんだということ、全く賛成です。さらに相手方を広げていけば、たとえば労働組合の、これは全国労働組合のみならず地方レベルの労働組合の指導者との交流とか、あるいはアメリカでいま私は新しい文明論的な変革がおきているというふうに見ているのですけれども、そういう新しい、若いうねりみたいなものを代表するような集団ないしは個人、たとえば消費者運動の指導者とか環境破壊防止運動の指導者とか、青年、大学の学生などでそういう指導的な立場にあり、影響力を持っている人たち、黒人解放運動、女性解放運動、その他いろいろあると思いますけれども、そういう人たちとのきめのこまかい交流ということと、そしてやはりそういうところと連帯を深めていくという意識が必要ではないか。つまりトップリーダーだけがボス交渉をしているというのではなくて、もう少し草の根(grass-roots)においていって交流を深めるということは必要ではないか。ただしそのためには、やはりアメリカが pluralism の国である、広大な国であるということにかんがみて、さっきも述べたようにアメリカについてもっときめのこまかい経済、政治あるいは、社会文化全体にわたる知識、データの収集、研究、あるいはアメリカの地域レベルに

おける世論形成の過程がどういうものであり、どういうメカニズムなのかということについての調査、そういうものが長い目で見た場合には不可欠だという感じがしますね。

カーチス その調査、研究は必要だと思いますね。

國弘 ひとつそこで思い出すのは、カーチスさんよくご存じのウィルコックスというアメリカの黒人の指導者ですね。ハーレムの中に住んで黒人解放運動をかなりラディカルな形でやっている人。今度また会ったのですが、彼は非常にラディカルですから、白人のリベラル派に対しても何か冷い目を投げかけているような、シニカルなところがあるんです。にもかかわらずカーティスさんには非常に敬愛を払ってるんで、私も彼と話していく非常にたのしかったんです。それはともかくとして、ウィルコックス氏、日本に招かれて3週間、山形県に民宿して、ひどく厚遇され日本人の先生方とか、地域社会の人たちと密接な接触を持ったらしい。ところで彼、日本に対して非常にいい印象を持って帰ってきたんですね。そしてハーレムのど真中にささやかなオフィスをかまえ、黒人解放運動に従事している過程で、ウィルコックスというたった1人の、しかし相当程度の影響力を地域社会に持っているアメリカ人が日本に対して非常に好もしい印象を持って帰ってくれたということは、これは1粒の種にはなると思うんですよ。それが大きなパンにまで広がるかどうかは別として、パン種としての役割りは果たしうると思うんです。

それから似たようなことは、シカゴのある2,000人くらいの労働組合の指導者と会ったときにもつくづく感じたんです。彼も労働組合の指導者という立場から、たとえば日本製品がどんどんアメリカの市場に入ってくる。それによってアメリカ人の労働者の職場が失われるということに対しては表向き強い批判をせざるを得ない立場なんですね。しかし彼の場合、日本の労働組合の招待で日本へ来て、そして今までアメリカ人が日本に対して持っていたイメージ、たとえば低賃金で、奴隸的な労働を強いるヤミクモに働くことによって日本はアメリカよりも貿易面で優位に立っているのだという神話が彼の中においては大きく打ち碎かれた。たとえば日本の労働生産性の高さとか、生活水準がとてもかくにも上がっていることとか、賃金水準もまだうんと低いけれども昔と比べればかなり大幅に上がっていることとか、付加給付がいろいろな形であるということなど、一通りは理解したわけです。そういうことを知った人が、たとえ2,000人であれ3,000人であれ1つの小さな地域集団のトップのリーダーの位置にいるということは、やはりバン

種としては役割りを果たすのではないかという気はするんです。つまり事実認定があやまつては相互理解もないでしょう。ところがわれわれの対アメリカ理解にも、アメリカ人の対日理解にも、事実レベルでの誤認や、昔ながらの神話がまだ沢山に残っている。それを少しずつでもいいから、崩していくことが、やはり必要なんで、そのための核を拡げていくことは有効だと思うんですね。

カーチス 長い目で見たらね。

國弘 そう、長い目で見たら。それでさっきカーチスさん言われたように、へたな財界のトップリーダー同士、あるいは政界のトップリーダー同士がおざなりな建て前論みたいなことばかりを言っている、そういう交流よりははるかに有効じゃないかという気がするんだけども。

カーチス 私、もう2つ問題を加えると、1つは翻訳の問題があると思う。というのは、日本のことを持ちと勉強しようと思っても資料がないんです。で普通の雑誌とか新聞には日本のことが出ない。だれかが最近調べた結果によるとアメリカの新聞のドイツと日本の記事についての分析をしたら、ドイツの方が5倍多いんです。

金山 エジプトが日本の3倍だそうです。

カーチス それはいま戦争の問題があるから多いんでしょうねけれども、非常に少ない。それから日本では英語でつくられている雑誌はほとんどないです。いわゆる一般的なことね。Japan QuarterlyとかJapan Interpreter.

國弘 あれはいい。

カーチス Japan Interpreter は私非常にいいと思うのですけれども、部数が800か900くらいで、だれも知らない雑誌なんです。それで大体日本の英語への翻訳は読めない英語なんです。読んでもわからないような、とにかく読んだらくたびれる(笑い)英語なんです。だから読む気にならない。やはり日本語の問題ですけれども、日本語を英語に翻訳する場合、單なる翻訳、直訳じゃどうにもならないんです。やはり翻訳する人がその内容をよくわかって、ちょっと想像して、この方はこのことを言おうとしているのだろうと思って、あちこちことばをふやさなくちゃならないんです。その意味で日本語からの英訳が非常にむずかしいと思うんです。それだけに翻訳のできる人を育てなくちゃならないんです。ところがどこかでそういうことをやっているかというと、どこもやってないんです。それをやらなければどうにもならない。

だからある意味で、いわゆるアメリカは世論の国で

あるということは疑問があると私は言ったのですだけれども、もしアメリカの世論を左右しようと思えば交流じゃどうにもならない。1億の日本人を全部向こうに送ってもしようがないから、やはり翻訳でアメリカの雑誌で日本のが読めるとか、日本でつくられている雑誌がアメリカ人にとって非常にもしろく読めるということでしたら影響を広げができると思うのです。いわゆる翻訳作戦を莫大な金を使ってやらなくてはだめだと思うのです。

もうひとつはやはり日本の英語教育ですね。というのは日米関係はアメリカだけの問題じゃなくて、日本にも問題があるんですね。アメリカ人は日本がよくわからない。少なくともそれを意識してるんですよ。しかし日本人はアメリカがわかると意識している。わかるとは意識してるんだけれども、ほんとうにそんなに深く理解しているかどうかにはぼくはちょっと疑問を持ってるんです。もしほんとうに理解しようと思ったら、やはりアメリカについていろんなものを読まなくちゃならない。いまみんな旅行するようになってるんですけども、それほどショッちゅう遠いアメリカに行くチャンスは少ないし、普通の人で行ける人は少ないと思うし、行ったってsightseeingで終わることが多いから、やはり相手の国についてのものを読むことですよ。しかし読むのに、それと日本にいるアメリカ人と話すのに英語ができなければどうにもならない。そういう問題もあると思うんです。

それでこのELECの雑誌の座談会で日本の英語教育が間違っているということはよくないかもしれないけれども、やはり日本の英語教育にはさまざまな問題があるでしょう。そういう点からいってもELECみたいなところをもっと日本の政府とか財界人が支持しなくちゃ、やはりこの事情はよくならないでしょう。もちろんアメリカにおける日本語の研究も同じような問題をかかえていますけれど、そういうことばの問題がやはりたいへんなことだと思うんです。またドイツとアメリカの話になると、ドイツ語はむずかしいことはむずかしいけれども、もちろん日本語ほどじゃないし、大体ドイツ人は英語を読めるし、ドイツ語を読めるアメリカ人は多いし、そういう違いはあるんですね。

金山 ただいま翻訳のお話を出ましたが、確かにご指摘のとおり日本では英語の雑誌とか英語の新聞が発行されていないわけではないわけです。しかしながらあれはどちらかというと、たいへんカネのある会社が、とにかくわが社に英語の雑誌の1冊でもなければ顔が立つまいというふうなことで、相手が読もうが読むまいが、とに

かくりっぱな印刷技術とりっぱな紙を使ってくだらない内容を発表しているというようなことになっているのではないかと考えるわけです。

そういうことでいうと、たとえば日本の本が、学術論文でも何でもいいですが、1つ英語に翻訳される間に、おそらく英語の本は100冊くらい日本語に翻訳されていると思うんです。そういうふうな文化的なギャップがあると思うのです。貿易関係では日本の方がまだ出超なんですけれども、文化的な面ではアメリカの方から一方的に入ってきているというふうにいってもいいと思う。

先ほどおっしゃったように、なるほどアメリカで日本の経済について研究している人の数が15人とか20人、それはそのとおりだと思います。しかしながらそういった人たちというのはロックウッドであるとかあるいはロフソスキーであるとか、たいへんりっぱな本を書いている人なわけです。ところが一方日本の側で先ほど20人というようなお話をあったけれども、あれはちょっとおかしいと思うんだな、ぼくの知ってる範囲でも20人くらいいますよ。だから数字は間わないにしても、その20人の人がそれじゃあロックウッドだとかロフソスキーと並ぶような本を英語で書いているかというと決してそうではないといふことをいえると思う。それの一一番わかりやすい例が、たとえば日本についてアメリカ人が理解しているのは何によって理解しているかというと、おそらくハーマン・カーン、アベグレン、ドラッカーこういう人たちが書いたものを…最近はこれにカーチスが入るわけですから、そういう人たちの書いたもので大体日本について理解をしているというふうに考えてもいいと思うんです。ところが、それはそれでいいんですけども、日本側からそれに対抗すべき何か文献が英語で出ているかというとそうではない。したがってハーマン・カーン以下の人たちの意見が非常に強く前面に出てくることがあると思う。そういう文化的なギャップに立ってわれわれはいまコミュニケーションの問題を考えているという認識が必要だと思う。

またもう一方、先ほど逆フルブライトの例が出ましたけれども、これは日本にそういう受入態勢があるのかどうかということを考えてみなければならないと思うのです。たとえば今まで総理大臣なんかが東南アジア歴訪とかいって東南アジアを旅行すると必ずといっていいくらい日本に留学生を呼ぶ数がふえるわけです。ところがそういうふえた連中に対して何をやっているかというと、千葉あたりの寮に入れて、便所の水も出ないみたいなところに放り込んでやっているわけです。それから文部省の日本語教育の政策が年々ネコの目のように変わっ

ているというような状態があると思うのです。ところが水道の水が出ないくらいならいいけれども、日本には一種の建物主義みたいなものがあると思うのです。これは何かというと、たとえば日本が国連に具体的に最近非常に強く積極的な意見を言ったというのは1つしか例がない。国連大学誘致ということです。国連大学誘致を日本がはかった場合に、日本においてはこういう考え方があると思う。日本は土地を提供する、あるいは建物を建てる。だけれども教育は建物じゃないんですね。これはカリキュラムもなきやならない、あるいは teaching staff もなきやならない。そういうものを一切考えないで、ただ国連大学という建物だけが建てばそれで事足れりといふうな、そういう考え方があるのではないかというふうに考えるわけです。そういうことからいくと、いまおそらく日本にはたしか4,000人の外国からの留学生がいるわけですけれども、そういう人たちに一体われわれがいま何をしているかということをよく考えて、その上に立って国連大学誘致などということを考えなきやいかんし、あるいは沖縄に南北センターをつくるとかいってのけれども、それもやはり同じように考える必要があるのではないかというふうに思うわけです。

英語教育についても同じなんで、近ごろは hardware それから audiovisual だとか、そういうものはたくさんあるわけですけれども、その内容は一体何なのかということを問う場合に、ELEC は別として、ほかのところはたいへんお粗末な状態にあるということがいえるのではないか。そういうところをよく考えて逆フルブライトだとか国連大学誘致というものをわれわれは考える必要があるのではないかと思うのです。

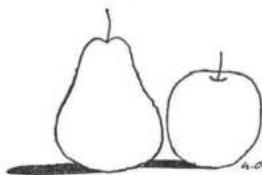
それからアメリカにおける日本語教育というのも問題があると思うのです。アメリカにはおそらく5,000人くらいの日本語を勉強している人たちがいるといわれておりますけれども、日本がアメリカを含む外国に日本語教育ということで一体何を貢献しているかということもまた問わなければならないというふうに考えるわけです。日本人は国際会議に出席して英語ができない、できないというのでフラストレーションをおこしている。しかしながらその日本人がそれじゃあ日本語で話せたらうまく話すのかといったら、それもそうでないし、また外国人にじゃあ日本語をちゃんと教えてやっているかというとそれもまたそうじゃない。八方詰まりじゃないかというようなことも考えなきやならぬというふうに思います。

國弘・カーチス 全くそのとおり。

金山 それじゃあここで三者の意見がやっと一致したところでお開きにしたいと思います。（速記：林節子）

Mother Goose の世界

—雑感的序説(その9)—



HIRANO, KEIICHI
平野敬一

'apple pie'についての補説

この「雑感」の第7回で、わたくしは 'as American as apple pie' という表現について若干の注文をつけてみた。つまり、ほとんど cliché といっていいほど定着してしまった感じのするこの流行表現も、事実という点では、かならずしもあたっていないのではないか。イギリスの伝承童謡にはアメリカの独立以前の昔から 'apple pie' は瀕出するし、隣国のカナダにしても、アメリカに 'apple pie' の独占を許したくない気持があるのでないか、というのがわたくしのいちゃもんだった。わたくし一人のかってな言いがかりのつもりでいたら、やはりアメリカの外では、この表現に文句があるらしく、カナダの *MacLean's* 誌¹⁾ は表紙に Sam Etcheverry というプロ・フットボール・チーム (Alouettes) の head coach の顔を出し、「...you're as Canadian as apple pie' (italics は筆者) という caption をついているのである。こういういいかたをする場合、そこにはカナダ人特有のアメリカにたいするある屈折がはいっているのであるが、いまはその問題に立ち入らない。ただ大衆誌の表紙にこういう表現が出てることに注目されたい。

ところが、2号後の同誌11月号にこの表紙の caption にたいする一読者（イギリス人）からの反応が掲載されている。いわく 'Concerning the cover of your September issue: whether Sam Etcheverry is Canadian or not, apple pie is British and has been for hundreds of years.' (貴誌9月号の表紙について。S. E. がカナダであろうがなかろうが、アップル・パイはイギリスのものであり、過去何百年来そうだったのである)と。

この投書者はどうやら 'as American (or Canadian) as apple pie' といういいかたを認めていないらしい。当今流行のこの表現に、いさかひっかかりを感じるのは、本稿の筆者一人でないことがこれで証明されそうである。

なお、この表現を流行させたのは、たぶん Rap Brown

か LeRoi Jones でなかったか、とわたくしは同じ稿に書いたが、正確には Rap Brown が 'Violence is as American as cherry pie' (italics は筆者) といいだしたのが、ことのはじまりらしい²⁾。一言訂正まで。

Nursery Rhymes for the Times についての補説

同じ「雑感」のなかで、わたくしはさる4月の「地球の週」(Earth Week) にアメリカで発行された *Nursery Rhymes for the Times* という本のことについてふれた。これは、伝承童謡のパロディーという形をとて、公害問題を訴えたものということになっていたが、わたくしは当時まで実物をみておらず、Time 誌に掲載されていた1例をそのまま紹介することしかできなかった。しかし、その後、在米の友人が現物をみつけ、1冊送ってきてくれたので、そのなかからもう3篇ほど紹介してみたい。

(なおこの前この本のことを「小冊子」としたのは間違いだった。本誌より一まわり大きい絵本なのである。)

まず、前回（その8）で紹介した 'Old King Cole' の替え唄。

Old King Cole was a merry old soul
And a merry old soul was he;
He called for his broom
And he called for his pail,
And he cleaned up the land of the free.

谷川俊太郎の訳し方をまねさせてもらうと、

コールの王さま 愉快なお方、
とても愉快な お人がら。
ほうきを持ってこさせ
バケツを持ってこさせ
自由の国の大掃除

1) *MacLean's*, September 1971.

2) cf. *Time*, October 25, 1971, p. 26.

ということにでもなろうか。‘land of the free’といふのは、いうまでもなくアメリカ国歌 *The Star-Spangled Banner* のなかの ‘O'er the land of the free and the home of the brave’ という歌詞からきたもの。自由なる者たちの土地アメリカのこと。コールの王さまといえども、音楽にうつつをぬかしている時勢でないという趣意か。

またこの「雑感」の第1回でとりあげた ‘Jack and Jill’ の唄の替え唄がでている。

Jack and Jill went up the hill
To fetch a pail of water;
The trip, you see, was most unsuited,
Since the water was polluted.
(ジャックとジルは山へ上りました。
バケツに一杯水を汲もうとして。
ところがとんでもないことでした。
その水が汚染していたのですから。)

山のうえの水まで汚染していっては、人類も救いようがないだろう。

さらに ‘The house that Jack built’ のパロディーがある。

This is the river
That carried the waste
That spilled from the house
that Jack built.
(これが
ジャックが建てた
家から排出された
廃棄物を運んだ
川です)

この替え唄ももと唄と同じようにもっともっと長くなるのだが、その一部だけあげてみた。もと唄は万人周知のものだから、もとよりかかげてない。どの1篇をとってみても、読者がもと唄を知らないかもしれないという懸念は、まったく不要なのである。伝承童謡が生活の一部になり、現代の英語と言語的なズレも現代の感覚との時代的ズレもほとんどない点、くりかえしになるが、やはり驚嘆に値することだと思う。

もう1篇だけ。このもと唄は、本稿ではとりあげたことがないので、まずそのほうからあげてみる。

Oh where, oh where has my little dog gone?

Oh where, oh where can he be?

With his ears cut short and his tail cut long,

Oh where, oh where is he?³⁾

(ボチはどこへ行ったんだろう？

どこに、どこにいるんだろう？

耳は刈りこみ、尻尾はのばし、

ボチはどこにいるんだろう？)

動物を扱った伝承童謡は多い。イヌ、ネコ、ブタと動物別に分類しても、それぞれかなりの数になるはずである。この唄は、イヌの唄のうちでは、比較的あたらしく、アメリカは Philadelphia の Septimus Winner (1826~1902) が作った “Der Deitche's Dog” (「ドイツ人のイヌ」のつもり) の一部なのである。Winner は本稿 (その6) すでに紹介した ‘Ten Little Injuns’ の原作者でもあるので、これでイギリス伝承童謡として残る唄を2篇つくったことになる。伝承童謡の作者は匿名 (anonymous) が原則だから、Winner の場合は異例ということになるのだろうが、Opie によれば、この作者は「現在ではほとんど知る人もない」⁴⁾ のだから、この唄は、ほぼ作者不詳の域に近づいているといつてもいい。

替え唄のほうをあげてみよう。

Oh where, oh where, has my little dog gone?

Oh where, oh where, can he be?

In his depravement, he sullied the pavement.

He should have been curbed⁵⁾... don't you see?

(ボチはどこへ行ったんだろう？

どこに、どこにいるんだろう？

いけないことに、歩道をよごしたの。

端っここのとこでさせなくっちゃ…おわかりにならない？)

飼い犬の糞の始末は、東西どこの都会でも大きな問題になっているが、替え唄の作者が住む New York では、とくにうるさいらしい。

なお、この環境汚染のパロディーから話はそれるが、

3) Opie, *Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (略 ODNR)
p. 151.

4) *ibid.*

5) cf. curb=vt. lead (a dog being walked) to the curb to pass its waste matter (*Webster's New World Dictionary*²⁾)。このきわめて現代的な ‘curb’ の用法はまだ英和の辞典には記載されていないようだ。

次のような文も、同じもと唄の echo と考えていいように思う。

Where, oh where, is the wit and cutting edge of "The Group"?⁶⁾ (italics は筆者) 『ザ・グループ』の才知と鋭さは、どこへ、どこへ行ったのだろう

この絵本の作者(作詞とさし絵の両方)は Jeff Sparks。本職は New York 市の American Museum - Hayden Planetarium の広報担当官ということになっている。作曲もやる多芸多才の人らしい。

Sparks のこの絵本は、その後 Jack Anderson のコラム 'The Washington Merry-go-round' にも紹介された。⁷⁾ このコラムはアメリカ政界の不正暴露 (exposé) を売りものにしているので(少なくともわたくしはそう受けとってきた)，こういう伝承童謡のパロディーの紹介は、いささか場違いといつていい。しかし、環境汚染の問題は、もはや場所がらをかまつておれないほど深刻になったということなのかもしれない。それに、マザー・グースの替え唄というのは、内容がいかに深刻でも、英語国では読者受けのすること間違いなしである。替え唄の秀作を小耳にはさんだら、政治評論家でもそれを読者に伝え、楽しみをわかちたくなるのかもしれない。

Longfellow のことなど

Longfellow (1807—82) というアメリカの詩人は、近ごろさっぱり人気がないらしい。明治から大正へかけてわが国ではこの詩人はよく読まれ *Evangeline* (1855) や *The Courtship of Miles Standish* (1863)⁸⁾ が英語の教材として愛用された時期もあったというのに、いまは昔日のおもかげもない。いまの日本の中年以下の世代の人たちは、ほとんど Longfellow を読まずにすごしてきたのではないかと思う。詩人の人気に消長があるのは、格別珍しいことではないが、当節はやらないからといって、この詩人を素通りしていくては、たとえばアメリカ人の popular taste を理解する上にも、大きく事欠くことになるのではないかという気がする。

本稿では、詩人としての Longfellow の再評価とか文学史的位置付けというおかど違いのことを意図しているわけではないので、この評価の問題にいっさい立ち入らないが、わたくしがいいたいのは、英語の学習者として、たとえば 'Under the spreading chestnut tree'⁹⁾ とか 'In the forest primeval'¹⁰⁾ といった詩句を Longfellow と結びつけるのに難渋するようだったら、やはり困るので

ないか、ということなのである。英語国で「3才の童子も」といえば誇張になるが、まず、小学校の上級生なら、こういう詩句を identify するのに苦労しないはずである。

マザー・グースの唄を素通りして英米文学や英語を研究することの心もとなさ、危なっかしさについて、わたくしは注意を喚起してきたつもりだが、英語国のごくふつうの教育を受けた人たちがもっている literary taste (文学の嗜好)，またそれを形成するもの(たとえば Longfellow の作品のような「通俗」なもの)を無視して、いたずらに現代詩や新批評を追っかけていると、どこかで足をすくわれることになるのではないか、という懸念がするのである。時代時代の流行に対する感度はかなり——ときには必要以上に——鋭いが、こういう基礎的常識となると、それに対する顧慮が日本の英語英文学教育において著しく欠けているのではないか、というのがわたくしのいつわらぬ感想である。

マザー・グースの唄のことを調べていると、ときどき思いがけないところで Longfellow に出会う。この「雑感」の第3回に Longfellow 作と伝えられる次の唄を紹介した。

There was a little girl, and she
had a little curl
Right in the middle of her forehead;
When she was good, she was very,
very good,
But when she was bad, she was horrid.¹¹⁾

しかし前回は訳をつけなかったので、今回は白秋の訳をあげてみる。鈴木三重吉らの『赤い鳥』誌に掲載されたものである。

額(ひだ)のまん中に、きらきら縮(ひ)らした
小さな捲毛(まき)の、
小さなお嬢(むすめ)っちゃん、

6) *The Economist*, November 6, 1971. Mary McCarthy の近作 *Birds of America* に対する書評から。

7) *The Japan Times*, September 18, 1971.

8) 明治時代に前者が「乙女のみさお」、後者が「將軍の恋」という題名で邦訳されている。

9) "The Village Blacksmith" の出だし。明治3年にすでに中村敬宇によって漢訳された。「影いとひろき栗の樹の…」の宮崎湖処子の訳は明治26年に出てる。吉武好孝「ロングフェローと明治文壇」(『日米文化交流の百年』1967)が詳しい。

10) *Evangeline*, 'Prelude' から。

11) Opie, *ODNR*, p.187—p.188.

御機嫌(ほき)いい時は、
ほんとにいい子で、
お悪い時には怖(ふき)い子。ソレ、怖(ふき)い子¹²⁾。

これに少し手を加えたものが、翌年刊行の『まさあ・ぐうす』(1921)に収録された。

Opieはこの唄を Longfellow の作と断定したいらしいのだが、若干の疑点があり、結論が出ないとするほうが穩当であろう。ただ、Longfellowはこの童謡の作者に擬せられるだけあって、イギリスの伝承童謡をこよなく愛したらしい。特に好んで、この詩人が朗誦したのは、次の唄だと伝えられている¹³⁾。

What are little boys made of, made of?

What are little boys made of?

Frogs and snails

And puppy-dogs' tails,

That's what little boys are made of.

What are little girls made of, made of?

What are little girls made of?

Sugar and spice

And all things nice,

That's what little girls are made of.¹⁴⁾

(男の子は何でできる、できる？

何でできている？

蛙(かわ)にカタツムリ、

それに小犬のしっぽ。

男の子はそんなものでできている。

女の子は何でできる、できる？

何でできている？

お砂糖に香料、

それにすてきなものばかり。

女の子はそんなものでできている。)

この唄の初出は J.O. Halliwell の *The Nursery Rhymes of England* (1844) となっている。最初は 'little boys' と 'little girls' を主題にした上掲の 2 スタンザだけだったが、次々と追加があり、まずこれに 'young men' と 'young women' のスタンザが加わり (1846)，次いで 'old women' (1892)，さらに 'our sailors' と 'our soldiers' の 2 スタンザ (1905) が加わって合計 7 スタンザの唄になったのである (もっとも第 3 スタンザ以下は省かれることが多い)。最初の 2 スタンザの作者をイギリスの詩

人 Robert Southey (1774—1843) とする説があるが、これは前の唄の Longfellow 作者説より、さらに根拠薄弱である。

アメリカには、おそらくこの variation だと思われる 'Girls are dandy/Made of candy...' ('女の子はすてき、お菓子でできる…') ではじまる唄があるが、Opie 編のどの童謡集にも採録されていないようである。とにかく、Longfellow が愛好したこの唄は、伝承童謡中でも人気のある唄のひとつで、よく知られているものだが、はたして私たちの「常識」になっているかどうか。むしろ、たとえば

Eye of newt and toe of frog,
Wool of bat and tongue of dog¹⁵⁾.
(いもりの目の玉、かえるのかかと
こうもりの羽、むく犬の舌)

とあれば、たちどころに「マクベス」の妖婆の呪文と指摘しうる勉強家も、伝承童謡の 'frogs and snails/ And puppy-dog's tails' となると首をかしげて即答しかねるという場合が多いのではないか。わたくしたちにとって、多くの場合、シェークスピアのほうがマザー・グースよりやさしい (すくなくとも調べやすい) のである。英語を母国語とするものにとって、事情は、いうまでもなくその逆であろう。

この唄の echo と思われるものに、次のような例がある。'Lew Archer' ものでさいきん人気の高い Ross MacDonald (1915—) の推理小説の一節である。警察で取り調べを受けたある女性が、その後で私立探偵 Lew Archer にたいして

"All those official faces are like death masks. You have a human face, you're made of flesh and blood."
(「あの役人どもときたら、みんな死んだような顔なの。あなたのは人間の顔よ。ちゃんと血も肉もあるって感じ。」)

とおせじをいうと、Lew Archer は

"Flesh and blood and all things nice."¹⁶⁾

12) 『赤い鳥』、大正9年2月号。

13) Opie, ODNR, p. 101.

14) Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book*, p. 69. ODNR の version と若干異なる。

15) *Macbeth*, IV, i, 14. 邦訳は三神勲。

16) Ross MacDonald, *The Way Some People Die* (1951), ch. xxiv.

〔「そう、血や肉やいいものばかりでできてるんだ」〕
(italics は筆者)

と答える場面がある。これは、もちろん先にあげた唄の第2スタンザの 'Sugar and spice/And all things nice' を踏まえたもの。くりかえしいことだが、こういう伝承童謡由来のニュアンスを知らなくても、この推理ものの筋をたどるのに、すこしも不自由はない。しかし、native reader ならこの場面で、そういうニュアンスを感じとらないはずはないのである。そして、つい 'What are private detectives made of, made of?' とでもいってみたくなってくるのである。

'Over the hills and far away'

Ross MacDonald はアメリカ生まれのカナダ育ち。小説の舞台がアメリカ西部になっている場合でも、たとえば 'chesterfield' (=sofa) というカナダ英語を平気で使うあたり、その育ちは争えず、その点もわたくしには興味のある作家なのだが、ここでわたくしたちにとってたいせつな点は、この作家がイギリスの伝承童謡にじつによく親しんでいる（らしい）という点なのである。MacDonald の童謡の使いかた、まことに例にあげたイギリスの Agatha Christie や Van Dyne のような意識的な使いかた、つまり童謡を話の展開に欠くことのできない道具として使うというやりかたでなく、もっと自然な技巧をこらさない使いかたである。いまあげた 'and all things nice' の例なども、筆を進めているうちにいつのまにかせりふにはいったという感じである。わたくしは Christie 式の使いかたより、このほうが好きなのである。

もう1例、この作家からあげてみよう。舞台は California. どこか行くえをくらました男が話題になっている。

She looked at the watch on her slim brown wrist.
"He's probably in Mexico by now. Over the hills
and far away."

"You think he went to Mexico?"

"That's what it looks like to me..."¹⁷⁾

（ほっそりしたよく日焼けした手首につけてある腕時計をみて彼女はいった。

「あの人は、もういまごろメキシコでしょう。山やま越えて遠方よ」

「メキシコへ行ったというのかい？」

「わたしにはそうみえるわ...」)

これは男女のなんのへんてつもない会話のやりとりなのだが、伝承童謡の詩句 ('over the hills and far away') がちゃんとなかに納まっているのである。うっかりすると気がつかないかもしれない。それほど無理のない自然な使いかたなのである。このもと唄となるものをあげてみよう。

Tom, he was a piper's son,
He learnt to play when he was young,
And all the tune that he could play
Was, 'Over the hills and far away';
Over the hills and a great way off,
The wind shall blow my top-knot off.¹⁸⁾
(辻楽師のむすこトム、
若いときに笛をおぼえたが、
吹けるのはたったの一曲
「山やま越えて遠方へ」という曲。
「山やま越えて遠方へ
わたしのリボンが風に舞う」)

('piper' はおそらく流しの笛吹きであろう。 'top-knot' は、17世紀から18世紀へかけて婦人が頭髪に結わえたリボン。かならずしもトムの 'top-knot' とくる必要はなさそう。) この第1スタンザ以下あと5スタンザほど唄は続く。トムのパイプは、どうやら一種の魔笛で、トムはパイプを吹いては、さかんにいたずらをするのである。たとえば、トムがパイプを吹くと、卵をかごにかかえている女人人が踊りだし、おかげで卵が全部割れてしまう（第5スタンザ），というぐあい。

他愛のない筋だが、この唄は、あるいはモーツアルトの歌劇「魔笛」(Zauberflöte) やドイツ伝説の Pied Piper of Hamelin と、また英文学でいえばスペンサーの『牧人暦』(The Shepheards Calender, 1579) に出てくる Tom Piper などと、どこかで、もうひとつなにかを媒体として、つながってくるのではないかという気がするのだが、いま探索してみる余裕がない。

この唄の初出文献は18世紀末に出た Tom, the Piper's Son という草双紙 (chapbook) の第2部ということになっている。しかし、トムが得意とした曲目の名 'Over the hills and far away' は、もっと歴史が古く、Opie は17世紀のパラッド "The wind hath blown my plaid

17) ibid., ch. xv.

18) ODNR, p. 408.

away”（「風がわたしのショールを飛ばした」）のなかに出てくる

And ore the hill and far awa
(ore=over; awa=away)

という歌詞にまでさかのぼっている¹⁹⁾。そしてこのパラッド自体、16世紀にまでさかのぼるのでないかとみられているのである。とにかく、たとえば John Gay(1685—1732) の傑作ミュージカル *Beggar's Opera* (1728 初演)にも ‘Over the hills and far away’ というのが現在伝承されていると同じメロディーで使われている(I, xiii)というから、これは、かなり古くから広く愛好されていた表現と考えなければならない。したがって、これを伝承童謡由来の表現というふうにいいきるのは、かならずしも正確でないということになろう。しかし、現在この表現が使われる場合、まずはそれは ‘Tom, he was a piper's son’ の唄を踏まえていると考えてまちがいはないようと思う。大多数の人は、この詩句から、伝承童謡を想起するはずである。

だいたいイギリスの伝承童謡には、これというメロディーがなく、ただ朗誦するだけのものが、かなりあるが、この ‘Tom, he was a piper's son’ は、じつに調子のいい明るい歌曲なのである。特に refrain 部となっている Over the hills 以下は、melodious という点では、イギリス伝承童謡のなかでは屈指のものだろう。あの軽快で美しいメロディーが耳にこびりついて離れないのは、わたくしだけではなかろう。

Ross MacDonald の例の場合も、伝承童謡由来と考えてさしつかえがないように思われる。この何百年来愛好されてきた phrase が、現代の推理小説の男女の会話のなかにはいりこんでも違和感をすこしもあたえないところを、もう一度たしかめていただきたい。しっくり納まって違和感を与える、それでいて長い伝承からくる独特的の味とふくらみをかもしだしている感じなのである。イギリスの伝承童謡の生命の長さと、こういう働きとは、

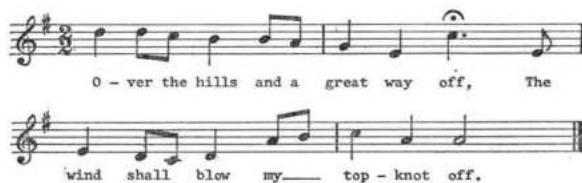
もちろん無関係ではない。

この phrase が使われている例を、比較的新しいところから、もうひとつあげてみよう。

At least, when I was young, adolescence was marking time, without power but also without responsibility, stretching on over the hills and far away.²⁰⁾ (italics は筆者) (すくなくとも筆者の若いころは、青年期というのは、足踏みの時期だった。なんの権力をももたないかわりに責任もなく、それがまたいつまでも続くような気がしたものだ)

わたくしは、むかしからこの ‘over the hills and far away (or a great way off)’ という phrase が好きだった。日本語にいいかえると、どうしてもある感傷と哀愁とがつきまとつのを避けることができないが、英語なるがゆえに、というより伝承童謡の Tom, the piper's son とのつながりあるがゆえに、保っているその快活さと明かるさとが好きなのである。しかし、この phrase が、ときとしてわたくしのどこか奥底で「あの山越えて里へ…」という日本の子守唄（「坊やはよい子だ、ねんねしな」）の調べと、ふしげに呼応することがある。

両者の表現に、たしかに似通ったところがある。しかし、イギリスの伝承童謡のほうは、たとえば



のようにテンポの軽快な陽気な旋律になっており²¹⁾、日本のわらべ唄のようなゆっくりした哀愁のこもった調



19) *ibid*, p. 409.

20) By Alan Brien in *New Statesman*, August 23, 1971.

21) cf. Leslie Woodgate (ed.), *The Puffin Song Book* (1956) p. 57.

べ²²⁾と、著しく対照的である。まったく性質の異なった2つの唄（一方は物語り唄、他方は眼らせ唄）の偶然似ている歌詞を比べても、たいして意味をなさないかもしれないが、マザー・グースの唄の ‘Over the hills and

far away' の明かるさと、わらべ唄の「あの山越えて」の哀愁とのきわだった対照の中には、両者の本質的な差異が象徴されているように、わたくしには思われる所以ある。マザー・グースの唄に比べた場合の、日本のわらべ唄の音楽的特質を指摘し説明する資格は、わたくしにはないが、たとえば鳥取に伝わる「羽根や羽子板」という羽根突き唄のなかの独唱部分「羽根や羽子板(はね)要(い)らねども/江戸の父(ち)つてんに逢(ま)いたいわいな」²²⁾の調べにこもるやさしい繊細な詠みいるような悲しみは、イギリスの伝承童謡には絶対にないと断言してもいいものである。マザー・グースの唄は、そうじてもっと野暮で、たくましく、野放図で線が太く、どことなく人を喰ったところがある。イギリスと日本の伝承童謡の個々の唄でなく、それぞれの総体——これは印象としてしかとらえようがないが——を比べ合わせると、両者を育んだ文化の基本的性格、あるいは文化の地声(じごゑ)といったものの違いが、観念としてではなく、実感としてわかってくるような気がする。文化とは、しゃせん、そういうことなのだろうが、わたくしには、いまこういう差異を概念的に整理したり理論化したりするだけの意志も興味もない。わたくし個人にとって、より切実な問題は、たとえばわたくしはイギリスの伝承童謡と日本の伝承童謡とのいずれにも強く惹かれるが、その惹かれかたの質的

な差異の問題である（これは、もちろん、どちらが自分の「専門」かという皮相なラベルの問題とは次元が違う）。そして、そのさらの奥には、マザー・グースの唄のように、自分の育った文化とは究極に異質の文化に根を下ろしてゐるものに、どのていど接近が可能なのか、はたしてわかるようになるものかどうか、という問題がひそんでいる。「童心」の世界は、人類に普遍であり、国境を越えるはず、などと安易なことをいっておれない気がするのである。（マザー・グースの世界を、一概に「童心」の世界と規定できないことは、今までのわたくしの「雑感」から、あるていどわかっていただけかと思う。）マザー・グースの世界に没入していると、わたくしは失われた自分の過去の世界へ戻ったと感じることがあるが、それがはたして錯覚でないのか、はたしてこれが自分の帰るべき巣だろうか、という疑念が同時に頭をかすめるのである。ある年代になると、人は帰巣（あるいは帰葬？）の思いにとりつかれるというが、そろそろわたくしもそういう齢(年齢)に達したのかもしれない。

（東京大学教授）

22) 町田嘉章・浅野建二共編『わらべうた』(岩波文庫, 1962), p. 99 より。

23) 同上, p. 78.

(p. 46 よりつづき)

るに当たり、clamp, clench (one's teeth) と意味を同じくする。

以上、日英の身振り言語の食い違いを示す例を幾つかあげてみた。これらの相異を組織立てとらえるためには、日本のなかの身振り言語をもっと網羅的に取扱わねばならないし、英語社会のなかの身振り言語に対しても、日本人の反応調査を行ない、両者を対比させなければならない。しかし、ここに示した少ない例だけでも、身振り記号による異文化間のコミュニケーションの困難さは充分に指摘し得たと思う。

これまでの外国語学習用辞書では、以上のような相異点に対する考慮がかけていたのではあるまいが、身振り記号が言語記号をおぎなって考え方や感情を伝達するものであれば、それを正しく解読する鍵を辞書は用意すべきであろう。和英辞典に限って言うならば、身振りの言語的記述に対し一貫した編集態度をもたず、ある身振りに関しては、意味の対応を重んじ意訳とし（「目尻をさげる」 = make eyes at (a woman)）、他の身振りに関して

は直訳をこころみて、意味を変化させたり、通じないものにしている。その際、単に意味の対応関係が無視されているというばかりでなく、身ぶりの舞台である生活の場の違いへの配慮の不足も目立つ。たとえば椅子と置、距離感の違いを無視して「膝をすすめる」を “come nearer, draw nearer to (a person)” とすると、「気にいってのり出す」姿どころか、スリがねらった相手に必要以上に近寄るような、するすると歩いて体を寄せるあやしげな姿になってしまう。以上の点からみても、今後の辞書編集に先立って、対象となる2つの言語の文化的背景の比較研究がもっと徹底した形でおこなわれるべきだろう。



（東京女子大学短期大学部助教授）

TEACHING THE TELEPHONE BOOK

Clifford V. Harrington

"Anyone who calls himself an English teacher ought to be able to teach the telephone book." This startling assertion was made by a friend of mine while we were discussing the inadequacies of a certain textbook we were required to use. It was his contention that the teaching methods and the skill of the teacher were far more important than any text he might be working with.

I agreed with him, but long after our conversation what stuck in my mind was his remark about teaching the telephone book. His statement had been made metaphorically, but it set me to thinking. Could it be interpreted literally? Could a teacher use the telephone book as the basic text for a class of students studying English as a second language?

The commonplace phone book, I decided, had much to recommend it, because it represented almost the complete spectrum of the life of the people it served. The Yellow Pages were a treasure-trove of subjects and information that could provide the basis for an almost unlimited number of lessons. By using the telephone book, a teacher would be dealing with authentic material. Such a publication, because of its unusual qualities, might arouse the curiosity of the students.

The more I thought about this idea of teaching the telephone book, the more intrigued I became with it. Finally, I was determined to prove that it could be done. Here is an account of the initial experiment that I conducted in this field.

The first and most important problem was the selection and acquisition of a sufficient number of telephone books to make the class possible. The books had to be small enough so that they could be handled with ease, yet large enough so that they would contain a substantial number of names

and Yellow Page listings. I needed about fifteen copies, one for myself and fourteen for my students. By assigning two persons to a book, this number would be adequate.

First I went to the American Cultural Center library in Tokyo and found in their phone book collection a volume from an eastern American city that would fit my requirements. I wrote to this company, explaining my project and asking for new, outdated or even used books, but I received no response to my letter.

Next I enlisted the aid of my father, because I had no more time to contact other telephone companies by mail. I had to have the books within the next two months, if they were to be of use to me. My experiment had to begin then, or it might never be conducted.

My father's direct approach worked. He was able to obtain not just the fifteen books that I asked for, but a total of thirty-two brand new volumes. This windfall made it possible for me to provide each student in class with a book of his own. These books came from a small California community and suited our purposes admirably.

Once my parents had mailed the books, I prevailed on my father to go out again to obtain supplementary materials. I asked him to get anything that came to mind. Of course, I gave him as many suggestions as I could. He started with a quantity of street maps and copies of the local newspaper. Then he added such articles as picture postcards, restaurant menus, church bulletins, business cards, Chamber of Commerce brochures, bank deposit and withdrawal slips, bus schedules, mail order catalogs, and even real parking tickets donated by the police department.

My next concern was the preparation of a list of possible subjects to be developed into lessons. I had to keep in mind that my students, though they were all adults, ranged widely in age and interests. The lessons had to have broad appeal or the students might become bored.

The topic headings in the Yellow Pages of the telephone book provided many themes, while the supplementary items collected by my father suggested others. During the course of the semester, our dialogs included such subjects as planning a vacation, re-upholstering furniture, making various kinds of telephone calls, sending a child to a swimming school, buying a pet, renting an apartment, receiving a parking ticket and paying a fine, ordering a complete lunch in a restaurant, replacing a broken window, selecting a movie to see, resisting the pleadings of a door-to-door salesman, buying a plastic swimming pool, and planning a breakfast menu and buying the required groceries. Also during our work we learned about the history and the features of the city itself.

In teaching the various lessons, I employed a variety of techniques, including what might be described as simulated conversations, guided conversations, free discussions, story telling and role playing.

In the simulated conversations, I used dialogs which I had prepared myself. These contained a number of blank spaces that had to be filled in by the students through the use of the phone books or other materials. They practiced the lines aloud after my model. Then I had various students assume the roles in the dialog while reading from the printed page.

These conversations in turn were used for guided conversation. That is, after discussing the contents and the new words, I asked prepared questions about the conversation. This exchange in itself became a sort of guided conversation. The items included questions of detail, questions calling for the interpretation of information and the drawing of conclusions, and questions involving the students' own ideas and experiences as they related to the subject. During these sessions, I encouraged discussion, disagreements, and even some digres-

sions, because I wanted to include as much real communication as possible.

In the story telling phase, I asked one student to describe the conversation in his own words. He could use short or complex sentences, according to his ability. This re-counting of the content indicated to me to a certain degree how well the student understood the dialog and its cultural implications. If he missed a major point, I could assume that others had missed it also and take steps to make that point clear.

Finally, I asked students to pretend that they were in the situation just discussed and to recreate the subject that we had been dealing with in conversations of their own. In this phase of the work they either were themselves or played such roles as salesladies, waiters, housewives, policemen and repairmen. Whenever possible we re-arranged the chairs and tables in the classroom for greater realism.

Of course, I could not employ all of the techniques mentioned here in any one lesson. Instead I used those that seemed most applicable within our forty-five minute time limit.

I also paid attention to vocabulary building throughout the classroom periods. The display advertisements in the Yellow Pages and the various printed materials provided many useful words for the students. I allowed them to explain these vocabulary items to each other in English whenever they possessed the knowledge. What one student did not know, another sometimes did.

From time to time we had no prepared lesson. Instead we just spent time looking through the phone book and discussing what we discovered as we went along. On one occasion, we looked through it for all the products that were from Japan. On another, we looked for the family names of the students in class. More than half were successful, because this California community had many persons of Japanese ancestry. Students whose names were listed used the corresponding addresses and telephone numbers as their own during the class sessions. (The others selected numbers and addresses at random.) On yet other occasions, we looked at the street scenes in the

postcards and tried to find the companies and stores in the phone listings.

Whatever we were dealing with we would try to pinpoint the locations on our maps. In turn we used these locations for practice in asking and giving directions. If we told someone to walk three blocks down the street and turn right, we were referring to real streets and places.

Here is one lesson involving the telephone book as it was presented in class:

Ann: You don't look very happy, Bob. What's the matter?

Bob: I've got a problem. My mother's birthday is tomorrow and I forgot to get her a present.

Ann: Why don't you buy her a box of candy? My mother likes that.

Bob: Well, my mother is on a diet and has to lose weight.

Ann: Don't worry. We'll think of something. You still have some time.

Bob: You don't understand. My mother went to visit her sister in Pennsylvania and nothing will reach her in time.

Ann: Why don't you send her a telegram?

Bob: I can't do that. I sent her a telegram last year when I was in Florida.

Ann: Say, I've got an idea. Send her a bouquet of flowers.

Bob: How in the world can I do that? Her birthday is tomorrow and she's in Pennsylvania.

Ann: Don't worry. Let's look in the telephone book under (florists). Here's the listing on page (127). Let's see. Here's an ad for Navelet's Florists. Oh, they must be good.

Bob: Why do you say that?

Ann: They've been in business since (1885).

Bob: What is that symbol there? It says FTD.

Ann: It stands for Florists Transworld Delivery. They can send flowers all over the world. Pennsylvania should be no trouble.

Bob: How do they send the flowers?

Ann: They contact a florist by wire in the city where your mother is and that florist sends the flowers.

Bob: I'm a little short of cash right now. It

might cost too much.

Ann: The ad says all (national credit cards accepted).

Bob: Okay, I'll send flowers. I guess you've solved my problem. What's the telephone number?

Ann: (354-8010).

All items in parentheses were supplied by the students from the telephone book.

These are some of the questions that were asked in connection with this conversation.

1. How does Bob look?
2. What's his problem?
3. Can he solve the problem by himself?
4. What does Ann suggest that he get for his mother?
5. Why does she suggest a box of candy?
6. Can Bob's mother eat candy?
7. Why can't she eat candy?
8. Tell us what a diet is.
9. Do you think Bob's mother likes candy?
10. Why do you say that?
11. Bob has plenty of time to get a present, doesn't he?
12. Why doesn't he have enough time?
13. Is Ann optimistic or pessimistic about the situation?
14. Why do you think that?
15. What does Ann suggest next?
16. Does Bob think that sending a telegram is a good idea?
17. Why do you say that?
18. What is Ann's final suggestion?
19. How does Bob feel about sending flowers?
20. Under what heading does Ann look in the phone book?
21. How long have Navelet's Florists been in business?
22. Where can they send flowers?
23. How do they send flowers to other cities?
24. Does Bob have plenty of money?
25. How do you know that he doesn't have very much money?
26. What does *cash* mean?
27. What can Bob use instead of cash?
28. What does Bob finally decide to do?
29. Do you think that Bob's mother will like flowers?

30. Why do you think that?
31. Does your mother like flowers?
32. Do Japanese people usually give birthday gifts?
33. Tell us about the kinds of gifts Japanese people give.
34. Can you send greetings by telegram in Japan?
35. Tell us about the greetings you can send in Japan.
36. Can you send flowers from Japan to other countries?
37. On what occasions do you give flowers in Japan?
38. Do you send the flowers or do you take them yourself?
39. Do you have credit cards in Japan?
40. What can you use them for?
41. Does anyone here have a credit card?
42. Can you use it to send flowers?

Certain questions in this list required the students to recall details. Items one, two and four are among the examples. Other questions required them to draw conclusions from the information contained in the conversation or from the general tenor of the conversation. Three, nine and thirteen are among the examples.

After most questions which could be answered *yes* or *no* I included a question such as *Why do you say that?* or *Why do you think that?* to make the student explain himself if he had not already done so. When students learned to answer with more than a simple *yes* or *no*. I dropped such questions.

Some items merely asked for definitions. Eight and twenty-six are examples. Others asked the students to describe or tell about things. Thirty-three and thirty-five are examples.

Perhaps the most important items were those at the end of the list which asked the students to describe their own experiences and things Japanese and, in effect, compare and contrast them with those described in the conversation.

I always wrote many more questions than I expected to use. This made it possible for me to be more flexible in the classroom. I could emphasize certain portions of the conversation

that turned out to be more interesting or more informative. I never hesitated to ask questions that developed spontaneously. These sometimes were the most valuable. Whenever a student had something interesting to say we dropped the questions about the conversation for a while and talked about the student's remarks.

We always provided time for various students to create their own conversations as mentioned above. These often followed the general lines of my conversation but sometimes they took a quite different turn. Of course, some students were more inventive and imaginative than others but all were able to carry out some kind of conversation of their own.

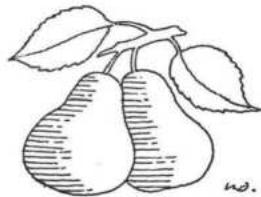
Fortunately, I was able to employ a photocopy machine in the preparation of my lessons. Thus, I was able to duplicate many of the items that we received to supplement the telephone books. We copied a bus schedule, a parking ticket, a bank deposit slip and some pages out of the Sears mail order catalog among other things. Each student had his own replica to actually use in class and to take home. In addition, he was able to examine the real item in the classroom. Conversations were built around situations incorporating these items to give contexts for their use.

The experimental course lasted for fifteen weeks and comprised two out of the students' six hours of classroom time each week. This brought the total hours to thirty. I spent an equal amount of time in preparation.

One unexpected benefit was brought about by an article concerning our class which appeared in the local newspaper we were studying. A young man who was planning to vacation in Japan and whose family had lived in the town since 1885 learned about us through this article. His visit to our class when he arrived in Tokyo was one of the highlights of the course.

Perhaps the most rewarding result was the fact that one young lady who was planning to take a trip to the United States following the completion of her studies decided to visit the community we had studied. She now knew so much

(Continued to p. 50)



日本のなかの身振り言語と翻訳

KOBAYASHI, YUKO
小林祐子

『沈黙のことば』(Silent Language) の著者エドワード・ホールは、その著書の中で、コナン・ドイルがシャーロック・ホームズを人気探偵にしたてることができたのは、この男に non-verbal communication をよみとらすすばらしい眼識を与えたからだといっている。その一例として “A Case of Identity” の一部を紹介し、ホームズが問題の女性の落ち着きない素振りから情事の臭いを嗅ぎあて、事件解決の糸口をつかむ一節を引用している。が、もしホームズをイギリスから連れ出し、全く違った文化のなかにおいたら、はたして彼の勘は疊りなく働くだろうか。さすがのホームズも「日本のように違った国」では手も足も出まいとホールは断言している。異文化には言葉の違いと同様、身ごなしの習慣の違いがあるからである。

われわれが外国文化に接する場合、はたしてこの『沈黙のことば』の違いを意識的にとらえているだろうか。「ことばが解らない時は身振り手振りで」と気安くいうように、われわれのなかには、同じ人間が同じ体の一部を使って表現することに大した意味の違いはあるまいときめかかってしまっているところがある。なるほど、ことばと意味との恣意的関係にくらべ、身振り言語とその意味との間には自然的つながりが多い。ことばでは疑音語にしか見られない有縁関係も、身ぶりでは、「額の青筋と激情」、「あくびと眠気」など生理的な必然からおきる身振りに数多く認められる。が、これとは別に、言語的に規定された思考が無意識に話をする時の身ぶりにあらわれたり、或いは文化的伝統や習慣の上に築かれた身振りというものがある。これらはその社会で恣意的にとりきめられた一種の約束ごとであるから、一体何を意味するかは、ことばの場合同様、勝手な憶測のできるものではない。ところが、われわれになじみ深い身振り描写に接したりすると、つい自國文化で与えられていると同じ意味に解釈し、疑ってもみない。

例えば “He listened to the whole story without batting an eye.” と読めば、「まばたき一つしないで」という日本語の翻訳につられて、「じっと熱心に話にききいる姿」を心に描いてしまう。が、実際には，“not to bat an

eye” は日本の「眉一つ動かさない」に対応する表現で、「無表情に冷然とききながす」姿を示すものである。ことばによるコミュニケーションの補助手段として身振り言語は大切な役割をもち、しかもその解説が容易ではないのに、この分野の比較研究はほとんどおこなわれていない。『誤訳』の著者グロータースはこの問題に言及し、「外国の身振りを意味別、国別に並べたような辞書がほしいものだ」と述べている。それと云うのもグロータース自身が日本の翻訳家と一緒に仕事をして、「言語以前の記号」の解説が言語記号以上に翻訳家を悩ませていることを知ったからである。その一例としてグロータースはジョイスの *Ulysses* のなかから “Stephen went down Bedford row, the handle of the ash clacking against his shoulderblade.” をとり出している。アイルランド人なら、ステッキの柄で肩甲骨を叩きながら歩く男の姿を、ただちに「考えこんだ姿」と解説するのだが、日本人には「外人の妙な仕草」としか映らない。そこで原文に忠実な訳のあとに「考えこんだ様子」という注をカッコのなかにいれざるを得なかったそうである。

さて、ここでグロータースは翻訳家に課せられた 2 つの重荷を指摘していると思う。即ち身振りを正しく解説することと、これを翻訳で適切に伝えることである。直接身ぶりも見ずに、描写された行為の意味を間違いなくよみとるだけでも容易でないのに、翻訳というもう 1 つの別のスクリーにのせて、鮮明な映像を再現することはきわめてむずかしい。この仕事のむずかしさを、ユージーン・ナイーダは、別の角度から『翻訳のすべて』(On Translation) のなかの小論「翻訳の原理」で展開している。グロータースが翻訳される言語社会にないエキゾティックな身振りについて述べているのに対し、ナイーダは同じ身振りでありながら意味の異なる場合の「落し陥」に注意を喚起している。例えば聖書ルカ伝 18 章にでてくる取税人が、「胸をうちて」神に罪の赦しを願う姿を中央アフリカのチョクエ語に訳そうとする場合、そのまま「胸をうちて」とすれば「罪を悔い改める」どころか、得意満面の自画自賛の姿になってしまう。そこでチョクエ語文化で「胸をうつ」に対応する悔い改めの身

振り「頭を棒で打つ」を適訳に選んだと語っている。身振り描写の翻訳の落し隠はこれだけではない。2つの異なる語い体系のなかから、意味領域、意味特徴の点でぴったり重なる単語を選び出すことのむずかしさがある。例えば「役者がすり足で舞台に出てくる」という表現を考えてみよう。上半身をビンとおこしてそろりそろりとおごそかに進み出る役者の歯切れのよい姿をそのまま英語で伝えるのにどんな語を選んだらよいだろうか。これをもし、和英辞典の訳語通り“drag one's feet”としたら、英米人の脳裡には、やる気なさそうに、足を重くひきずる姿しか浮かんで来ない。

以上のような身振り描写の翻訳における問題点を具体的に把握するため、アメリカ人、カナダ人（計2名）をインフォマントに使って「日本のなかの身振り言語」に対する外国人の反応を調査することにした。調査には松本清張の「波の塔」など主として現代探偵小説に描かれている一般的な身ぶり80が使われた。このなかには「参る」という意味で「あごを出す」といった比喩的表現や、指で丸を作って「金」、小指をたてて「女」を示すといった隠語的要素の強い身振り、等は含まれていない。なお身振り描写の英訳に際しては、大修館の『新スタンダード和英辞典』、研究社の『和英大辞典』等の訳語を参照し、辞書が意訳をしていない限り、直訳で通し、問題点の発見を容易にすることにつとめた。

結論を先にいうならば、解読が正しく行なわれたのは、日英類似の場面で同じ意味に用いられる同一の身振りに限られ、次の場合にはいづれも困難を生じている：（1）英語社会では類似の場面で起り得ない日本人特有の身振り、（2）日英の類似の場面で起り得る同一の身振りで、意味の異なるもの。なおこの項目のなかには、参考のために「誤訳」から生じた意味のとり違えも含めておく。

以下、解読に困難の生じた身振りの幾つかを分類別に示すこととする。

（1）日本人特有の身振り

a. 「ピンク・レディってどんなの」とリカ子は心配になって友人に訊いた。「よく知らないの」と和子は舌を出した。

“What's 'pink lady' like?” Rikako, becoming apprehensive, asked Kazuko.

“To tell the truth, I don't know myself.” Kazuko said and stuck out her tongue.

（解説）「妙な仕草」。英語で“to stick out one's tongue”は幼児がふざけて舌をベロリと出す時の描

写

b. 「だってこの旅行ではあんまり自由がなかったんですもの」リカ子は頬をふくらませた。

“Because I had so little freedom throughout the trip.” Rikako puffed her cheeks.

（解説）「妙な仕草」“to puff one's cheeks”は子供がわざとふざけて文字通り頬をふくらます時の描写。

c. 頬子は立ちどまり、彼に背をむけてうずくまつた。暗闇のなかで彼女の肩がふるえるのがわかった。

Yoriko stopped and squatted down with her back to him. Even in the darkness he noticed her shoulders shaking.

（解説）「椅子文化」と「畳文化」の違いからか、彼等の生活に「しゃがみこみ」の動作は稀、さめざめと泣きたくてうずくまることなど考えられない。“...stopped and turned her back to him.” がより自然の身振りらしい。

d. 「あんたたち、つまらないことをうっかり口に出すんじゃないよ」とおかみが注意した。3人とも首をちぢめた。

“Watch your tongue, girls. Don't let slip anything indiscreet.” The madame warned the girls. They all pulled their necks into their shoulders.

（解説）「妙な仕草」。これを“duck one's head”（新スタンダード）にすると障害物をよけるために頭をひっこめることになる。舌を出すにしろ、首をちぢめるにしろ、照れかくしの身振りは米英にない。

e. 「貧乏ゆすりするのはやめて下さい。こっちまでいらっしゃるから」と女が云う。

“Stop shaking yourself so nervously. It gets on my nerves,” said the woman.

（解説）神経がいらだったり、所在ないとき足をゆするには日本人特有の動作。英語で体のふるえは、寒さ、緊張、恐怖、ショックの条件反射に限定されているらしい。これを，“Can't you let your knees stay still?” とする方が、この場の本来の意味に近くなる。

f. 男は頬を掌で叩いた。「それが撮れりゃ 100% なんですがね、何しろ暗くてそれだけは失敗でした。」

He slapped himself on the forehead with the palm of his hand and said, "I wish I could have taken some pictures of the scene, but it was simply too dark."

(解説) これまでのすべてが「妙な仕草」としか解釈されなかったのに対し、軽く「参った」を示すこの照れかくしの身振りは“forgetfulness”と解釈された。

g. 「私にまかしておいてくれ。」女はポンと胸を叩いた。

"Leave the matter to me," the woman said and slapped her chest with her hand.

(解説) 英語社会で女性はこのような仕草をしないが、男性の場合の類推から，“pride”, “emphasis”と解釈されている。

(2) 意味違いの同一身振り

a. 「どの位いたのか」

「30分位でした。」

「おもしろい話がでたのか。」父は目を細めていった。

"How long did he stay?"

"About half an hour."

"Did you two have a good time?" asked the father, *narrowing his eyes*.

(解説) “narrow one's eyes”は、「疑惑」の表情として解される。ここでは娘が嘘をついていないかと見通そうとした目付きとなってしまう。

b. 「俺にこのケチな仕事をさせる気か。」と彼は目をむいた。

"You mean to say I should do this dirty job?" he asked *with his eyes bulging*.

(解説) 「怒り」、「むくれ」とは解されず，“surprise,” “shock”と解された。これは英語では「大きく見開いた目」は常に「驚き」を意味するからである。

c. 彼は目を皿のようにして活字を追った。

He followed the printed page *with eyes like saucers*.

(解説) 英訳からは“amazement”, “great wonder”が汲みとられ、一語も見落すまいと大きな目をあけている表情とはとられなかった。これは eyes like saucers という表現が特に子供の純真な驚き（例：

The children looked at the Christmas tree with eyes like saucers.)を示すのに使われること、又指摘した通り、「大きな目」が驚きにつながることになる。

d. 二郎が最後の頼みにやって来たとき、その目は血走っていた。

When Jiro came to make his last appeal, *his eyes were bloodshot*.

(解説) 「必死のあまり逆上、興奮した状態」と日本人がとるところを“drunkenness”かと疑問符が付してあった。“bloodshot”という語が原則として「目の使いすぎ」、「睡眠不足」、「過度の飲酒」など肉体的要因で目が充血した時に使われること、逆上の場合にはもっと動的身振りが普通であることなどの理由による。

e. 「こんにちは。」田辺は頭をかき、頬子にお辞儀した。

"Hello!" Tanabe said and bowed to Yoriko as he *scratched his head*.

(解説) 頭がかゆい時のいわゆる「自然的記号」以外に、日本ではきまり悪い時のれかくしに頭をかく。これに対し英語社会では、何かを思い出そうと髪をかきむしる“rack one's brains”的場合、考えごとの身振り。従ってこの文脈では、“indecision”と解された。

f. 「どんなことがあっても別れません。」小野木は息をすいこんでいった。

"We'll never part," said Onogi, *drawing in his breath deeply*.

(解説) この文脈で、日本人に暗示される意味は、決意、思いつめ、などであろう。これに対し“sudden surprise,” “shock”の身振りと解された。“suck in one's breath”, “draw one's breath deeply”など、息をすいこむ表現は、驚き、ショック、恐怖に関連するものととらえられる。

g. 「颶風だろうが何だろうが、ともかくおれたちは帰らなきゃならないんだ。旅館にその世話をする責任がある。」若い会社員の男が口をとがらせた。

"We all have to go back, typhoon or no typhoon. The hotel has obligation to see to it that we

safely return home." A young-looking man, apparently a company clerk, *said with a pout*.

(解説) 「不平」, 「非難」と解さるべきところ, "disappointment", 又は "wilfulness" の意味にとられた。註として "pout" is applied to children who are spoiled and selfish. A childpouts when she can't have something or do something." とあり, この文脈では, "with a frown on his face" の方が自然という意見であった。

h. 皆の視線を感じ, たか子は彼のうしろで小さくなつた.

Sensing the staring eyes, Takako *cowered* behind him.

(解説) 気がひけて身のおきどころない気持ちの表現とは解されず, "tension", "anxiety" の意味にとられた。

i. 和子はお辞儀して, ちぢこまつた.

Kazuko bowed and *curled herself up*.

(解説) 恐縮やかしこまる姿にはとられず "fear", "pain", "chill" と解された。精神構造上「恐縮」の感情が日英間で異なることがそのまま身振りに反映されたものといえよう。"cower" は, その名, その音を耳にするだけで恐ろしさのあまり体がすぐむ場合, "curl oneself up" は, "roll oneself into a ball"などの表現と共に, 寒さ, 腹痛, 恐怖のため体を丸める場合に使われる。(自動詞として She *curled up* on the sofa with a book. のように使われた時は, 安楽に体を横にした姿を意味し, 恐怖とは関係ない。) 従って, この日本の身振りは, 具体的に "She bent her head to hide her embarrassment (shame)." といいきったり, "She stood (sat), her eyes downcast." として, おずおずしたさまをおわす方が, 原意が伝わるようである。

j. あのことを思い出すたびに冷汗が出る。

Whenever I recall that incident, *a cold sweat breaks out*.

(解説) 日本人ならこの文脈の「あのこと」を, 危機一髪で逃れた恐ろしい出来ごと, 穴があつたら入りたくなるような出来ごと, の2通りに解釈するだろう。英米人は前者の意味にのみ解釈する。日本人の恥をかいた時, 恐縮した時(h, i参照)の表現が, 英米人の場合の「恐怖」の時と一致することは, 日

本の「恥の文化」の一面を示していくおもしろい。なお, 英米で, 穴にでも入りたくなる思いをした時は, 冷汗とは反対に, "I was feverish with embarrassment." と体があつくなる。

k. 弟はいつの間にヘロインにおかされた体になつたのかと, 健次は唇をかんだ。

Kenji *bit his lip*, thinking how his kid brother had fallen as the victim of heroin.

(解説) 日本人にこの身振りは, 広く後悔, 残念, 口惜しさの念を伝える。米英人の場合, 云うべきでないことを云ってしまった後悔に主として限られる。又, 云うまいと言葉をかみ殺す場合の表情もある。

l. 3人が案内されて来たときも, 彼女は眉一つ動かさなかつた。

She did not even so much raise her eyebrows when she saw the three men ushered in.

(解説) もとの調査票には "raise" のかわりに "move" が使ってあったが, 解答者によって "raise" に訂正され, "did not show surprise" を意味するものと解された。英語では, 眉は真中に寄せるか (knit (draw) one's eyebrows=hard thinking), 上にあげる (=surprise, questioning) かの2つの動きに限られているため "move" のような方向性のはっきりしない動詞と共に用いられない。なお, これは先に指摘した通り, 原意の "remain unperturbed" を伝えるには "did not bat an eye" と翻訳されるべきであった。

m. 競争相手に契約をもっていかれたときいて, 彼は歯ぎしりした。

When he heard that the rival firm got that contract he *gritted his teeth*.

(解説) 「無念, 口惜しさ」とは解されず, "determination to bear, fortitude" の意味にとられた。和英辞典には grit one's teeth と grind one's teeth とが日本語の「歯ぎしりする」の訳として, 文換的に使えるかの如く示されている。しかし夜睡眼中に歯音をたてる方が grind one's teeth であり, "The noise of my husband's gritting his teeth kept me awake all night." とはならない。これに対し, grit one's teeth は日本語の「歯を喰いしば

(p. 38 へつづく)

THE PROBLEM OF TWO-WORD VERBS

Ernest Richter

One of the commonest sources of difficulty for Japanese students of English is that class of words known as the two-word verbs; words like *turn out*, *fill in*, *wait for*, *get over*, *break in*, *hold up*, *hang up*, *think up*, *take apart*, *look after*, *wait on*, and many others. Most good teachers have dealt with this problem at one time or another and there are some texts which give a small amount of work on the problem.¹ Almost all of the new transformational grammars discuss the problem. Jacobs and Rosenbaum, Lester, and Thomas all have sections dealing with two-word verbs. Generally such verbs are classified in two types; those consisting of verbs plus prepositions and those consisting of verbs plus particles.²

An example of the first type would be *shoot at*. This is a so-called inseparable two-word verb. In such verbs the preposition cannot be shifted to the nominal optionally. Thus the sentences *The marksman shot at the target.* is correct, but *The marksman shot the target at.* is incorrect.

Separable two-word verbs, those formed with verbs and particles, can shift the position of the second element. Thus *He turned off the T. V.* and *He turned the T. V. off.* are both correct sentences.

These two kinds of verbs have several other characteristics which are usually noticed. First of all there is an exception in the behavior of separable two-word verbs in the case of pronouns. That is, it is obligatory for the particle to follow the verb if the direct object is a pronoun. Thus, although both *Turn off the T. V.* and *Turn the T. V. off.* are correct, *Turn it off.* is the only correct form with the pronoun. *Turn off it.* is in-

correct.

Secondly, separable and inseparable two-word verbs function differently when they are used in questions. The particle may not be shifted to the front in the case of separable verbs. Thus, *Off who did the telephone operator cut?* is incorrect. In the case of the inseparable verbs the preposition may be shifted to the first position in questions, giving such correct sentences as *At what did the marksman shoot?*

Both types of verb may undergo passive transformation giving such sentences as *The T. V. was turned off by Harry.* and *The target was shot at by the marksman.*³

At this point it may be useful to present a group of sentence sets which will illustrate the various characteristics we have been discussing. Incorrect sentences are marked with an asterisk.

1. There is one useful conversation text available in Japan which deals with many multiple word verbs. The book, Stephen Williams' *Modern Idiomatic English*, does not, however, attempt to analyze or classify them.
2. For a discussion of the deep structure representation of particles see R. Jacobs and P. Rosenbaum, *English Transformational Grammar*, Waltham, Mass., 1968, pp.102-6.
3. While both classes of verbs may be transformed into the passive, not all of these verbs may be freely transformed with equally natural sounding results. An example is *stand by*, meaning to support. The active *They will stand by him.* can be transformed into *He was stood by.* and *He was stood by them.* but some speakers would find these sentences marginal if at all acceptable.

SEPARABLE TWO-WORD VERBS (particles)

Active

He turned off the T. V.

He turned the T. V. off.

With pronoun object

*He turned off it.

He turned it off.

Passive

The T. V. was turned off.

Question

What did he turn off?

*Off what did he turn?

For the Japanese student of English, this rather complicated system is a major source of error and the standard classification of two-word verbs given above does aid in clarifying usage. But, unfortunately, the separable—inseparable distinction, which is a matter of grammatical classes, is only one source of difficulty. Two other sources are the contrastive features of Japanese-English verb usage and the presence of different semantic classes of English two-word verbs.

Kleinjans (1957-8) has contrasted Japanese and English and pointed out that Japanese direct object expressions cover a larger area than English and include several two-word verbs. Thus, whereas English uses *wait for*, Japanese uses the verb *matsu* plus *o* with direct object. The result is that Japanese students frequently produce such errors as *I am waiting my friend*, *I'm helping the work*, and *I'm laughing the clown*. instead of the correct sentences, *I'm waiting for my friend*, *I'm helping with the work*, and *I'm laughing at the clown*. It is clear from the frequency of such errors that students should be made aware of this Japanese-English contrast and given practice in the use of two-word verbs as English counterparts for several of the Japanese verbs which use *o* where prepositions or particles are used in English.

Mito (1961) has noted another problem caused by the Japanese language method of using two verbs to encompass the area covered in English by one verb plus a preposition or particle. Thus such English expressions as *write down*, *find out*,

INSEPARABLE TWO-WORD VERBS (prepositions)

The marksman shot at the target.

*The marksman shot the target at.

The marksman shot at it.

*The marksman shot it at.

The target was shot at.

What did he shoot at?

At what did he shoot?

gulp down, *think of*, and *stick to* are covered in Japanese by the two-word verbs *kaki-tsukeru*, *mitsukeru*, *nomi-komu*, *omoi-tsuku* and *nebari-tsuku*. This explains such errors as *I'll think a name for it*. instead of the correct *I'll think of a name for it*. or *It sticks the paper*. instead of *It sticks to the paper*.

Another type of student error arises from what might be called two-word homonyms in which similarly spelled English verb forms belong to different classifications. For example, let us go back to *turn off*. When we are concerned with things like radios, T.V. sets and engines we use *turn off* as a separable verb. But there are two other verbs identical in spelling and pronunciation. One of these is separable and the other is inseparable. There is the currently popular expression *turn on* meaning to excite, inspire love, or greatly interest, and there is the *turn on* meaning to attack (especially to attack a former friend). In the first instance we have a homonym which belongs to the same separable class as the *turn on* used with radios, but in the second instance we have an inseparable verb. Thus we find that when we are speaking of attacks, *He turned on his friend*. is correct and *He turned his friend on*. is incorrect while both forms are acceptable if we are using the word to mean exciting interest.

As if all of the above were not enough of a problem for the language learner, he must also face the complications involved with two word antonyms and words which look like antonyms.

There is a large number of such verbs and they are a problem, particularly among the more logically oriented students who reason that if the prepositions or particles are opposite in meaning, then the two-word verbs employing them must also be opposite in meaning. Although this is the case with words like *turn up* (the radio) and *turn down* (the radio) and *run up* (the flag) and *run down* (the flag) it is not the case with a large number of other two-word verbs. We cannot, for example, give *dress down* as the opposite of *dress up* or *think in* as the opposite of *think out*.

I would suggest therefore, that in addition to the usual separable-inseparable classification, two-word verbs should be considered in terms of three subclassifications as follows: Subclass 1. Pairs of two-word verbs which seem to be opposites but have different but not opposite meanings. Examples of this would be *turn out* (Everything turned out badly.) and *turn in* (Turn in your papers), *call off* (Call off the game.) and *call on* (He called on his friend.) and *take out* (He took out insurance.) and *take in* (She took in boarders.). Subclass 2. Pairs which seem to be opposites, but have the same or similar meanings. Examples of this would be *fill in* (Fill in the blanks.) and *fill out* (Fill out the forms.), *close up* (They closed up the cabaret.) and *closed down* (They closed down the cabaret.)⁴ and *burn up* (The paper is burning up.) and *burn down* (The building is burning down.). Subclass 3. Pairs which seem to be opposites and actually are opposites or near opposites. Examples of this would be *punch in* (He punched in at the timeclock.) and *punch out* (He punched out at the timeclock.), *turn up* (Turn up the radio.) and *turn down* (Turn down the radio.) and *run up* (Run up the flag.) and *run down* (Run down the flag.).

The problem of two-word verbs, like the problems of *some* and *any* and the articles is not readily amenable to classroom treatment through rules beyond those stated at the beginning of this paper. The verbs must, at least in part, be learned through memorization of meanings and through practice. In my own classes I have found the 3 part classification subclassification given above useful in a

number of exercises designed to 1) familiarize students with usage, 2) give practice, and 3) test control of the items.

In one exercise students are asked to randomly select pairs of sentences from groups of paired sentences. One student says the items and the other replies "opposite," "same" or "different but not opposite" depending on the two-word verbs involved. This is usually done very rapidly and merely serves to point out the various categories and to test student knowledge.

Next students may be asked to use items in sentences (Their own if possible.) and other students give replies and gestures indicating their understanding of usage. Example using subclass 1:

A—Everything turned out well. I passed the exam.

B—That's good.

or

A—Please turn in your paper.

B—Here you are.

subclass 2:

A—Please fill out these papers.

B—All right. (B imitates writing)

A—Now fill in these.

B—All right. (B imitates writing)

subclass 3:

A—Let's turn up the radio.

B—No, it's too loud. Let's turn it down.

The items used in this type of drill may be given verbally by the teacher, printed on paper, or put on the blackboard. One effective method (suggested by Dr. Ruth Crymes of the University of Hawaii) is to put the key sentences on flip cards with the two-word verbs and answers on the back.

The exercises given above require fairly fast classes. For average and slower classes it may be better to try a different approach. One way is to provide sentences for which the student must select the right items and paraphrase sentences

4. The verbs to *close down* and *close up* here mean to legally force the cabaret to stop operating. *Close up* meaning to stop working and shut up a shop for the night is a different word. A shop keeper says he is *closing up* for the night but *this* has no connection with legal action.

which are given to him.

A—My cold is better. B—You got over your cold.

A—I bought an insurance policy. B—You took out an insurance policy.

A—The party was a success. B—The party turned out very well.

The exercises given here are only a few of the possible ways of providing practice and testing student control, and it must be remembered that such exercises are primarily practice and testing techniques rather than teaching techniques. The bulk of the learning, as noted above, falls upon the student's memory.

Whenever a student comes across a two word verb it will be necessary for him to find out whether or not the verb is separable or inseparable. Using the subclassification we have suggested here, he should then check for homonyms and antonyms. By doing so he will find it much easier to separate

in his mind those complex and often colorful items we call two-word verbs.

REFERENCES

1. Jacobs, R. and Rosenbaum, P., *English Transformational Grammar*, Waltham, Mass., Blaisdell Publishing Co., 1968.
2. Kleinjans, Everett, "A Comparison of Japanese and English Object Structures," *Language Learning*, Vol. 8, Nos. 1-2. 1957-8.
3. Lester, Mark, *Introductory Transformational Grammar of English*, New York, Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1971.
4. Mito, Yuichi, "Some Contrastive Features of English and Japanese," *Language Learning*, Vol. 11, Nos. 1-2, 1961.
5. Thomas, Owen, *Transformational Grammar and the Teacher of English*, New York, Rinehart Holt, Rinehart, and Winston, Inc., 1965.
6. Williams, Stephen, *Modern Idiomatic English*, Tokyo, Nan' Un Do, 1967.

(Continued from p. 42)

about it that she wanted to see first hand the places that she had visited in her imagination.

Teachers who wish to try an experiment similar to mine will need time and patience. Unless they know of someone in an English speaking country who can act for them, they will have to obtain the necessary telephone books and supplementary materials through correspondence.

One good source of telephone company addresses is Poor's Register.* This publication contains a lengthy list in the 1971 edition under heading 4811 on page 131. This volume is usually available at American Cultural Centers and commercial libraries connected with United States Trade Centers.

If a phone company cannot supply books, a local high school or a service club, such as the Lions or the Rotary, might be persuaded to gather used books for such a project. A letter to a newspaper might bring cooperation from local residents. The teacher should be prepared to pay the postage charges, if necessary. My books cost \$1.70 for each wrapped pair at printed matter

rates. They could not be sent at book rates, because they contained advertising.

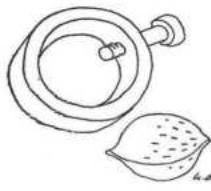
I recommend that junior and senior high school teachers use the telephone book idea for their English Speaking Society or English Club activities, if they cannot spare time in their regular lessons. Students can join in the preparation by conducting much of the correspondence needed to obtain the supplementary materials. Pen pal exchanges could provide many articles, perhaps even snapshots, recorded tapes and home movies.

Teachers who wish to use prepared conversations as I did and who do not feel skillful enough to write their own, could adapt and supplement conversations from textbooks.

Despite the time and effort needed for as ambitious a program as this, the rewards in student interest and understanding make such a project worthwhile. I know I found it so. Perhaps you would too.

(Instructor, ELEC Institute)

* *Poor's Register of Corporations, Directors and Executives*. Standard & Poor's: New York, 1971.



世界における外国語教育

HOSHIYAMA, SABURO
星山三郎

1. はじめに

1971年7月29日、快晴のロサンゼルスを立って、メキシコ・シティの空港に着いたのは夕方の6時すぎであった。雨雲の切れ目から、日が洩れてはいたが、空港は一面に雨に濡れ、ところどころに、水溜りができていた。外に出る。この都市の目貫の場所、パリーのシャンゼリゼを模したというレフォルマ通り (Paseo de la Reforma) もまた雨に濡れていた。夜にはすっかり晴れあがり、あくる日の午前中の日ざしは、すがすがしかった。午後になって、メキシコ大学の誇る大図書館のモザイク壁画のそば近くまで行き、あかず眺めたのは午後2時頃であった。その頃から空模様が少しあやしくなって来て、車に引きかえし、大学の周辺を見て、チャプルテペック公園 (Bosque de Chapultepec) にさしかかると、ポツリ、ポツリと大きな雨粒がおちて来た、と見るや否やザーッという強い雨。これがスコールとでもいうものか。車の中からスペイン風の高級住宅地とか、闇牛場など市街のあちこちを見、ホテル・リフォルマに戻ったのは5時少し過ぎであった。もうその時は、雨はすっかり、止んでいた。あくる日も午前快晴、午後3時ごろに、雨がサッと降り出し、5時には止んだ。同じような天候が続いたので不思議に思って、二世のガイドに尋ねると、「今は雨季ですから」との答えであった。「このメキシコでは毎年5月から9月まで雨季で、午前は晴、午後3時頃から5時頃まで雨がほとんど規則的に降るのであります」という。

4年前、ヨーロッパをめぐり、アメリカへ渡り、サンフランシスコを訪れたのは肌寒い12月の初めであったが、このまことに滞在中は、毎日雨に見舞われ、冷たい、暗い陰気な日の連続であった。ある日、ホテルの床屋さんに調髪してもらいながら「毎日出て歩くのに、雨で弱りますよ」というと、G. I. カットの床屋さんは、「今は雨季ですからね」(We are now in *the rainy season!*) という。サンフランシスコでは11月から12月にかけてが雨季なのか。

戦前のこと、私は満州の奉天（今の瀋陽）に5年間ばかり、中学の英語の教師をしていた。昭和10年の春だつ

たと思うが、就任後まだ日も浅いころ、その教員会議で「遠足」実施の話が出た、居並ぶ先生方は皆、予定の当日実行できるものとして話をすすめている。私はついに「もし雨天の場合はどういたしますか」と発言したら、皆、私の顔を見た。「絶対に雨は降りませんからご心配なく」という。なるほど、その通りだった。私の頭の中には日本の内地での体験だけが生きていて、それで物を考え、物を言っていたのである。中国の東北部、満州では9月から翌年の5月までは快晴の日が続き、紺碧の空が見られる。日常の生活に雨傘はいらない。ただ7月と8月には時折、小指の太さぐらいもある大粒の雨がドッと降って来る。それが満州での「雨季」なのである。

日本で雨季と言えば6月から7月の初めまで、いんうつである。そのころになると私は “The rainy season has set in.” という英語を学生に言わせたりしているが、いつも心の中では「梅雨」という日本語を the rainy season や the wet season という語に置きかえることに、何か少しばかり心の抵抗を感じている。the rainy season によって表わされることばの意味内容は、國のちがいによって、その受け取りかたに、そのイメージがちがうことであろう。「雨季」ということば1つ取りあげてもそうである。これから取りあげようとしている「英語教育」とか「外国語教育」というようなものについても同じ事が言えそうである。あることばを日本流の考え方で理解し、判断し、議論をすすめていると、外国人と接した場合に、とんちんかんなことが起り、国際理解に大きな誤りを犯さないとも限らない。

2. ENGLISH, MODERN LANGUAGE と ADOPTED LANGUAGE のこと

“English Teaching” というと、私たちは「英語を教えること」と考える。日本人や英語国民以外の人が考えるときはそれでよいが、もしこれが英米人や豪州人が言う場合は「国語教育」のことではないか。だから英米人のための “English Teaching” をわれわれの理解する「英語教育」と考え、そのまま、わが日本の英語教育の参考にし、あてはめようとすることがまちがいであるこ

とに、私が気がついたのは、学校を出てからしばらく後であった。このごろの外人向けの英語教育の出版物の書名に“Teaching English as a Foreign Language”という風に as a Foreign Language と言うことばが添えてあるものが多くなったのは、誤りが起らなくてよい。

日本では、「外国語」は a foreign language で、一向に疑問は起きないが、セイロンのような小さい国(わが四国と九州を合わせたぐらいの広さ)でもシンハル語(Sinhalese)を母語として話す国民とタミール語(Tamil)を話す国民がいる。いづれもこの国の「国語」である。シンハル語を話すセイロン人にとってタミール語は、母語ではないが、「外国のことば——外国語」ではない。自國のことばである。同様のことは4ヶ国語が公用語として認められているスイスでも、2ヶ国語が公用語であるベルギーについても言い得る。このため、いろいろの言語を話す国民が集まって一つの国家を形成している場合は、わが日本人が「外国語」ということばを用いるような場合 ‘foreign language’ というよりは、「古典語」に対応する語の ‘modern language’ という表現の方を好んで用いるようである。それ故 “the teaching of modern languages” ということばが出て来たら、それは、わが国でいう「外国語教授」と考えてよいわけである。1953年、パリーのユネスコ本部が、戦後、始めて「外国語教育」に関する、国際セミナーを開いた時、そのセミナーの正式の名前に「近代語教育」という名前を用いたのもその間の消息を物語っている。すなわち

“International Seminar on the Contribution of the Teaching of Modern Languages towards Education for Living in a World Community” sponsored by UNESCO (Ceylon, 1953)

次にインドやセイロンにおける養子語(adopted language)にふれておこう。かつてイギリスの植民地であった地域の人たちにとって英語はどういうことになるであろうか。インドには15を数える言語(この場合、「国語」ということばはしっくりしない)がある。そのひとつひとつがその地域の人にとって母語である。しかしその一つはインドの国、どこへ行っても通用するものではない。ヒンディ語を公用語と定めても、それは15の言語のうちの一つに過ぎないから、ヒンディ語を母語としない人たちにとっては外国語同然であるから、それを使用することを喜ばない。したがって、英語こそ、この国の共通語(Inter-province language)であり、教育用語(instructional language)でもある。インドやセイロン人にとって、英語は子供の時から聞き覚え、学校へ行った者は、これを習っている。そうすると全くの外国

語(foreign language)でもない。そうかと言って母語(mother tongue)でもない。それゆえ、セイロンのコロンボ大学の H. S. Perela 氏は「英語は自分たちにとっては養子(縁組)語である」と言って次のように説明している。

“An adopted language is not the mother tongue nor is it foreign tongue, just as an adopted child though not a blood relation is still not a stranger.”

[Unesco Seminar (1953) の Working papers より] この英語という養子語がインドの独立(1948年)とともに、15年間の準備猶予期間をおいて、公用語の座から降りてもらうことに憲法で定めた。そして英語はその縁組先からまま子扱いを受けているが、全然追い出されもないし、英語の方からこの家を出て行く様子もない。むしろ実利を考える庶民は英語を知っていれば収入も地位も安定するし、何よりもセイロン大学の Prof. Ludowyke が言っているように「英語がわかるということは特別階級のしるし」(the mark of special caste) であるので、英語に力を注ぐ青年が多いのは1971年の今日でも変わりはない。

3. 外人の質問

今年の9月、東京の赤坂プリンス・ホテルで日本ユネスコ国内委員会の主催で、“Regional Meeting of Experts on Teaching English in Asia” が開かれ、アジア各国、14ヶ国の代表が送られて來たが、シンガポールから SEAMEO (=South East Asian Ministers of Education Organization) の Regional English Language Centre の所長 Mrs. Tai Yu-lin (台玉玲) がオブザーバーとして参加した。頭のきれる弁説の立つ英語教育のベテランである。この人が会議の合間、tea break の時に、たまたま話をかわした慶應大学の小池生夫氏が、私に「Mrs. Tai の質問に驚きましたよ」という。「日本の大学では何語を用いて教育しているのかというのです。」

これに似た、又はこれと全く同じ経験は私自身にもある。だれでも質問は、自分の立つ立場から、自分のおかれた環境から生まれ、質問することになるのであろう。現在、日本の教育上の大きな問題は、いわずと知れた入学試験と浪人対策である。だから日本人はこの問題を真先にとりあげて、外国人に会うと、この問題について彼等の意見を聞いたがる。先方では日本の先生のように、この問題で苦労した経験はないから、そう深刻にいっしょになって考えてはくれない。事実、考えたこともないから、助言を与えようにも与えようもない。せいぜい、試験問題の作成の方法にとどまる。

オーストラリアへ行けば、彼地の教員の最大関心事は、毎年10幾万というヨーロッパからやって来る。英語を全然知らない移民たちに対して、どうしたら有効な英語教育ができるかという問題である。

パキスタンでは——内乱の起こっている現状は知るよしもないが——早く英語を公用語の座から引き降ろし、母国語で大学教育までやりたい、そのためには、母国語ではない、高度の学問の専門用語をつくるにはどうしたらよいかというのが、彼地の大学教授の話であった。

これらは僅かの例にすぎないが、私たちが突作に尋ねられても答えられないものが多い。国際会議など将来ますます盛んにならうが、相手国の事情、その問題の所在を知っておくことが大切である。

話は前のシンガポールの Mrs. Tai に戻るが、私はかつてセイロンのセミナーで、インド人およびパキスタン人から同様の質問を受けたことがある。かれこれ18年前の話である。Mr. Chanda は当時、彼地の視学官をしていた人であるが「日本では何語で教育しているか」というから「小学校から大学まで日本語でやっている」と答えると、突然大きな手で私の肩をポンとたたき、“That's GOOD !” とこちらの方がどぎもを抜かれるような大声を発した。これらは、高等教育は英語でやらざるを得ない國の人の心からなる叫び声であろう。

その他「日本語では何ヶ国語話されているか」とか聞かれることがしばしばあったが、それは自分の國の言語問題を踏まえての質問である。それ以来、私は日本の英語教育について、実態を知らせて欲しいといわれる場合には、まえおきとしてこの件にふれることにしている。次にあげるのは1969年の秋、パキスタンのカラチ大学の英語科の主任教授 Dr. Ashraf からの依頼に応じて書いたものの書き出しの一部分である。(これと同趣旨のことは、シドニー大学でのユネスコセミナーの折も Working paper に書いた。)

THE TEACHING OF ENGLISH IN JAPAN

Introductory Remarks

“How many languages are spoken in Japan?”

“What is the medium of instruction in Japan?”

“What languages are taught in Japan?”

These were the questions often asked by some of the participants in the UNESCO International Seminar on the Teaching of Modern Languages held at Nuwara Eliya, Ceylon in 1953. The writer thinks, still now, it would be helpful, first of all, to give answers to these questions in order to have a thorough understanding of the present situation of modern lan-

guage teaching in Japan.

In this country, Japanese is the only language spoken by some 100,000,000 people* throughout the country and no bilingual district is found. Accordingly Japanese, the mother tongue, is used as the medium of instruction from the elementary school level up to the university level. But the teaching of foreign languages occupies a very important place in our education. About a dozen foreign languages are taught in Japan. Of these, English, German and French are most widely taught in secondary schools and colleges in the order mentioned. In recent years, beside these three languages, there is an observable tendency of increasing the enrollment of learners of Russian, Spanish or Chinese not only in school, but also at home through the nation-wide radio and television programs. The English language, however, is taught most extensively; 99 per cent of secondary schools offer English.

Let me tell you here that the English language, as is just mentioned, occupies a very important place, but it should be remembered that it is not as in some countries, an “adopted” language, nor the medium of instruction. English is to the Japanese just what French or Chinese is to the Pakistani or Australians.

.....

Pupils start learning English at the age of 12 in the lower secondary schools. According to the Educational Regulation, foreign languages are given as optional subjects, but practically more than 80% of 5 million lower secondary boys and girls are now presumed to learn English, judging from the number of English textbooks demanded.

In the case of secondary schools English has been given as compulsory subject since 1961, so all of the students (some 5 million boys and girls) are learning English, 5 hours a week for 3 years.

この序言の中には、学校数、生徒数、英語教員数の統計もあげたが、ここではそれは省略した。ただし、日本の人口約1億とした所には次のような脚注をつけた。

*Almost all of them are literate. According to the recent statistics the percentage of illiteracy is below one per cent of the whole population. (次号につづく)

(東洋女子短大教授)

アジア地域英語教育専門家会議

(Regional Meeting of Experts on Teaching of English in Asia)

TAKAHASHI, GENJI
高橋源次

国際社会においていよいよその重要性を認められている英語教育の実際に携わり、その研究と指導に直接当っているアジア地域の教育家が一堂に会して情報交換し、問題を討議するというこの種の国際会議は、日本では勿論アジア全域で初めての企てであった。全般にわたる会議録がその内出版されることになつてるので、詳細はそれに譲るとして、以下要点を略述して参考に供することにしたい。

I. 準備委員会

まず会議の沿革をししておくことが必要かと思うが、この会議のそもそもの発想は English Teaching Colloquy に在ったのである。ETC は英語教育の全国団体で組織している英語教育の懇談会である。大学英語教育学会、LLA、語研、全英連、ELEC の五団体がわが国英語教育の推進と改善のために1967年5月に発足したので、その翌年、すなわち3年前の1968年5月23日の会合の折に、この会議開催の必要が論じられたのがそもそも始まりであった。わが国英語教育の成長は国際会議開催の段階に達している。国際的協力と貢献の文脈でわが国の英語教育を考えてみようではないか。こうした発想が異口同音にもち上り、British Council 等も協力しようということになり、ユネスコ国内委員会に相談することになった。伊藤良二事務総長の全幅的な賛意が得られ、ご努力によってユネスコ本部ならびに国内委員会と国立教育研究所が協力で、わが国として、またアジアでは全く最初の英語教育に関する国際会議の開催が本決まりとなったのである。会議日程その他の発表、案内、招待等一切の事務を国内委員会で引受けってくれ、やがて準備委員会の発足を見るようになったのである。次ぎはその名簿である。

(五十音順)

委員長 朱牟田 夏雄 中央大学教授

一色 マサ子 津田塾大学教授

上野 景福 語学教育研究所長

小川 芳男 大学英語教育学会長

奥田 真丈 文部省初等中等教育局中学校
教育課長

国枝 高治 千葉県教育センター主査

黒田 巍 語学ラボラトリーアソシエイト副会長

小泉 善平 国立教育研究所指導普及部ア

ジア教育研修室長

宍戸 良平 文部省初等中等教育局視学官
鈴木 忠夫 神奈川県立外語短期大学教授
瀬戸 規矩雄 全国英語教育研究団体連合会
会長

芹沢 栄 東京教育大学文学部付属外国
語教育研究施設長
高橋 源次 英語教育協議会専務理事
坪井 忠二 語学教育振興会理事
土屋 尚夫 都立北野高等学校教頭
寺脇 信夫 日本放送協会教育局学校放送
担当部長

戸村 実 文部省初等中等教育局主任教
科書調査官
長谷部 作蔵 東京都教育委員会指導部指導
主事

参加者以外に、英米から一人ずつ英語教育の学者、特にアジア地域の英語教育に通曉している方をお招きしようとすることになり、私がその交渉に当ることになった。4人ずつの候補者を挙げて British Council と CCEJ とに斡旋を依頼した。両機関のお骨折でこの会議にはうってつけの先生方の快諾を得たのである。

II. 会議の目的と参加者及び日程

目的 アジア各国のナショナル・リポートを中心に英語教育の現状に即しつつ情報を交換し、実状を認識し合い、協力を推進する。そのためには、英語教育の内容と教材、方法と技術、教員養成と現職教育の三問題を討議する。

日程 1971年9月16日から22日まで

会場 東京赤坂プリンス・ホテル

主催 日本ユネスコ国内委員会

参加者

1. 専門家 (15か国 22名)

アフガニスタン	カブール高校教諭	Mr. Wali
中 国	台湾国立師範大英語研究所長	Prof. Yang
同	文部省視学官	Mr. Hsin
イ ン ド ド	ポンベイ・マハラシュトラ州立英語研修所長	Prof. Saraf (副議長)
イン ド ネ シ ア	マラン英語教員養成所長	Dr. Samsuri
同	バレムバン・スリ大講師	Dr. Halim
イ ラ ン	テヘラン高校教諭	Miss Behnam
日 本	ELEC	高橋 源次(議長)
同	文部省初中局視学官	宍戸 良平
同	静大教授	鳥居 次好
同	早大教授	中尾 清秋
同	区立赤羽台中教諭	森永 誠
同	都立深川高教諭	新井季久子
ク メ ー ル	文部省視学官	Mr. Tes
韓 国	文部省教科書係長	Mr. Kim
ラ オ ス	文部省涉外部長	Mrs. Luang
同	ビエンチャン師範大英語部長	Mr. Phom
マ レ ー シ ャ	文部省視学官	Miss Devi
バ キ ス タ ナ		Mr. Qureshi
フィ リ ピ ノ	ケソン市学校局視学官	Mrs. Bernabe
シンガポール	文部省視学官	Mr. Low (記録係)
タ イ	文部省視学官	Mr. Durr
ベ ト ナ ム	サイゴン学校教師	Mr. Le

2. コンサルタント (2名)

(発題講演・助言)

米 国	ミシガン大教授	Dr. Wardhaugh
英 国	エセックス大教授	Dr. Strevens

3. オブザーバ (外国人 5名)

シ ン ガ ボ ル	研修所長	Mrs. Tai
ハ ワ イ	CCEJ 会長	Dr. Brownell
同	東西センター	Dr. Bickley
イ ラ ン	テヘラン教員養成所英語部長	Dr. Strain
英 国	ブリティッシュ・カウンシル英語教育官	Mr. Dunn

4. オブザーバ (リソース・バースン) (随時) 準備委員会委員

III. 開会式と役員

開会式は全員着席、曾田ユネスコ教育課長の開会の言葉ののち、西田幾久三ユネスコ国内委員会事務総長 (Secretary General, Japanese National Commission of Unesco) による開会の宣言と式辞があった。総長は、はるばる参会された専門家、講師に対する心からなる歓迎の意を表したのち、各国相互理解の伸展のために英語教

育が如何に重要な役割を果たしつつあるかを強調され、アジア諸国の専門家が相寄り各自の問題を語り合い、情報の交換をすることは寛に時宜に適したものなることを、明快な英語を以て強調された。参加者の自己紹介があつたのち、役員の選挙が行なわれ、議長には高橋、副議長にはインドのサラフ教授、記録係にシンガポールのラウ視学官が選ばれた。続いて会議録起草委員としては、シンガポールのラウ視学官、インドのサラフ教授、インドネシアのハリム博士、タイのダー視学官、中国の楊教授、フィリピンのバーナビ女史、早大の中尾教授の7名が指名されて会議運営の顔ぶれが決まった。

ひき続いて開会講演にうつり、議長の紹介を受けて両講師はおよそ次ぎのような概要の講演をされた。

IV. 講演要旨

ミシガン大学教授同 E L I 所長ウォードハーフ博士の講演題は *Some Remarks on Foreign Language Instruction* で、eclecticism の必要を説かれたものである。

外国語教授において言語学の重要なことはいうまでもないが、その他の要素も無視できない。殊に学習者とその社会の地域的必要な認めねばならない。その意味で、英語教授の目的が先ず確立されねばならない。

警戒すべきことは、言語学と言語内容に対する過当強調である。言語、言語構造、言語学習に関する1960年代の傾向に対して、今日これとは異なる理論に樹つ言語観が現われてきてている。すなわち 1957 Noam Chomsky の出現以来可成りに言語観が変化した。しかし彼の見解にはなお警戒中というのが偽らないところである。従って言語構造を深層、表層の二面から見るとても、今日の言語学者は言語行動を rule-governed, creative behavior と見るのである。

外国語教授が言語学の影響を受けていることは認めても、外国語教授とは言語学の教授に非ずして、目標・目的にそし言語能力の養成に他ならないのである。目標・目的は各國各様である。北米においても同じことがいえる。言語学は言語教育というものの一小部分に過ぎないのである。実力養成のための教授法であつて、それが eclectic になってきているのである。折衷主義とは a variety of methods を試みることであり、no single solution ever works all the time という前提に立つものである。その立場で各 homeland の英語教育の改善のために討議したいものである。

次ぎはエセックス大学ストレベンス博士の講演で、*The Teaching of English in Asia: How Can We Maximise*

Success and Minimise Failure? の題で極めて即実的な講演であった。

アジア各国に通用する single approach はない。そもそも英語教育は complex な要素を含みそれに対する single recipe はない。各国の相違する要素、経験と研究より受ける利点、教師及び生徒の問題を考えてみて教師論に達したいと思う。と先ず講演の目標設定から始められた。

第一は、各国各様の点である。その点で 4 つの要素が考えられる。(1) 各国民の知的生活における英語の位置と教育における有用性、(2) 英語教育の目的、(3) 英語教師の地位、(4) 各国の経済的、技術的発展の水準である。

これら各国各様の要素に対して過去の経験と研究の結果が一様に各国の教育に影響を与えていた。即ち言語学習理論、教授法、教授組織の三方面である。

外国语学習はかつては elite のすることであったが、今日では誰でも機会が与えられれば学び得るようになった。

教授法については、教育は教師と生徒の共同作業であること、学習が実用性をもつてることに留意されてきている。

教授組織については、長期間の薄手の教育よりも短期間の集中教育の長所が認められ出している。また幼児教育必ずしも優れているとはいえない。成人の英語教育の長所が認められ出し両論ある。即ち年今は open であって、学習の theory よりも教育の policy に依るところ大なるものがある。

教師論については、教師なしで (without a teacher) 学ぶ者もあれば、教師(の良否)にかまわず (in spite of a teacher) 学ぶ者もあるが、大体は教師のおかげで (because of a teacher) 学ぶ。師弟関係は複雑ゆえ教師の役割を述べることは容易でないが、その点は措いて教師論をすれば、opportunity を恵まれれば学習できるものであるという信念に立っていえば、教師は最有效的の機会を与えるためには、(1) 教師自身の personality and attitudes、(2) teaching techniques、(3) command of the language の 3 領域においてかなりの標準に達しているべきである。勿論完璧はのぞまないまでも、minimum standard には達すべく努力したいものである。

第 1 の personality の点でいえば、生徒に対してせめて最低程度の compassion and sympathy, tolerance, 授業に対する挺身、生徒の信頼をもちたいものである。これらの minimum levels を超え、humour, vitality, intelligence があり、指導的精神力 (charisma) があるな

らば良教師といえる。

第 2 の教授技術についても、同様に minimum familiarity が必要であるし、第 3 の教師の英語実力についても同様 minimum command が望ましい。少なくとも教室内の英語は reasonably intelligible and error-free でありたい。こうした最低標準に達しておれば、年と共に上達していくものである。

最後に、英語教育は 3 種類の人間関係の上に立つ。教師、生徒、支持者の三位一体に教育が成り立つ。支持者というのは校長、教頭、視学官、助言者、教材著者、教師訓練者ら一切の supporter を指すのである。

V. ナショナル・リポート

予め配付されてあった各国の英語教育現状報告に基いて要点説明がなされ、そのあと討議にうつった。ここでは、特にとりあげられた点で日本の立場から見てこれはと思うものだけ摘記しておく。

アフガニスタンの問題は教材の不足と英語教師が more lucrative profession へ転職する傾向である。

中華民国の中学校英語教師 6,000 人の中 3 分の 2 は無資格であるという。

インドでは中等教育で 3 種類の言葉を学ぶ—regional language, national language, English であるが、小学校では母国語が普通で、州によっては英語のところもある。

インドネシアでは、大学参考書のほとんどが英語または他国語のものばかりである。

イランでは、英語を西洋の科学・技術知識に対する鍵と考えているが、教材、指導書の不完全が問題である。

日本は「指導要領」(英訳)が配布されていたので、それに言及しながら質疑応答。

クメールは仏語が主要語で、up-to-date な知識を得るために第二外国語としての英語の教育に新たな熱意を示している。

韓民国では現職研修 240 時間の 60% を英語に当てる。

ラオスは英語の実用的能力の養成に全力を傾けている。

マレーシアでは英語が second language となり、英語研修は Regional Centre に任せきりにせず、強化していく必要を切感している。

フィリピンでは、nationalism の復活に伴い、教室用語が母国語になりつつあるが、英語が選択語ではない。その点で、bilingualism が可能的な解決の鍵になろうとしている。

シンガポールでは Malay, Chinese, English, Tamile の 4 国語が話されているが、就中英語の需要が盛んである。

タイでは教員資質向上が急務である。いわば、英語教育の懷疑時代で時間削減とか、選択制とかが、論じられている。ナショナリズムの台頭によるものと考えられる。

ベトナムでは仏語の地位が牢固たるものがあるが最近英語が同等の footing を得るようになってきている。

VI. 問題の検討

英語教育問題の原点はやはり man, material, method の 3 M's につきるものであることが、ここでもまた確信づけられた。もちろん management の問題もあり、money も考えねばならない。けれども教育本来の要素はやはりこの 3 つにある。会議でもおのずとそれにしほられた形になった。理論よりは実践に即して各国の熱心な体験報告が交わされた。

1. 内容と教材

(1) Programmed Materials は問題解決の大きな役割を果たさない。内容と skills を教えることが英語教育である点から見て、これは particular aspect at any one timeだけ扱うのでは不適当である。

(2) Structural Approach と Situational Method については、前者は mechanical であること、初年級では後者がよいと考え、然らば best method は何かを論じた。両者が適当に用いらるべきである。場の設定のために situational method を用い、次いで構造を訓練して基本的 pattern を教えこむことがよい。

(3) 教師訓練の教材については、教師が unimaginative であれば guidelines を示した教材を要するが、教師の水準が高くなる程そうしたものが必要である。集中訓練の後 radio program で follow-up する方法をとることもよい。

(4) 教材の検討が不斷になされその内容等の改善を心掛けるべきである。

2. 教授法と教授技術についてフィリピンの Bernabe 夫人が発題者となり討議が展開した。

(1) Methods と techniques の objectives が明確に設定され、次ぎに教材の適否、教授法の心理的側面、教授法とその背後にある rationale に対する教師の認識が肝心であること、視聴覚器具の利用の方法が論じられた。

最善の教授法は社会的背景に拠るところが多い。例えば aims によって approach が決定され、approach が

method を規定する。Oral communication の要求に応じた例として日本が挙げられた。

Approach と presentation の区別が必要である。前者は the way one would look at language であって後者は methods and techniques から成るものである。Linguistic theory が language teaching ではないから言語理論の変換は問題の解決ではない。

National goals を目指して教室の大小、時間配当、課程の進度・軽重等について何れを優先させるか、その priority を考えるべきである。

(2) 視聴覚補助教材については、鳥居教授が発題者となってこれの follow-up activity としての有用性を挙げた。しかし audio-visual aids が panacea とはならぬこと、hardware の高価なこと等に言及して、maintenance の適正、software の供給度、技術員の有無の 3 点を論じた。

3. 教師の訓練については台湾の楊教授と鳥居教授が発議し、教師にとって descriptive linguistics と theoretical linguistics のどちらが有用か、また現場教師にとって linguistics がどの程度必要なのかを論じた。教師及び教師養成者にとって言語学の位置如何については、理論の基礎が教師養成の一部であるべしとの意見に対し、現場にとって not very useful であるとの見解が強かった。

現職教育については、methodology に重点をおくべきか、command of English の増強を心掛けるべきかが論じられた。この methodology か、proficiency かの問題は地域差と教師の水準に依るとの意見に一致した。また現職訓練に送られる教師は普及実力のあるのが良いこと、teaching demonstration は一度や二度では役に立たぬこと、follow-up が必要であること、それには出版物、短期の orientation course 等が考えられることについて討議された。

VII. 地域協力 (Regional Cooperation)

については、議長の指名で、シンガポールの RELC 所長タイ女史が地域協力の必要性を強調したのに対して、現存機関の拡大の可能性か、新機関の創設か、について論じた。RELC の如き現存機関が clearing house の役目を果たし、各国研究のため資料蒐集をするとよい。教材・テスト作製に対する協力、vocabulary test 作製の協力の可能性等論じあって、常設センターの必要性が強調された。

VIII. 提言と勧告 (Suggestions and Recommendations)

(I) Aims and Objectives

1. 各国は、英語教育の理由を明確にして、達成目的を明示せねばならぬ。目的は、教師及び財源について realistic であるべきである。

2. 目的・目標は隨時 review さるべきである。

(II) Methods and Materials

1. 現行の教授法と教材は多様であるが、何れをとっても完全とはいえないし、改訂を要するものが多い。教授法の選択と教材の著作に注意し、目的・目標の達成に合致しているか、教師の能力、生徒の興味に適応しているかに留意すべきである。

2. 教材の適正は教師の能力と養成にかかる。教授法は flexible で imaginative なるが望ましいが、訓練不十分の教師に対しては厳密に control した教材が必要である。教師養成の機能を果たすように意図された教材も必要な場合がある。

3. Syllabus と technique は有効に使用されるように realistic に作製されておらねばならない。

4. 教材の再検討と改訂は目的・目標と同様肝要である。

(III) 教師養成 (Training of Teachers)

1. 職業的訓練には、教師の英語力の competence、言語及び言語学習の本質に対する理解、専門的技術の訓練の3点に留意する。

2. 教師の pre-service training を強め、in-service training によって補い、よく follow-up させる。これら訓練は、全教員が職歴中数回受けるようにする。

3. 言語能力なり教授能力の refreshing に加うるに、教師の enthusiasm を増強して教師の専門家精神の強化に資するように現職訓練を配慮する。

(IV) 教授組織 (Organization of Teaching)

1. クラスの size を小さくすること、教師の養成と英語実力との改善が第一義である。

2. 他国の実験に注目すること。

3. 情報の蒐集、新知識の採用に留意する。それには自己の勤務を通じることと、教員の協会・学会、及び全国・地域センターを通ずる3通りが考えられる。

4. 全国協会・学会組織を大いに利用すること。できれば、その場合国際的の協会・学会と提携すること。

5. 既存の RELC とか、Hyderabad の CIE (Central Institute of English)、米国の Center for Applied Linguistics、英国の English Teaching Information Centre その他の組織を利用して重複のないようにする

こと。

6. M. Andre Lestage による UNESCO の initiative (教育における社会文化的、言語的諸問題に関する計画を含む) を歓迎し、是認する。

(V) 新知識 (New Developments) について、言語教授の職業は static ではない。教育対策、教授法、教材作製、言語学、心理学、その他英語教授に関する分野における新発見なり、新思想の発表が最近において著しいものがある。各国が、不斷に new developments に刮目し、教師に情報を提供し、改善を助ける新研究はこれを try out し、効率的學習の目的に向かって不断に接近しつつ、教職を進歩的で前向きの職業たらしめるように心がけ、準備を怠ってはならない。

(VI) 地域協力 (Regional Cooperation)

1. TEFL, TESL を問わず、アジア地域の協力が望ましい。この点においては SEAMEO に属する RELC は参考になる。

2. 現在の RELC の如き地域機関が、その業務を拡大することがよい。RELC は既に non-member countries に施設の利用を認めているし、associate membership の希望も歓迎している。

3. アジア地域の共通問題の解決のために、より一層協力の実を挙げる可能性を探求することが肝要である。

IX. 反省と展望

3年がかりの会議を成功裡に終わって、ただ感激あるのみである。このことは閉会式の式辞の中でも私が申述べたことであるが、各参加国と参加者の協力は勿論のこと、西田事務総長、曾田教育課長の尽力と厚意に対して深甚の謝意を表わさねばならない。これは会議の成功ということばかりではない。わが国英語教育史における正に画期的 event であるからである。

会議の成果は、しかし、今後に問わるべきものであろう。花々しい国際会議のあとには地味な教育の現場が待っている。そしてそれが息の長い現場である。会議によって与えられた幾多の教訓を実教育に生かさねばならぬ。

会議参加者はみな英語で討議したのであるが、専門家だけあって実に流暢な発言であり、機敏な質疑応答であった。文化も違えば、国情も違う、各国の専門家が共通語の英語で発表しあうこと自体に大いなる意味のあることをも再確認できたのである。

TEFL の国もあれば、TESL の国もある。日本のように homogeneous な国柄ではとても想像できぬほど (p. 59 へつづく)

新刊紹介

『ニューヴィスタ英会話シリーズ』<発想別>

この英会話テクストは、これまでのものといちじるしく異った特色をもっている。たいていの英会話テクストは、場面や話題を設定してそれに応じる表現を記憶練習させるというのであるが、いざ実際の場に臨むとなかなか記憶したものがそのまま使えないものである。そこでこのテクストでは積極的に自分の考えや感情を表現する力をつけるために、発想別表現学習という考えに立ったのである。

このねらいを達成するために、各課を ①「発想と表現」 ②「寸劇 (1)(2)(3)」 ③「Exercise (1)」 ④「Exercise (2)」 で構成し、①では解説と例文を②では寸劇 (1)(2)(3) で場面、情況、人物などを変えることによって同じ発想がいろいろに応用できるようにし、③では表現練習を④では寸劇中に出てくる重要語句を使っての口頭作文練習をさせるようになっている。

寸劇はいずれも興味あふれるもの

ばかりで、楽しみながら聞く力がつくようになっているし、解説や例文のところも適切で要を得ている。また課毎についている「ことばの背景」の頁もなかなかおもしろくためになる。要するに楽しみながら力のつくようにくふうされたテクストといえるであろう。ただしかなり高い程度のものまで含まれているので、初学者向きというよりは、ある程度英語の予備知識をもった人々に向くであろう。〔カセットテープ3巻付 1, 2, 3編著者：長谷川潔ほか5氏 三省堂発行、各￥5,500〕

(Y. M.)

(p. 58 よりつづく)

の、言語問題の重荷を背負って集まった専門家達である。われわれ以上に困難をもっていることであろう。けれども、国際語としての英語の伝達力をつけようと日夜苦心している点では同じである。これを契機にいよいよ啓発しあい、力づけあっていきたいものである。そのためには、この会議の第二回が、アジアのどこかで、近い将来に、開催されることは参会者全員の切望するところであった。

わが国の英語力も国際水準に達していることを参加者の力強い発表や、質疑応答で示されて、自信をつけられたことである。さらにまた教育資源が、人的にも物的にも、恵まれている日本という感を受けたことである。しかし、現状に満足せずにさらに前進したいものである。各国に共通する、国際伝達の手段としての英語のありかたが切実に感得せしめられ、英語教育理強に対する確信をもられたことがありがたい。

それにつけても、言語活動としての英語の実力増進強化に精進したいものである。それでもってアジアが手をつなぎ、世界が触れ合うことのできる英語の国際性を実証したこの会議が、英語教師の光榮ある役割を覚えしめるものである。

感銘をもって会議の概要をした今、あらためて、参会者の姿が彷彿としてくるのを禁じえない。この関係もまた世界を結ぶ絆である。大事にしたいもう一つの賜である。あらためて協力を感謝し、お互いの健闘を祈ろう。

(ELEC 英語研修所長)

(p. 60 よりつづき)

な仕事をしているなと感心した。私は日本の音声学学習者の1人としてけんきょに大家や若い学徒やその他の人々の発言を拝聴して、私たち日本人の仕事のことと比較し、今後の励みとする一方、また研究作業への反省の具としたいと思っている。

(東京工業大学助教授)

(p. 62 よりつづき)

of Oriental and African Studies で言語分析に従事して、「prosody 研究」という独自の言語理論を主唱した。断片的で、難解であり、日本では知られていない原論文が26頁にわたって簡潔に紹介されている。

英国音声学の第3の特色は音調(intonation)の研究である。Sweet, Palmer, O'Connor, Arnold, Halliday たちが中心となって重要な研究発表をしている。

著者は各学派、各音声学者の学説の essence を系統的に述べ、研究の歴史の流れを鋭い観察眼で大観している。あっさり目を通して読者の頭に入るような平易なものではない。よほど努力して勉強しない限りは歯が立たないであろう。この書物は音韻論知識のまとめに最適と考える。ほかに色々と読んで、その総括として本書につきたい。もう一つの方法はこれで主流を頭に入れてから、自分が興味をもつ方面に向うことである。巻末の詳細な注も参考文献も、読者の研究心をそそらずにはおかない。

(横浜国立大学教授)

第7回 国際音声科学会議のこと

ABE, ISAMU
安 倍 勇

この会議（英名は VIIth International Congress of Phonetic Sciences）は 1971 年 8 月 22 日より 8 月 28 日までカナダのモントリオール市にあるモントリオール大学 (University of Montreal) 及びマギル大学 (McGill University) で開催された。第 7 回とあるのは既に過去において欧州でこの種の会議が持たれているからである。第 1 回から 3 回までは 30 年代でそれぞれアムステルダム (1932 年) ロンドン (1935 年) ゲント (1938 年) で開かれ、あとは戦後となり第 4 回から第 6 回まではそれぞれヘルシンキ (1961 年) ミュンスター (1964 年) ブラハ (1967 年) で開かれている。今回ははじめて太西洋を渡ってカナダが主催国となったわけである。次回は再び欧州に舞台が移りイギリスのリーズ (Leeds) にて開かれることに決定した。

この会議はその名称の示すように音声学 (phonetics) の持つ種々の問題点を論議する会議であって、実に多様な角度から音 (聲) そのものの持つ aspects をテーマとしている。

国際音声科学機構は 1932 にアムステルダムで設立され、会長はロンドン大学の Dr. D. B. Fry である。文字通り “国際” であって評議員は世界各地の権威の顔を揃えている。

さてスペースの関係でただちに今回の会議模様を思いつくままに報告してみる。会議のテーマは純粹理論；音響、生理音声学；音声の韻律的な研究；各国語の音声研究；発音治療、矯正研究など多彩であった。会議は総会と部会にわかれていて午前中は 30 分の研究講演があり、これに数名の discussants が加わって特定のテーマについて議論があり、午後は部会でこれは A, B, C, D, E と 5 つにわかれていて発表者は 1 名 10 分の研究発表を行ない、それに対して 10 分間の質疑応答の時間があった。朝 9 時から 4 時近くまで部会が同時進行し、加えて 2 日間は更にそれに続いて自由討論の時間が設けられていて、発表者の実数は私はまだ数えていないが、とにかくプログラムを一見しただけでも何百人というものすごい数であった。それに加えて聴衆があるのだから音声学もここまで大きな会を持てるようになったかとただただ感心し

た次第である。

そんな大きな会などでとても全部の発表を聞いて歩くことは出来ないので、自分の求めているものを休み時間になるとあの部屋この部屋と移動して歩くわけである。Sections A, B, C, D, E での研究発表がどんなものかのほんの断片的にタイトルで示すとたとえば次のような工合である。(A) H. & P. Hollien (U.S.A.), A cross-cultural study of adolescent voice change in European males (B) H. Mol (Netherlands), Acoustic theory of the parrot (C) S. K. Ghosh, Nasalization in Bengali (D) C. Adams (Australia), English speech rhythm and the foreign learner (E) J. T. Jensen (Canada), Hungarian evidence for abstract phonology と無差別に一寸書きぬいただけでも全く多彩なテーマがとりあつかわれている。この発表及び質疑応答その他は *Proceedings* として大冊となってやがて刊行される予定である。

私は文部省から派遣されてこの会議に出席し、他の日本人の出席者と共に司会役をつとめる討論会に出たり、あちこちと研究発表を聞いてまわったり、また自分の短いペーパーを読むなど、あっという間に 1 週間の会議が終わった。会議の本当の性格と効果は私が帰国してから現われはじめ現地でなじみになった外国の学者の何人からいろいろと学問上の問合せがあって、けっこう忙しい思いをしている。

ご存知のようにカナダは英仏両語が公用語で、発表者はこの両語が使われていたが、やはり統計的には英語によるものが多かった。

会場では同時通訳の設備も有料で利用出来るし、また会場の音響効果も大体において満足的であった。昔より以上にカセットテープレコーダーなどで発表者の声をそのまま録音したりしている人（私もその 1 人）があちらこちらに見当り、秋のなごやかな気候を思わせるが実は夏のこの会議は大成功であったと思う。会場にはトロント大学 Léon 教授が熱を入れている音声直視器なども展示されまた出版社がいろいろと音声学関係の文献を展示していた。カナダも音声学では予想していた以上に立派

(p. 59 へつづく)

『音韻論』

(英語学大系 第1巻)

小泉保・牧野勤著 大修館書店

xvii +380p.p., 約 1,400

OGURI, KEIZO
小栗敬三

まず目次によって内容を紹介する。

前半は小泉氏による「ヨーロッパの音韻論」であり、
プラーグ学派音韻論、コベンハーゲン学派音韻論、ソ連
音韻論の3項目に大別される。

プラーグ学派音韻論

1. 音素の設定
 - 1.1 音韻的対立 (phonological opposition)
 - 1.2 音素 (phoneme) の設定方法

2. 音素の体系

- 2.1 対立の分類
- 2.2 母音の体系
- 2.3 子音の体系

3. 音素の頂点的機能

- 3.1 頂点的 (culminative) 機能
- 3.2 韻律的特徴

4. 音素の中和

- 4.1 中和現象 (neutralization)
- 4.2 原音素 (archiphoneme)
- 4.3 中和と関与的 (relevant) 特徴
- 4.4 英語の中和現象

5. 音素の結合 (phoneme combination)

6. 音素の限界的 (boundary) 機能

7. 音響音声学 (acoustic phonetics)

- 7.1 Jakobson の理論 (批判, 7.4)
- 7.2 含立の法則 (implicational laws)
- 7.3 音響音声学の音声分析

8. 史的音韻論

コベンハーゲン学派音韻論

1. 言語の層

- 1.1 Phonematics (音理学)
- 1.2 言語層

2. 分析理論

- 2.1 言語理論
- 2.2 分析原理

3. 音節

- 3.1 音節の分割
- 3.2 同形異性 (isomorphism)
- 3.3 音節の構造
4. 韵律素 (prosodeme)
 - 4.1 アクセント
 - 4.2 抑揚 (modulation)
5. 音素目録 (inventory)
 - 5.1 音素の抽出
 - 5.2 弁別的素性 (示差的特徴)
6. 音素体系
 - 6.1 音素体系の規準 [融合 (syncretism)]
 - 6.2 英語の子音体系

ソ連音韻論

1. 音素分析
2. 二段階説音韻論

音韻論におけるプラーグ学派の名は戦前からも知られているが、詳細に紹介されたのはこれが最初である。Trubetzkoyを中心とする学派の音素の学説が明快に解説されている。このことを著者は「はしがき」で「本書が初めてプラーグ学派音韻論の全貌を伝えることになるだろう」と自信を以て述べている。なお、以下、主として「はしがき」から引用して述べる。

全体として Trubetzkoy (主著、英訳 Principles of Phonology) の理論を骨格として、これを Trnka の英語分析で肉付けしてある。なお Jakobson の学説がプラーグ学派の流れからどのように進展してきたかを明らかにした。Glossematics (言理学) では H. J. Uldall の代数的記述が基調をなしている。ただし、英語学大系シリーズ中の一冊なので、英語に関する問題を多く論じてある。

全 208 頁の中で、半分以上の 128 頁をプラーグ学派の記述にあててあり、ここに重点を置いた詳細な説明はきわめて有益で教えられるところが多い。後半の「イギリス音声学」と共通の参考文献 (16 頁)、術語対照表 (10

直), 人名・事項・語句の3項目別の索引(24頁)は便利であり、読者に親切にできている。

後半は牧野氏執筆の「イギリスの音声学」である。

1. 序論

2. イギリスの素記派音声学者 Henry Sweet

2.1 現代の Sweet 評価

2.2 Sweet と IPA(万国音標文字)

2.3 Sweet の簡易・精密 Romic

2.4 Sweet の音素観

2.5 Sweet の英語発音の分析

3. イギリスの表記主義者 Daniel Jones

3.1 表記主義者(transcriptionist)としての Jones

3.2 Jones の簡易・精密表記(transcription)

3.3 Jones の音素観

3.4 Jones の英語の発音の分析

3.5 Jones の類音(diaphone)

4. イギリスの表記主義者 A. C. Gimson

4.1 表記主義者としての Gimson

4.2, 4.3 Gimson の Jones 批判・修正

4.4 /VS/(母音と半母音)分析への Gimson の批判

4.5 Gimson の英語発音の分析

5. プロソディー分析(prosodic analysis)

5.1, 5.2 初期・後期の J. R. Firth

5.3 Firth の英語発音の分析

5.4 Firth 以後のプロソディ(prosody)分析

5.5 J. C. Wells の英語発音分析

6. イギリスにおける音調研究

6.1 Sweet の英語音調の分析

6.2 H. E. Palmer の英語音調の分析

6.3 O'Connor-Arnold の英語音調の分析

6.4 M. A. K. Halliday の英語音調の分析

(p. 335 Halliday はミスプリント)

“significant distinction”(p. 354, 220 その他)この“significant”は important のほかに, having a(special) meaning の意味に用いられることがあると思う。もしそうだとすると、「大切な区別」という訳語はあてはまらない場合があるのではないか? “received pronunciation”(p. 354, 236, 他)「認容発音」は「容認発音」と訳されることも多い。“intrusiver”的訳「嵌(?)入的 r 音」はむずかしいが, 定訳である。

前述の術語対照表を読んで、多くの術語を覚え、あるものは再確認し、二、三の語ではもっとよい訳があるのでないかと考えた。そのいくつかの例を並べる。ceneme 表現素, cenematics 表現論, prephoneme 準音素, chroneme クロニーム(適当な訳語は考えられない

ものか), chuitant シュ一音, disjunction 排反, disjunctive 疎な, equipollent 等価的, esponent 指数, figura 記号素, fusion 合立, idiolect 個人語, isomorphism 同形異性, lexis 語い論, modulation theme 抑揚主体, morphoneme 形態音素, onset 音節頭, operand 被作用体, paradigmatic 選択的, patents 開音, phonematics 音理学, phonemoid 音素類, pleromatics 内容論, plereme 内容素, prosodeme 韻律素, protensity 持続性, rhotacization r-音性, sonorant 自鳴音, syncretism 融合, syntagm 統合素, tonicity 主音調の位置付け; ((Saussur)) signifiant 能記, signifié 所記, phonactics 音素配列論, phonaesthetic 音美的, implication 含立, functive 機能体, ictus 強音部, commutation 交換, construct 構成体, diffuse 散音, anthropophonic 人体音声的, culminator 頂点素, culminatoid 頂点素類, differentoid 弁別素類。

“variant”は場合によって「異音」、または「変異体」となる。(cf. invariant 不変体) “stop”は従来は「閉鎖音」と訳されてきたが、本書では「閉音」であり、閉鎖音と鼻音を含むものとされる。(p. 65) “bilateral”(p. 347, 367)は“pertaining to or affecting both sides; two-sided”(Random House Dictionary)の意味だから「双方的」の訳はよくわかるが、なぜ「一元的」となるのか理解しにくい。

対照表と索引に見られる次のミスプリント(どれも些細なもののだが)再版で訂正してほしい。contextually (→ -lly) p. 348, extention (→ -sion) 350, lateralization (351, 訳語なし), Phonetic Teacher's (→ -ers') Association 353, therapeutic 355, かぶせ～suprasegmental (→ -mental) 360, 還元の原則(principle of reduction → prin-) 362, 形態音素(morphoheme → -neme) 363, 弱化的(reductive → reductive) 365, 中和的対立(neutralizable opposition → oppo-) 368, 非限定関係節(non-defining... → defining)。

イギリスの音声学

著者によれば、イギリスの音声学の一特徴は表記主義(transcriptionism)である。英國言語学の伝統の中には正書法(orthography), 細字改良(spelling reform)への強い関心があった。Jones を始めとする英國の音声学研究に大きな影響を与えた Sweet の業績は今日もっと見直されてよい。Sweet の表記重視の傾向は Jones に受けつがれている。発音記号や発音教育の問題に主な感心があった主流の学者たちに対して、一人特異な存在であったのが Firth である。彼はロンドン大学の School

(p. 59 へづく)

展望通信

◆第7回 ELEC 英語教育研究大会

11月6日(土)ELEC会館において、第7回ELEC英語教育研究大会が下記の通り開催された。

1. 講演

“Japan and the English Language—the Years Ahead”

Dr. Douglas W. Overton (Former Executive Director, Japan Society, New York)

「英語教育と文化」

斎藤勇博士(東京大学名誉教授)

2. 授業実演

浅野高等学校3年 指導者: 石川喜教氏

3. 専門部会

課題: 「英語学習における言語活動の諸問題」

<中学校部会>

問題提起: 大貫辰雄氏(杉並区西宮中学校)

永尾光史氏(東大付属中・高)

司会: 山本庄三郎氏(ELEC研修部次長)

助言: 山家保氏(ELEC研究開発部長)

<高等学校部会>

問題提起: 田村泉氏(都立羽田高校)

桃山和雄氏(都立紅葉川高校)

司会: 大友賢二氏(ELEC研修部次長)

助言: 松下幸夫氏(ELEC教務部長)

◆1971年度 ELEC賞の授賞

1971年度のELEC賞は、中学校から高等学校までの6年間同一生徒にOral Approachによる指導を行ない綿密な記録をのこしている石川喜教氏に授与された。

「Oral Approachによる授業の実践」

石川喜教氏(横浜市浅野高校)

なお、おしくも賞の授賞にならなかつたが、佳作としてつぎのものが選ばれた。

「Oral Approachと共に12年」

松本衛氏(旭川市立聖園中学校)

「学習活動と言語活動とのギャップを埋めるための授業研究」

吉田正保氏(新潟市立関屋中学校)

山作令子氏()

宮山弥生氏()

◆ELEC 月例研究会

ELEC会館において行なわれている月例研究会はつきの通り開催される予定である。

1月29日(土) 午後2:30~4:30

“The Stream of Speech”

早稲田大学教授 五十嵐新二郎氏

2月26日(土) 午後2:30~4:30

「語彙の拡大」

ELEC英語研修所講師

Mr. Clifford V. Harrington

3月25日(土) 午後2:30~4:30

「外国における英語教育」

東洋女子短大教授 星山三郎氏

◆ELEC 海外留学英語試験

ELECでは、海外留学希望者、TOEFL受験者、海外出張者等を対象に、英語能力検定・診断・指導等を2月25日(金)に行なうことになっている。受験希望者は「ELEC 海外留学英語試験係」宛に要項と願書を請求されたい。

◆ELEC 奨学研修コース

ELECの奨学金による、中学校および高等学校の教員を対象とする「ELEC 奨学研修コース」は9月10日から12月10日まで開かれ、中学高校それぞれ10名の教員(前号既報)がこのコースを修了した。

このコースの主な授業内容はつきの通りであった。

1. 英語運用能力の訓練	202時限
2. 英文法演習	12 "
3. 音韻論	12 "
4. 英語教授法	53 "
5. 実演授業および授業実習	20 "
6. 特別講義	34 "
7. 研究討論会	6 "
8. 教科外活動	

(1) 授業参観(浅野高校・川口市立仲町中学)

(2) 研究大会参加

ELEC英語教育研究大会

Robert Lado 講演会

なお、特別講義の講師はつきの方々であった。

ELEC英語研修所長 高橋源次

東京教育大学名誉教授 成田成寿

津田塾大学教授 中島文雄

東京教育大学教授 太田朗

ハワイ大学助教授 比嘉正範

British Council Jean-Jack Dunn

国際基督教大学教授 清水謙

お茶の水女子大学講師 國弘 正雄
ELEC 常務理事 武藤 義雄

◆ELEC PUBLICATIONS

ELEC 創立15周年を記念して *ELEC PUBLICATIONS* の第9号が4月に発行される予定である。収録論文の主なものはつぎの通りである。

Hill, Archibald A., "A Defense of the Audio-Lingual Method in Tesol"

Scott, Charles T., "Literature as a Type of Second Language Interference"

Strevens, Peter D., "The Teaching of English in Asia: How Can We Maximise Success and Minimise Failure?"

Tomlin E. W. F., "English as an International Language"

Wardhaugh, Ronald, "Some Remarks on Foreign Language Instruction"

Hattori, Shiro, "Humanity, Individuality, and Society in Relation to Language and Culture"

Nakajima, Fumio, "Shakespeare and the Japanese Language"

Narita, Shigehisa, "Japanese Teacher of English, a Memoir"

Ota, Akira, "Modals and Some Semi-Auxiliaries in English"

Takahashi, Genji, "Hsün Tzu, Dogen, and St Paul on Human Communication"

◆English Teaching Forum の配布

昨年1月まで、日本にあるアメリカ大使館を通して配布されていた USIA 発行の英語教育専門誌 *English Teaching Forum*(隔月刊)は、この1月から ELEC を通して配布されることになった。世界の英語教育の現況をつたえる好い雑誌として識者から高く評価されている *English Teaching Forum* が再び日本でも配布されることは英語教育界にとっての福音であろう。購読料は年額1,000円(含送料)であるが、希望者は ELEC 出版部 ETF 係へ申し込まれたい。なお、第10巻第1号(1972年1月発行)の若干の残部については、見本として希望者(先着順)に無料で配布することになっている。

◆原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。内容・分量とも制限がありません。ただし未発表のものに限ります。掲載分には規定の稿料をお贈りいたします。

◆誤記の訂正

本誌前号60ページに、池上嘉彦氏が『英詩の文法—語学的文体論』によって市河三栄賞を受けられた書いたのは誤りで、同氏が市河賞を授与された論文は *The Semological Structure of the English Verbs of Motion* (1970) でありました。お詫びして訂正します。

編集後記

◇あわただしい国際情勢の変化の中で迎えた1972年。あけましておめでとうございます。『英語展望』も「国際的視野と感覚の養成」を目標にして編集を始めてから2年の歳月がたちましたが、本号ではそれにふさわしい記事として、國弘正雄先生の企画により「世界の中の日本とアメリカ」を掲載することができました。この中で、日本が平和国家として世界の荒波の中で生き続ける道は、なによりも世界の人々とのコミュニケーションにあるということ、そのために日本人はもっと英語を勉強しなければならない、そして外国のことを深く理解すると同時に、日本を外国に知らしめる努力をしなければならないということが述べられておりますが、ここに英語教育の第一義的な目標があるように思います。

◇ここに登場する Gerald Curtis さんは1940年ニューヨーク生まれで、現在はコロンビア大学の政治学助教授の肩書をもっておられる方であるが、日本では彼の学位論文『代議士の誕生』(Election Campaigning Japanese Style)で多くの人に知られている日本学者。彼の流暢な日本語は、テレビの座談会などに数回出ているので、すでに聞かれた方も多いと思いますが、我々英語を学ぶものにとっては大きな刺激になります。なお、ここに掲載した彼の発言にはほとんど修正を加えていないことをご参考までに記しておきます。

(Q. Q)

英語展望(ELEC Bulletin)
定価 250 円

第36号
(送料 55円)

昭和47年1月1日発行

◎編集人 中島文雄
発行人 竹内俊一
印刷所 大日本印刷株式会社
東京都新宿区市谷加賀町1の12
電話 (291) 1111 (代表)

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)

東京都千代田区神田神保町3の8
電話 (265) 8911 ~ 8916
振替・東京 11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC